

博士論文

ジャック・ロンドンの中国人観の変化  
—彼の中国もの作品から読み取る—

鹿児島国際大学大学院  
国際文化研究科 国際文化専攻

劉 鵬

2020年3月

ジャック・ロンドンの中国人観の変化  
—彼の中国もの作品から読み取る—

はしがき . . . . . 1

第1章 ロンドンの生涯

1.1. 生まれてから作家になるまでの道のり (貯蓄期) . . . . . 3  
    1.1.1. ロンドンの誕生 . . . . . 3  
    1.1.2. 働き始めたころ . . . . . 4  
    1.1.3. ロンドンが味わった資本主義社会 . . . . . 4  
1.2. ロンドンの文学的成功 (旺盛期) . . . . . 5  
    1.2.1. 作家への道 . . . . . 6  
    1.2.2. 初期の創作活動 . . . . . 6  
    1.2.3. ベストセラー作家と離婚及び再婚 . . . . . 7  
    1.2.4. 日露戦争の取材 . . . . . 7  
1.3. 後期のロンドン(成熟期) . . . . . 8  
    1.3.1. スナーク号での旅 . . . . . 8  
    1.3.2. カリフォルニアでの農園生活と国内の旅 . . . . . 9  
    1.3.3. 不運と死 . . . . . 9

第2章 ロンドンの中国人もの作品執筆の背景について

2.1. “White and Yellow” と “Yellow Handkerchief” の背景と繋がり . . . . . 13  
2.2. “The Yellow Peril” と “If Japan Wakens China” 及び “The Unparalleled  
    Invasion” . . . . . 16  
    2.2.1. “The Yellow Peril” . . . . . 16  
    2.2.2. “If Japan Wakens China” . . . . . 18  
    2.2.3. “The Unparalleled Invasion” . . . . . 19  
2.3. “The Chinago” . . . . . 20  
2.4. “Chun Ah Chun” . . . . . 22  
2.5. “The Tears of Ah Kim” . . . . . 24

### 第3章 ジャック・ロンドンの創作初期の中国人観について

3.1. 中国人に人種偏見を持つロンドン	27
3.2. アメリカ白人としての人種偏見	29
3.3. 中国人に対するロンドンの独自の見解	32

### 第4章 ジャック・ロンドンの黄禍論-黄禍論の歴史に関わって

4.1. 西欧世界の黄禍論の始まり	37
4.2. ヨーロッパ諸国と異なるアメリカ産の“Yellow Peril”、及びそのジャック・ロンドンへの影響	38
4.2.1. 中国からアメリカへの移民	38
4.2.2. 初期のロンドンの中国人への偏見	40
4.3. ロンドンの中国人に対する人種偏見の始まりとその原因	41
4.3.1. 母親からの影響	41
4.3.2. 社会における誹謗	42
4.3.3. ロンドン自身の原因	43
4.4. “The Yellow Peril” 中の偏見の分析	43
4.4.1. “The Yellow Peril” 中の朝鮮人	44
4.4.2. “The Yellow Peril” 中の中国人	45
4.4.3. “The Yellow Peril” 中の日本人	47
4.4.4. “The Yellow Peril” を書いた時のロンドン	49
4.5. ロンドンの人種偏見の弱まり	51

### 第5章 ロンドンが考えた日中関係と実際の日中関係

5.1. ロンドンが考えた、中国人と日本人の差異が存在する原因	55
5.2. 島国の特質と発生の原因	57
5.3. 日本人は民族的な同質性が高い	59
5.4. 日本人の二面性について	62
5.5. 物事を受け入れ易い日本人と日本社会	64
5.6. 儒家からの影響	67

## 第6章 “The Chinago” から見るジャック・ロンドンの中国人観の変化

6.1. ストーリーの梗概	75
6.2. Chim Soo Kung は阿仇なのか?	76
6.3. ロンドンの中国人に対する差別意識の変化	77
6.3.1. 中国人についての描写上の変化	77
6.3.2. 主人公の名前について	79
6.3.3. 中国人の立場	79
6.4. “The Chinago” から見るロンドンの中国人理解	80
6.4.1. 「一本の花」(a solitary flower) について	81
6.4.2. 「無表情」(impassive)について	82
6.4.3. 「陰鷲録」について	84
6.4.4. 「瞑想と休憩の庭」(garden of meditation and repose)について	86
6.5. 白人による差別の暴露	88
6.6. 東洋思想と西洋思想の差—人種偏見が存在している一つの原因	91

## 第7章 “Chun Ah Chun” から見るジャック・ロンドンの中国人観の変化

7.1. ロンドンの新しい中国人像	95
7.1.1. 目立たない中国人商人	96
7.1.2. 信用できる誠実な人	96
7.1.3. 能力が高い商人	98
7.2. ロンドンが描いた主人公 Chun Ah Chun の家庭問題の真意	99
7.2.1. 生活習慣上の問題	100
7.2.2. Ah Chun の娘たちの結婚問題	102
7.2.3. Ah Chun が望んだ老後生活	105
7.3. Ah Chun と実在した Afong の対比から見るロンドンの中国人に対する偏見	106
7.3.1. 出身の違い	107
7.3.2. 結末の違い	108

## 第8章 “The Yellow Peril” と “If Japan Wakens China” から見るロンドンの中国人観

の変化

8.1. 二つのエッセーの内容の比較	112
8.1.1. 仮説的な表現が多い “If Japan Wakens China”	112
8.1.2. 同じ女性の話の違う解釈	115
8.1.3. 引用文について	116
8.1.4. 優生学の考えが見えない “If Japan Wakens China”	119
8.2. 中国人もの作品からロンドンの変化を見る	122
8.2.1. “The Unparalleled Invasion” —中国人への偏見の頂点	122
8.2.2. “The Chinago” —中国人への偏見が弱まり始めたことのわかる作品	123
8.2.3. “Chun Ah Chun” —中国人への偏見がさらに弱まったことを示す作品	123
8.3. スナーク号での旅、及びそのロンドンへの影響	125
8.3.1. ハワイのアジア系移民	126
8.3.2. 日本人ナカタとの接触	127
8.3.3. 白人種に合わない熱帯気候	128
第9章 “The Tears of Ah Kim” から見るジャック・ロンドンの最後の中国人観	
9.1. 中国の道徳の頂点としての「親孝行」を描く	133
9.2. 中国人の価値観についてのロンドンの理解	137
9.3. ロンドンが描いた Ah Kim の変化	140
あとがき	145
主要参考文献	148

## はしがき

ジャック・ロンドンは、いわゆる〈中国もの作品〉と呼ばれる作品をいくつも書いているが、彼はどれほど深く中国に関心を持って、どこまで中国のことを理解できたのかはほとんど知られていない。ロンドンの作品を挙げてみると『野性の呼び声』、『海の狼』などベストセラーに入る作品があるが、中国もの作品と言われると「黄禍論」、「シナゴ」などがある。なぜならば、ジャック・ロンドンは他人種、特に中国人に対しては人種差別主義者、ファシスト、社会ダーウィニズムの信奉者としての一面が世の中に知られているからだ。しかし、ロンドンが社会主義者である一面も忘れてはいけない。『鉄の踵』、『大きな家の小さな婦人』などの社会主義小説も残されていて、革命に共鳴する論者でもある。ジャック・ロンドンの人生を巡ってみると、彼の人生には矛盾や変化がある。まず、ロンドンは社会主義者を自称し、熱心に社会主義を宣伝したが、自分は社会主義者である前に白人だと供述したし、晩年には社会党グレン・エレン支部を脱退した。自分は金銭のために作家になったと言いながらもアメリカの金銭社会を風刺することも描いた。そして、ロンドンは無宗教と自認しながら、「黄禍論」の中でアメリカ人がキリスト教から生きる指針を獲得することを絶賛した。チャールズ・ダーウィンやトマス・ハーバート・スペンサーやフリードリヒ・ニーチェやカール・マルクスたちは共に、ロンドンの世界観を作る指導者となったので、彼が何を生きる指針とし、それが彼の人種偏見にどんな影響を与えたのかをまとめたい。

ロンドンが最初に賞をとった作品は「日本沖合での台風」で、その後、アザラシ漁で初めて日本に行った時の出来事をいくつも描いた。ロンドンの作品群の中には、特に、旅の中で書かれた、あるいは、旅と関係のある作品が多数ある。彼は、最初の外国への旅ではアザラシ漁で日本に行った、そして、日露戦争の取材でも一回日本に行った、その時、鴨緑江を渡って中国まで来たのだ。その後、彼は二年をかけてスナーク号でハワイやタヒチなど南太平洋を回った。最後の年に、二回に渡ってハワイで休養した。これらの旅の中でいくつの中国もの作品を書いている、旅に出る前の調査と旅の中での見聞で彼の中国人観は変化を起している。本論文は、ロンドンの中国もの作品の具体的な内容から、これらの旅の影響による中国人観の変化を明確にしたいと考えている。

ロンドンの中国もの作品は主に八つを数える。その中に短編小説は六つあって、創作した時期としては、1903年の創作前期の短編小説があれば、1907年から1909年の創作中盤

の短編小説もあるし、1916年の創作後期の短編小説もある。そして、エッセーが二つあって、エッセーでは、1904年の創作前期と1909年創作の中後期の作となっている。本論文の第一章は、ロンドンの生涯<sup>1)</sup>を簡潔に紹介し、第二章では、八つの中国もの作品の背景について述べ、第三章では、ロンドンが1892年に創作した最初の中国人もの作品から、一般的なアメリカ人としてのロンドンの中国人観を分析し、第四章と第五章では、1904年に日露戦争取材した後のロンドンの中国人観を、そしてその変化及び変化した原因を明白にする。そして、ロンドンが理解した日本人と中国人の関係と実際の関係について述べ、第七章から第九章では、スナーク号での旅の中で書かれた中国もの作品を一つ一つ分析してその時々々のロンドンの中国人観をはっきりとさせ、彼の以前の作品と比較して彼の中国人観の変化と変化を生み出した原因について詳しく論じ、第九章では、1916年に書かれたロンドンの最後の中国もの作品を分析して、彼の最終の中国人観の位置付けを明らかにする。

#### 注

1) ロンドンの中国人観の変化は彼の人生の流れと深く関係しているため、より分かりやすくかつ正しく中国人観の変化を論じるため、ロンドンの人生を知るべきだと考えている。

## 第1章 ロンドンの生涯

一つの作品だけを読んでその作家を評価するのでは、どうしても作家に全面的な評価を与えることはできないだろう。もし、その作家が一つしか有名な作品を書かなかった場合は別として。ロンドンのように人生を貫いて、たくさんの著作を書き上げ、中には名作もいくつかあって、彼自身とのつながりも深い。このような作品と人生の関連性が高い作家を研究する時には、彼の人生を見逃して作品だけに集中することは誤解が生じやすく、作品の本当の意味が見つからない可能性がとても高いと考えている。ロンドンの作品の中に、特に中国人もの作品の連続性がある、ロンドンの中国人に対する見方の変化と彼の人生は深く関係しているので、彼の中国人もの作品を研究する前に彼の人生を知ることは不可欠だと考えている。

ロンドンの人生の前半と後半の分け方はさまざまあるが、著者は1907年4月に、ロンドンの所有である船スナーク号で世界の旅に出た時と考えている。ロンドンが生まれてから1907年までは中国人に対する偏見が強まりつつあって、最後に中国人が全滅したことにまで至ったのである。前半と反して、1907年から死ぬまでの後半は中国人に対する偏見が弱まりつつあって、最後には、ほとんど見えなくなったのである。以下にロンドンの人生を簡単にまとめる。

### 1.1. 生まれてから作家になるまでの道のり（貯蓄期）

#### 1.1.1. ロンドンの誕生

ロンドンの誕生はとても不幸だったと言える。ロンドンの元の名前は“John Griffith Chaney”<sup>1)</sup>である。母親のFlora WellmanがJohn Londonと結婚した時、ロンドンはずすでに8ヶ月になる子供だった。つまり、彼の父親が誰なのかを確認できないのだ。最初のロンドンの世話は、奴隷体験がある黒人ヴァージニア・プレントイス（愛称ジェニー）の担当となる。その後、義姉のイライザに学校に連れていってもらう。子供としてのロンドンが最も愛情を必要とした時、そばにいたのは義姉のイライザであった。5、6歳の時、転々と住所を変えた一家は、サンフランシスコ郊外のアラメダの農場に移住した。母親がずっと降霊術にこっていたために、ロンドンの家は「幽霊屋敷」と地域の子どもたちから呼ばれた。こうしたことから、ロndonは孤独で神経質な子どもになった。ついに、ロンドン



は最初の学校ウエスト・エンド校<sup>2)</sup>に入学した。本を読むことが好きになって、それから驚異的な量の本を読んだという。

### 1.1.2. 働き始めたころ

義父の農場の経営も母親の女工の下宿屋の経営も共に失敗したので、家計を助けるために11歳のロンドンが働き始め。朝夕の新聞配達をしたり、休刊日の週末は氷運搬馬車の助手として働いたり、ボーリング場のピン立てボーイをやったり、行楽地で酒場を掃除したりすると同時に、一生懸命本を読んで勉強したりもしていた。しかし、新聞配達でかせいだ月22ドルは全部母親フローラの方へ行ってしまった。13歳のロndonは馬小屋を改造してできたヒクモット缶詰工場で働き、1日14時間から18時間働くことも度々あった。月50ドルをもらったことがあったが、相変わらず全ての給料は母親フローラの所へ行った。その時のロndonは、常に世間の不平等<sup>3)</sup>を感じていて、そのまま人生を終わりにたくないという気持ちがあったので、乳母ジェニーを説得して300ドルを借りて（ロndonは終生彼女の面倒を見た）、帆船ラズル・ダズル号を買った。サンフランシスコ湾で、仲間たちと牡蠣荒らしをはじめ、一夜の冒険で儲けたお金は、缶詰工場で働く賃金3ヶ月分だった。そこで大酒を飲み始めてしまい、「牡蠣海賊の王子」と呼ばれるようにもなった。カリフォルニア密漁巡視隊のチャーリー・ラグランドが、ロndonに巡視官代理の職を勧め、彼は翌日、その仕事に就いたが<sup>4)</sup>、秋には巡視官代理を辞職した。17歳になると、アザラシ漁船ソフィア・サザランド号の乗組員になって日本に向かった。51日後に小笠原諸島に着き、日にちをかけてベーリング海まで行って、ベーリング海でアザラシ狩りを終え、横浜に寄って帰国した。国内は大不況のため、日給1ドルで10時間も黄麻工場で働いたが、黄麻工場は悲惨な職場であり、ロndonはいやでたまらなかった<sup>5)</sup>。その時、『サンフランシスコ・イグザミナー』紙の作品懸賞募集に応募し、三晩で「日本近海の台風物語」を書き、一位に入選した。ロndonは進化論的な観念にすごく興味があつて、このテーマに関する書物をできる限り読んだ。

### 1.1.3. ロンドンが味わった資本主義社会

その後、当時のアメリカ社会の本質を見たという、オークランドのヘイワーズ電気鉄道の発電所の所長の宣伝に騙されて、発電所で石炭運びの仕事に就いた、元々二人で一人月40ドルの仕事をロndonは一人で月に30ドルでやっていた。それが原因で仲間の労働者二

人が職を失い、そのうちの1人が自殺したことを知るとすぐに仕事をやめた。社会への不信感は益々増えてきた、ロンドンは、自分が「金髪獣」、「社会の最下層の人々」と認識され、ついには老馬同然に主人からクビにされるような運命には決して流されまいと思い、身体を使って給料を得るような社会の最下層から抜け出すことを決意した。そして、各地で始まっていた失業者の「ワシントン行進」においてオークランドのケリー隊に参加し、途中、ミズーリー州で行進から離れ、ニューヨークへと放浪の旅を続けた。ナイアガラの滝を訪れた時、バッファローで放浪罪により逮捕され、30日間の獄中生活を経験した。この経験で、権力者はどのように正義を執行するのかを初めて教えられた。ロンドンには、弁護の機会も反論の時間も与えられなかった。裁判は正義とは無縁だったのだ。この行進や放浪の中で、社会主義やマルクスについて耳にし、更に、自己の社会的位置を認識した。それからロンドンは、両親の許可と義姉イライザの援助でオークランド高校に入学した。『ハイスクール・エイジス』に「小笠原諸島」について二部仕立ての記事を書いた。その後、一連の記事や短編を発表し続け、その数は十篇であった。『共産党宣言』は彼にとって深い感銘を感じる作品だった。級友の姉メイベル・アプルガースにも心を奪われた<sup>6)</sup>。『サンフランシスコ・クロニクル』紙によると、20歳のロンドンは常にオークランドの「少年社会主義者」として知られていた。彼は、社会労働党オークランド支部に加入し、大学への進学を準備するため、学校側が2年の課程を4ヶ月に縮めることを認められたので、大学予備学院に通うことになった。しかし、この時の同級生は、ロンドンの能力を妬んだが、「名門の血筋」からしてみれば、この貧乏の身なりをした「社会主義の反逆者」に我慢できなかったようだ。そしてロンドンは、ついに退学をさせられた。こうして若いロンドンはまだ一度、正義は金持ちの味方であって、貧乏人の味方ではないことを味わった。独学を決め、12週間、一日19時間の猛勉強後試験に合格し、秋にはカリフォルニア大学バークレイ校に入学した。しかし、大学は有閑階級の子女の世界だった、学生や教授には大志を持たない人が多かったし、金銭の余裕がなくなったため、彼は大学を退学しなければならなかった。マルクスや他の社会主義者の本を読み続け、街頭で無届演説をして、逮捕されたが、オークランド市は訴訟を取り下げた。演説を聞く中で、ロンドンはハーバート・スペンサーの思想を耳にし、その思想に特に興味をもった。図書館でスペンサーの『第一原理』、『心理学原理』を借りて読んだ。

## 1.2. ロンドンの文学的成功（旺盛期）

### 1.2.1. 作家への道

作家として身を立てようとしたが、書いたものは雑誌には受け入れてもらえなかった。やむを得ず、1日14時間クリーニング屋で筋肉労働をした。当時、アラスカで金鉱が発見され、イライザの夫シェパードの誘いでクロンダイクへと向かった。新鮮野菜が不足して、ロンドンには壊血病にかかったので、カリフォルニアに戻った。持って帰った砂金の価値はわずかの4ドル50セントだったが、その体験は彼の人生に大きく役に立った。義父も亡くなったので、ロndonは一家の生計を支えなければならなかった。郵便局で郵便集配人の試験を受け合格したが、『ブラック・キャット』誌からは、ロンドンが書いた「多くの死」を40ドルで買うという通知を受け取った。そのことでロndonは作家の道を選び創作に専念することになった<sup>7)</sup>。

### 1.2.2. 初期の創作活動

作家としてのロndonは、すぐには軌道に乗らなかった。当時書いたものの多くは不採用になり、最初の年に不採用になったのは266本の創作だった。人気作家になるためいろいろな知識や思想を勉強して、やっと売れるようになった。東部の有名な文芸雑誌『アトランティック・マンスリー』に「北国のオデュッセイ」が売れた。また、ホートン・ミフリン社と、これまで書いた「アラスカもの」を集めた短編集『狼の息子』の出版契約を結んだ。そして、スタンフォード大学の学生で、ロシア系タタール人の血を引いたアンナ・ストランスキーと社会労働党の会合で知り合い、以後、知的刺激を受けた。メイベルとの結婚は彼女の母親の干渉で断念したが、死んだ友人フレッド・ジェイユブズの婚約者ベシーを慰めると、二人の友情は深まっていき結婚まで発展した。結婚当日に最初の本『狼の息子』が出版されて好評を博した。ロndonは多くのアラスカの物語を書いたため、「北方のキプリング」と呼ばれていた。『マックリュアズ』紙のS・S・マクルアから『雪原の娘』という小説を受託し、本が出てくるまで毎月125ドルを先払いしてもらい収入が安定した。結婚前にチャーミアンと出会ったが、当時チャーミアンは運命の人だとは思わなかった。そして、長女ジューンが生まれた。オークランド市長選に立候補したが、落選した。「戦争」、「女性の参政権」、「競争制度によって社会が失うもの」、「競争による浪費」などについて講演を行なって、「階級闘争」など社会主義的なエッセーを多数書いた。ボーア戦争の取材をアメリカ新聞協会から依頼されたが、ロndonがニューヨークに到着しないうちにボーア戦争は終わってしまった。ロndonは、これを機にイギリスのロndonのスラム街であ

るイースト・エンドへの潜入を計画した。イースト・エンドへの取材をし、そして、膨大な資料を集めて『どん底の人々』を書いた。その後、ニューヨークに戻り、初めての長編『雪原の娘』を出版し、そして次女のベスが誕生した。初めての中国人もの小説“White and Yellow”と“Yellow Handkerchief”もこの頃に書かれた。

### 1.2.3. ベストセラー作家と離婚及び再婚

ロンドンは 27 歳の時に『野性の呼び声』の原稿を『サタデー・イブニング・ポスト』紙に送り、その原稿は同紙に掲載された。その後、マクラミラン社が 2000 ドルで『野性の呼び声』の諸権利を買い取って、出版した。この作品は発行当日に 1 万部を売り、一気にその年のベストセラーになった。『野性の呼び声』はアメリカ文学の古典になり、ロンドンも一躍人気作家になった。次の年に『海の狼』を出版し、初版の 5 万部をすぐに売り切つて、この作品はその年のベストセラーになった。その後、彼の傑作がどんどん世の中に出た。完成まで数年かかったアンナとの共作『ケンプトンとウェイス往復書簡』を出版し、『試合』、『アダム以前』、『白い牙』、『鉄の腫<sup>かかと</sup>』などを次々と書いていった。イースト・エンドのルポルタージュ『どん底の人々』も出版され、世の中が騒いだ。このころサンフランシスコで大地震があつて、この地震についてロンドンは「目撃者の物語」を書いたし、社会活動も続いた。オークランド市長選への社会党指名を受けたが、再び落選した。「大学連合社会主義協会」を設立し、ロンドンは初代会長になった。生活面では、グレン・エレンの山中に 130 エーカーという広大な土地を買って移住した。世界旅行を計画して、帆船スナーク号を建造し始めた。

この期間に、チャーミアンと恋愛関係に入り、妻ベシーと別居してベシーに離婚を告げた。遺棄を理由にして、ベシーが離婚訴訟を起こした。その後、ベシーが離婚を認め、離婚を一年猶予するという判決が下った。列車に乗って講演旅行に出た途中、離婚猶予期間が終わり、離婚の最終判決が下った。次の日にロンドンとチャーミアンの二人は結婚許可証をもらった。しかし、この結婚については世間から非難の声が高まった。

### 1.2.4. 日露戦争の取材

そんな中、日露戦争が勃発すると、ハースト系新聞の特派員としてロンドンは日本へ赴き、シベリア号に乗って横浜と神戸に向かった。横浜に到着した後、日本軍当局は、外国人記者の従軍に反対した。その後、ロンドンは自力で朝鮮に渡ろうと思って西へ向かい、

門司で逮捕されて、罰金 5 円を課され、カメラも没収された。それからやっと朝鮮半島に向けて出発し、8 日後、朝鮮半島に着いた。平壤では日本の領事に 1 週間足留めを食らった。また、朝鮮の最北の町順安に着いた時、軍の刑務所に四日間入れられて、京城（ソウル）に送還された。その後ロンドンでは日本軍の渡河作戦の勝利によって鴨緑江を渡って中国<sup>8)</sup>に入り、九連城、安東（丹東）、鳳凰城（鳳城）にまで達した。中国の街に出て中国人、日本人、朝鮮人を比較して、中国人は白人の脅威と強く感じられ、エッセー“The Yellow Peril”はその頃にかかれた。その後、窃盗の現場を捕まえた日本人の召使を殴ったため、司令部に叱られ、拘引されて帰国した。その体験の影響を受け続けたロンドンは“The Unparalleled Invasion”も書いた。

### 1.3. 後期のロンドン(成熟期)

#### 1.3.1. スナーク号での旅

1907 年 4 月 13 日、ロンドンが 31 歳の時スナーク号でチャーミアンと共にホノルルへ向かった<sup>9)</sup>。総計 3 万ドルを投じたスナーク号は未完成で、途中から水漏れがひどくなった。ハワイで船を修理し、乗組員を入れ代えて日本人のヨシマツ・ナカタを雇った。その後 5 ヶ月の滞在をして、ハワイを後にし、マーケサス諸島、タヒチへ向かった。70 馬力のスナーク号にとって、この旅は大変な挑戦だった。資金問題を解決するため、一度、汽船コリボサ号でカリフォルニアに戻った。そして、スナーク号の旅は続く。ロンドンでは熱帯病のイチゴ腫に苦しみ、直腸の痛みも大変だったが、二重瘻管と診断された。イチゴ腫を治すため、毎日昇汞（水銀の塩化物）を飲んだ。こうして目前の病気は治ったものの、今度は腎臓を壊し<sup>10)</sup>、チャーミアンも「熱病」にかかった。やっとオーストラリアのシドニーに到着して、すぐにジャックとチャーミアンは聖マロウ病院に入院した。ロンドンでは二重瘻管の手術を受け、スナーク号での世界旅行をやめる決断をした。その後、タイメリック号に乗ってエクアドルへ向かった。そして、パナマに行き、日本人であるナカタを連れてオークランドに戻った。そしてオークランドに戻った直後にロンドンは“If Japan Wakens China”を書いた。旅の間にロンドンの私小説『マーティン・イーデン』を脱稿し、短編「異教徒」なども書いた。この旅によって『南海物語』と『スナーク号航海記』を創作した。ボウラ・ボウラから出た後に 4 編目の中国もの短篇小説“The Chinago”を書いた。そして、5 編目の“Chun Ah Chun”も書いた。

### 1.3.2. カリフォルニアでの農園生活と国内の旅

カリフォルニアで、数ヶ月をかけて病気を全治させたロンドンは大量の土地を購入し、農園生活を続けた。第一組合教会に出席して、『マーティン・イーデン』についてのチャールズ・ブラウン師の説教を聞いた。教会がロンドンの作品を誤解したことに對して、ロンドンは教会への失望感をつのらせた。彼は、農園を建設し拡大し続けた。チャーミアンが娘ジョイを生んだが、38 時間後に死亡し、二人は大きな打撃を受けた。そこでロンドンはチャーミアンとロウマー号に乗ってサクラメント川上流へ巡航した、スナーク号の旅では体を壊したものの、やはり、ロンドンは船に乗るのが好きだった。そして、ロウマー号に乗って3 週間の巡航に出かけた。また、4 頭立ての荷馬車を操縦して、チャーミアン、ナカタと旅に出た。その後、「狼城」の建設や農園の経営や一日千語の執筆で多忙だった。

さらに、ロンドンはチャーミアン、ナカタと共にディリゴウ号に乗って航海に出た。チャーミアンが流産して、二人は二人目の子供も失った。航海中にもう一つの自伝的小説『ジョン・バーリコーン』を執筆して、『バーニング・ディライト』『奈落の獣』『赤死病』『殺人株式会社』を次々と書いた。

### 1.3.3. 不運と死

晩年のロンドン是不運だった。彼自身は盲腸炎にかかり、そして、最も大切な雌馬を誤って猟師に殺されて、キャプテン・シェパードも狂暴になった。また、農園もうまくいかず、ロンドンの作品『海の狼』が無断で映画化されたため訴訟を起こした。ロンドンは、メリット病院で盲腸手術を受け手術は成功したが、腎臓がひどい状態にあると告げられた。医療がまだ発達してない当時は、ロンドンがあと何年かしか生きられないということだった。その後、7 万ドルをかけた「狼城」が、完成直後の夜に不審火で焼失した。『コリアーズ』誌からのメキシコ革命の取材の依頼で、ナカタ、チャーミアンと三人は『サンセット急行』に乗って、メキシコに向かった。ロンドンはメキシコ革命をひどく非難した。それに対してアメリカ国内の社会主義者はロンドンを非難した。ロンドンは社会主義運動の誤解と内部の不和によって、社会労働党を脱退する決意をするまでに至った。ロンドンはメキシコで急性の赤痢症状のためひどく苦しんで帰国した。ナカタが医大に入学するために仕事を辞め、代わりに同じ日本人青年のセキネを雇った。健康回復のため二回もハワイに療養しに行った。ハワイから社会労働党グレン・エレン支部に脱退届を送った。グレン・

エレンに戻ると腎臓結石による痛みが激しくなり、禁酒を命じられた（カキ荒らし以来、お酒を飲み続けてきた）。モルヒネで痛みを抑えようとしたが、1916年11月22日の朝、セキネが昏睡状態にある40歳のロンドンを発見、A. M. トムソン医師の死亡診断書は尿毒症となっているが、後日、同医師は、モルヒネの大量摂取による服毒死だったと語る。遺体は「狼城」の廃墟近くに埋葬された。ハワイで休養した時、最後の中国人もの短編小説“The Tears of Ah Kim”を書いた。

注

- 1) ロンドンが1876年誕生し、1882年ロンドンが6歳の時、アメリカの中国人移民排除法が国会で通った。
- 2) ロンドンの小学校の時の写真を見ると、一番後ろの列、左から四人目にはアジア人の顔をした生徒が見える。子供の時から、ロンドンのそばには中国人がいたが、母親と社会の影響でアジア人の生徒との接触はあまりなかっただろう。
- 3) ロンドンは、有名作家になった後未成年労働者問題にずっと関心を持ち続けた。彼の本棚には未成年労働者問題の本が何冊もあった。
- 4) ロンドンの初めての中国人もの短編小説“White and Yellow”と“Yellow Handkerchief”に書かれていることはこの頃の出来事とみなされる。
- 5) 後の短編「背信者」にその様子が描かれている。
- 6) 彼女は『マーティン・イーデン』に登場するルースの原型と見られる。
- 7) 『マーティン・イーデン』はロンドンのこの時期のことをリアルに描いた。
- 8) 1904年の中国はまだ清王朝の統治の下にあって、封建社会である。
- 9) ジャックの計画では、中国まで行くつもりだった。
- 10) 晩年のロンドンは腎臓の病気で、余命が何年かしかないと医者が判断した。この時の経歴と関係しているのだろう。



## 第2章 ロンドンの中国人もの作品執筆の背景について

ロンドンが生きていた時代はとても不安定な時代とも言える、特に中国は封建制度が崩壊しつづけ、中国人の労働者は世界各地で出稼ぎをし始めた。特に、カリフォルニアのゴールドラッシュが始まり、ハワイの経済が進む中、ハワイの製糖業が盛んで人手不足になった。このことは中国人労働者が出稼ぎしたい意欲と合致して、出稼ぎに行ったら裕福になれると言う夢を持つ多くの中国人労働者たちがカリフォルニアとハワイに渡った。また、アメリカの大陸横断鉄道の建設にも中国人労働者が必要であり、中国からの移民が更に増え続けた。しかし、アメリカの経済状況が悪くなると、労働力がいらなくなって、中国からの移民はアメリカにとって必要がなくなった。アメリカの中国人移民排除法案は、1882年ロンドンが6歳の時に国会で通った。正式に中国人移民をアメリカから締め出し始めたのだ。しかし、カリフォルニアでの中国人移民への反対運動や暴力はもっと前に始まっていた。こういった状況において中国人への偏見が生まれ、ロンドンはこのような社会環境の中で生まれ成長していった。

また、ヨーロッパ社会において、ハーバート・スペンサーがダーウィンの『進化論』から『社会進化論』を作り出し、人種偏見に理論的な根拠を与えることになった。また、ドイツ皇帝は「黄禍」を言い始め、その説はアメリカ白人にも伝わり、まず身近の中国人に対して脅威を感じ始めていった。こういった状況の中で、ロンドンが日露戦争を取材しに来たのだ。日本から朝鮮半島に渡って中国まで来て、アメリカにいるのと違うアジア人を目にした、しかし、ロンドンはアジア思想や文化を十分に理解していなかったし、そして、『社会進化論』や「黄禍論」の思想も頭の中にあっただけで、彼の頭にはどんな反応が起こったのだろうか。

ロンドンは自分の船スナーク号で初めてハワイに行ったが、その後また二回も長期間ハワイで療養した事があった。ハワイで見た中国人労働者は、ハワイ先住民と結婚し、或いはハワイでビジネスに成功した一部の中国人がハワイで根を下ろした、などあらゆる人種がハワイ社会でうまく共存できていることをロンドンが目にした。この時ロンドンの頭に、どんな印象が残って、その後どの様に影響したのかを考えるとこの旅は彼にとって重要な経験だったと思われる。

ロンドンがこういった社会を背景に中国人を主人公にして書いた小説は、いま調べているだけで六つある。以下は、この六つの小説を雑誌に発表した年代順に並べたものである。

“White and Yellow”—The Youth’s Companion. Vol. 79 Pages 73-74. (February 16, 1905).  
Tales of the Fish Patrol (P.5)

“Yellow Handkerchief” —The Youth’s Companion. Vol. 79 Pages 225-226. (May 11, 1905). Tales of the Fish Patrol (P.6)

“The Chinago” —Harper’s Monthly Magazine. Vol. 13 Pages 225-240. (July 1909).  
When God Laughs and Other Stories (P.8)

“Chun Ah Chun” —Woman’s Magazine (St. Louis). Vol. 21 Pages 5-6, 38-40. (March 1910). The House of Pride and Other Stories of Hawaii (P.8)

“The Unparalleled Invasion”—McClure’s Magazine. Vol. 35 Pages 308-315. (July 1910).  
The Strength of the Strong (P.9)

“The Tears of Ah Kim” —Cosmopolitan Vol. 65. Pages 32-37, 136-138. (July 1918). On the Makaloa Mat (P.12) <sup>1)</sup>

また、エッセーが二篇ある

“The Yellow Peril” San Francisco Examiner, September 25, 1904. (Collected in Revolution & Other Essays by Jack London) (Russ Kingman 1979:18)

“If Japanese Wakens China” Sunset Magazine December 1909 (Russ Kingman 1979:6)

これらの短編小説とエッセーの一つ一つの背景、或いは、小説の背後に実在していた人やストーリーを調べていきたい。

## 2.1. “White and Yellow” と “Yellow Handkerchief”

“White and Yellow” と “Yellow Handkerchief” はロンドンにとって初めて中国人が重要な役として描かれた短編小説である。この二つの短編小説は *Tales of the Fish Patrol* の中に納められている。この本は 1903 年に刊行されたもので、内容は、主人公の“私”がおおよそ二年間サンフランシスコ湾の漁業パトロール補助隊員として違法な漁をする者たちと戦

う話である。全部で七つの短編小説が入っているが、中国人についての話は最初の“White and Yellow”と最後の“Yellow Handkerchief”だけである。この二つの短編小説は、両方とも“私”と中国人の違法漁師の話であるし、そして、共通する中国人が登場している。それは、本当の名前は書いていないのだが、よく頭に黄色いハンカチを着用しているので、“黄色いハンカチ”と名前を付けられた中国人だ。このように同じ登場人物が出てくるし、ストーリーも同じ時期に書かれているし、同じ本に納められているし、内容も繋がっているので、わざと分けて分析する必要はないと思う。この二つの短編小説を一緒に扱って背景を分析したい。

*A Pictorial Life of Jack London* の中では「かつての乳母プレントイスから金を借りて、一本マストの帆船ラズル・タズル号を友人フランクから購入、サンフランシスコ湾で牡蠣荒らしを始め、時々一晩の収入が 25 ドルにも昇る、工場で働くときの何十倍もある、“牡蠣泥棒のプリンス”とよばれるようになった」<sup>2)</sup>そして、*Jack London* の中でロンドンの娘ジョーは「彼はこの非合法的な仕事に明るい将来を期待することができなかった」と述べた。ロンドンがダズラー号の旅では「この仕事は好きでもあるし、嫌いでもある。新鮮な空気や海の水や自由や、そういうものはよかったが、嫌なのは、盗みだ」と書いた。ロンドンが船を持っていたことと牡蠣泥棒をやったことは事実であるが、一方、お金は儲かったが、そのお金を一晩でいくつかのバーで使い切ったことも事実だ。ある日酒を飲みすぎて海に落ちたが、死ぬ前に助けられ、数日後漁業パトロール員になったという話があるが、サム・S・バスケットの「オークランド海岸通りのジャック・ロンドン」という文には「ロンドンは漁業パトロールと何ら公的な関係がなかったし、漁業パトロール員として一文も受取っていない」<sup>3)</sup>と書かれている。それは、『1891 から 1892 年の州漁業委員会の隔年報告』によることで、ロンドンという漁業パトロール員はいなかった。では、*Tales of the Fish Patrol* 中の主人公“私”はロンドン自身ではないのか。

一方、「黄色いハンカチ」の話の中で“黄色いハンカチ”と戦った相手の“私”はロンドン自身である。“黄色いハンカチ”が“私”を縛って島に置いて行き、その後一人で島に戻って“私”を追いかけたことは作り話だが、このギャングの仲間と共に捕まえて刑務所へ送ったのは本当だとロンドン自身が書いている<sup>4)</sup>。『ジョン・バーリコーン』の中には「密漁巡視官代理として湾や川で手入れを行ったり」という文がある。そして、“White and Yellow”には

my sloop, the Reindeer, was chartered by the Fish Commission, and I became for the

time being a deputy patrolman. (Jack London 1905:13)

という箇所があった。つまり、ロンドン自身の話によれば、彼は正式な漁業パトロール員ではなく、漁業パトロール員代理だった。正式の漁業パトロール員か漁業委員会がロンドンの船を借り、ついでに彼を漁業パトロール員代理にした可能性は十分ある。そうすれば、サム・S・バスケットが言った“ロンドンは漁業パトロールと何ら公的な関係を持っていなかったし、漁業パトロール員として一文も受け取ってない”ということと『州漁業委員会の隔年報告』の間に矛盾はないと考えられる。

そして、“White and Yellow”の中には主人公の“私”と“黄色いハンカチ”の次のような会話がある：

“Now keep your distance” I commanded, “and don’t you come closer.”

“Wha’ fo” he demanded indignantly, “I t’ink um talkee talkee heap good.” “Talkee talkee,” I answered bitterly, for I knew now that he had understood all that passed between George and me “What for talkee talkee? You no sabbe talkee talkee.” He grinned in a sickly fashion, “Yep, I sabbe velly much. I honest Chinaman.” “All right.” I answered “You sabbe talkee talkee, then you bail water plenty plenty. After that we talkee talkee.” (Jack London 1905:30)

ここの会話の描写は非常にリアルに現場を再現している。まずは“黄色いハンカチ”が変な英語を喋ること、つまり“黄色いハンカチ”の英語の下手さがわかる。そして中国式の英語も出てきている。それはこの会話で一番使われた言葉“Talkee talkee”である。元々は“Talk”だろうが、日本語に翻訳すれば「相談したい」ということで、英語にはこのような“Talkee talkee”のような使い方はないが、中国語にはある。中国語ではよく同じ漢字を連用する。例えば“谈谈”“聊聊”。中国語の“谈谈”“聊聊”は英語の“talk”と同じ意味だ。これは、“黄色いハンカチ”の中で“talk”の代わりに“talkee talkee”が出て来た原因だと考えられる。これは中国人に特有な習慣だと思う。ロndonはそれを良く捉えている。漁業パトロール員代理の仕事をした時に直接中国人と接しないとこんなリアルな描写はできないと考えられる。「黄色いハンカチ」の話の中で“黄色いハンカチ”と戦った“私”はロンドン自身であることが推認できる。

以上の分析から見ると、*Tales of the Fish Patrol*はロンドンの私小説と考えられる。ロンドンが漁業パトロール代理をしていた頃のできことがこの小説の背景だと考えられる。ではロンドンはそれにどんな偏見を持ち込んでいるのかについて次の章で分析したい。

## 2.2. “The Yellow Peril” と “If Japan Wakens China” 及び “The Unparalleled Invasion”

### 2.2.1. “The Yellow Peril”

ロンドンがアジア人特に中国人への人種偏見を持っていると言われる時、まず、挙げられるのが “The Yellow Peril” の執筆である。“The Yellow Peril”についてはテーマだけ見ても人種偏見の雰囲気は充満しているだろう。この印象的な作品を書いた背景を調べる必要があると思う。

“The Yellow Peril” は、1904年ロンドンが日露戦争における日本軍の従軍記者として、日本軍と共に鴨緑江を渡って、中国の旧満州に入って、1ヶ月ぐらいの滞在した最後の6月に書いたエッセーである。“The Yellow Peril”の最後に Feng-Wang-Cheng, MANCHURIA<sup>5)</sup>と書いているので、“鳳凰城、満州”と翻訳できる。即ち、旧満州の鳳凰城、今の遼寧省の北部の鳳城である。ロンドンの *War Correspondence* によると、彼は、河渡りの作戦が日本軍の勝利に終わった後、5月1日に日本軍と共に鴨緑江を渡った、その後の進軍路線は九連城 (Kuel-ian-Ching) -安東 (Antung) -鳳凰城 (Feng-Wang-Cheng) の順となっていて日付も合致している。そして、ロンドンが中国にいた間に、後に彼の妻になるチャーミアンに何通かの手紙を送っておりその封筒もしっかり残っているので、ロンドンは中国に来たことがあるということには何も疑問がないと言える。このエッセーは、ロンドンが中国に来て、中国人の行動を観察し、分析して、そこに彼自身の従来の考えを加えて書いたものである。

ロンドンが日本軍の従軍記者として、戦争の記事だけでなく、中国人脅威論の “The Yellow Peril” をも書いた理由は、1904年5月22日に書かれたチャーミアンへの手紙の中にある。

I am liberty to ride in to headquarters at Feng-Wang-Cheng, less than a mile away, And I am at liberty to ride about in a circle around the city of a radius little more than a mile. Never were correspondents treated in any war as they have been in this, It's absurd childish, ridiculous, rich, comedy.” (The Letters of JACK LONDON 1988:429-430)

これにより、ロンドンの活動範囲が制限されたことがわかるし、ここにはロンドンの怒りも表われている。ロンドンが本来の仕事を果たすことができなくなったためだ。ロンドンが活動範囲を制限されたことについては二つの理由がある。一つ目は、日本軍の白人記者への不信感で、報道は日本軍の軍事秘密を漏らす恐れがあるのだ。日本軍と戦っているのはロシア白人であるので、白人記者への不信感は黄色人種である日本軍にとって自然なことだ。そのことはロンドンが門司で逮捕されたことでも十分証明できる。そして、5月1日にロンドンが日本軍に捕まってロシア捕虜を見た時、同じ白人としてかなりのショックを受けたことも確かだ。二つ目は、窃盗現場で捕まえた日本人を殴ってしまったため、軍部からお叱りを受けて、拘引されたことである。同質性が高い日本人はロンドンのこの行為はとて許されないことだったが、ロndonは日本人の同質性の高さについては後に悟ったのだろう。この二つのことが原因で、中国に入った後の軍事的な取材はほとんどできなくなった。

軍事的な取材ができなくなったロndonは黄色人種の脅威を痛感した。ロndonは日露戦争取材する前から、中国人のことを常に脅威と感じていたからだ。チャーミアンへの手紙の中にはこう書かれている。

**In the past I have preached the Economic Yellow Peril; henceforth I shall preach the Militant Yellow Peril. (The Letters of JACK LONDON 1988:430)**

ロndonは、中国（中国人）に対する「経済的な“黄禍”」の主張をずっと前から抱いていたが、今は更に「政治的な“黄禍”」を主張すると言った。「経済的な“黄禍”」について言えば、“The Yellow Peril”を書く前に執筆した中国人もの小説は *Tales of the Fish Patrol* 中の“White and Yellow”と“Yellow Handkerchief”である。主な内容は、主人公“私”が行ったカリフォルニア在住の中国人移民漁師への取り締まりの話である。カリフォルニアにいる中国人の生活を支える漁師活動は、ロndonにとって、アメリカ資源の略奪であるだろう。彼が言った「経済的な“黄禍”」はアメリカ資源を奪う中国人漁師のことを指していると考えられる。このような“黄禍論”は、1882年に中国人排斥法案が国会で通る以前にアメリカ社会に常に存在していた。したがってこれはロndonが持つ特別な考えではなかったが、人種偏見を持つロndonは更に日本軍からの刺激を受けた。しかし、中国の思想は

その時のロンドンにとって越えられない壁のような存在、全く理解不能な考え方であった<sup>6)</sup>。中国人の勤勉と中国の膨大な人口または、中国が持つ莫大な天然資源によって、脅威しかロンドンは感じられなかったのだろう。中国や中国人には優れたところが多いので、その分白人に対する脅威も多いことをロンドンは感じたのだろう。中国人思想を理解していないその時のロndonは、Yellow Peril しか感じていないので、“The Yellow Peril” しか書けなかったと考えられる。

### 2.2.2. “If Japan Wakens China”

“The Yellow Peril” を書いた5年後にロンドンでは “If Japan Wakens China” を書き上げた。“The Yellow Peril” と “If Japan Awakens China” の考えは、中心的な部分（黄色人種脅威論）こそあまり変わらなかったが、後者の表現の仕方は大変柔らかくなったとみなされる。

“The Yellow Peril” では基本的に言い切るような言葉を使っていた。例えば、最後の一文 “We shall not have to wait for our children’s time nor our children’s children. We shall ourselves see and largely determine the adventure of the Yellow and the Brown.”<sup>7)</sup>がある。口調が強いと感じられ、従って偏見も強く感じられる。しかし、“If Japan Wakens China” の表現は別のものになった。例えば、“Surprise is very well, but there is not going to be any Yellow peril or Japanese peril?”<sup>8)</sup>という表現がある。比べてみると、口振りが柔らかくなって、従って偏見もより弱く感じられるだろう。なお、2年余りの旅で書かれた中国人もの小説 “The Chinago” と “Chun Ah Chun” も、1905年に出版された中国人もの短編小説 “White and Yellow” と “Yellow Handkerchief” よりは偏見が弱くなったと感じられる。

このことには、ハワイとタヒチで見た、聞いた、そして接触したアジア人の印象が深く関係していると思う。“If Japan Wakens China” の初めのところに書かれているように、このエッセーを書いたのは1909年7月24日の後で、それはロンドンがスナーク号での世界旅行が終わって、オークランドへ戻った直後のことだった。特に、オークランドに戻って来た時に一人のアジア人ナカタを連れて帰ったことも変化を示す有力な証拠の一つだと考える。2年間に渡った旅は、彼の中国人と日本人への態度の変化の背後に存在しているのである。

### 2.2.3. “The Unparalleled Invasion”

ロンドンが書いた“*The Unparalleled Invasion*”は、“*The Yellow Peril*”と並び中国及び中国人への人種差別がもっともひどい小説と考える。これは、アメリカの根本にある *The Declaration of Independence* の内容の重要な一部「*That all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among there are Life, Liberty, and the pursuit of Happiness.*」に反することなので、アジア人、ロンドンと一緒に戦って来た社会主義の“同志”たち、そして、平等を支持する一般の人たちがロンドンを批判する際の一つの重要な原因となっている。この小説はひどい人種偏見を持つものの、一方で注目すべき特別なところもいくつか持っている。

一つ目の特別なところは、ファンタジー小説ということである。この小説は1976年のことを書いている。つまり、およそ70年後の未来のことを書いている。未来のことは誰も予測できないので、ロンドンの想像力が自由に発揮されていて自分の考えをそのまま入れ込んだ。1976年は、アメリカが誕生してからちょうど200年目になる年でありながら、ロンドン自身がちょうど100歳になる年でもある。この1976年はロンドンにとって特別な意味を持つ年であり、こだわっていると考えられる。このようなファンタジー小説には、他にも、ロンドンが1906年に書いて、1907年に発表した名作 *Before Adam* があって、他にも1912年の *The Scarlet Plague* がある。

二つ目の特別な所は、具体的な主人公がいないことである。ロンドンの名作 *The Call of the Wild* や *Martin Eden*、そして、中国人もの短編小説“*Chun Ah Chun*”や“*The Chinago*”、または、同じファンタジー小説 *Before Adam* や *The Scarlet Plague* にもそれぞれ主人公がいる。しかし、“*The Unparalleled Invasion*”にだけは主人公が一人も出て来ていない。話は、国の間、あるいは、民族や人種の間での矛盾と戦争だけである。

三つ目の特別なところは、エッセーの“*The Yellow Peril*”と“*If Japan Wakens China*”また、“*The Human Drift*”とのつながりが深いことである。そして、*The Scarlet Plague* の類似点も見える。ストーリーの先頭部分は“*The Yellow Peril*”の考えをほぼそのまま使っている。続いて、日本が中国を覚醒させた後の話は、“*If Japan Wakens China*”と中心思想が共通している。ストーリーの展開は“*The Human Drift*”に基づいて、中国人人口が増え続け、平和的侵略が始まって、中国と白人国家の間に矛盾が生じるというものだ。最後には、*The Scarlet Plague* に出てくるようなウイルスによって中国人を全滅した話となっている。“*The Unparalleled Invasion*”は他の小説のような独立的な存在ではなく、他



のエッセーや小説と緊密に繋がっている。“The Unparalleled Invasion”はファンタジー小説であり、主人公は一人も出て来ていないので、従来の調べ方、つまり現実社会にモデルや背景を探すことは不可能である。幾つかの作品との繋がりから分析することしかできないと思う。これが、筆者が“The Yellow Peril”と“If Japan Wakens China”及び“The Unparalleled Invasion”を一緒に一節でまとめた理由である。

“The Yellow Peril”には偏見が見えるが、白人に中国人は脅威であることを伝える作品である。“The Unparalleled Invasion”の一番ひどいところは小説の最後にある。即ち、白人の脅威である中国人をウイルスで全滅させてしまうことである。このような残忍な方法で一つの民族を全滅させることはファシストのような考えだろう、“The Unparalleled Invasion”はロンドンの作品のなかで中国人への人種差別が一番ひどい作品と考える。この作品が出版されたのは1910年の7月である。“The Unparalleled Invasion”を発表する前に“The Chinago”と“Chun Ah Chun”が既に1909年7月と1910年3月に出版されている。ところで、“The Unparalleled Invasion”は“The Chinago”と“Chun Ah Chun”の後の作品と今まで認識されて来た。しかし、“The Chinago”と“Chun Ah Chun”の内容については、ロンドンが中国人への認識がだんだん高まって、偏見が少なくなっている傾向にあると読める。“The Unparalleled Invasion”がその直後に書かれたとすれば、ロンドンの考えの流れと矛盾しているだろう。調べてみると、Russ Kingmanの*JACK LONDON A DEFINITIVE CHRONOLOGY*はこう記録している：

1906 Mar 11 Starts “The Unparalleled Invasion”.

1907 Mar 7 Starts “The Unparalleled Invasion”.

1908 Apr 12 Charmain is typing “The Chinago”.

1908 May 29 Charmain finished typing “Chun Ah Chun”

(Russ Kingman 1992 :63,74,88,90)

つまり、“The Unparalleled Invasion”は1907年、スナーク号で世界旅行に出る前に書かれた作品ということで間違いのないと思われる。それならロンドンの中国人への人種偏見の変化の順番とも一致する。

### 2.3. “The Chinago”

ジャック・ロンドンの作品は、彼自身の体験か伝聞に基づいていて、そこに彼の創作を加えて書かれた作品が多い。この“The Chinago”は、聞いた話に基づいて創作した短編小説なのか、この物語に当てはまる実在の人物も居たのか、という問題から分析していく。

2013年8月に沈大力が《光明日報》において、ロンドンが実際の事件に基づいて“The Chinago”を書いた、と述べている。しかし彼は、タヒチで起こった事件の詳細や“The Chinago”との関連性について、またロンドンはなぜこの事件を知っていたのかということについては論じていない。また、事件の主人公の名前も違っているため、ここで改めてロンドンとタヒチの事件と小説“The Chinago”の関係性についてより詳しく論じることにはしたい。

ロンドンは1907年2月27日に“南海の楽園”と呼ばれているタヒチ島に辿り着いた。そして、パペエテ (Papeeta) からライアテア島 (Raiatea) 及びターハーア (Taha'a) を経てレヴァヴァウ (Raivavae) に至った。そして、1908年4月15日に、スナーク号の乗組員はレヴァヴァウ (Raivavae) を後にした。そして、ロンドンは1908年4月24日より前に“The Chinago”を脱稿した。つまり、これはタヒチから出た直後に書いた小説ということになる。

このタヒチは中国人と深く関わっている。ロンドンが“The Chinago”を書き始める約40年前の1865年3月に337人の中国人労働者がタヒチに辿り着いており、彼らは白人の農園で日雇い人夫として綿花やコーヒー豆や砂糖キビなどを植えていて、毎日12時間から15時間も働いていた。しかし、残念ながら渡って来た中国人は二つに分かれた、一つは広東人、もう一つは客家人である。二つに分かれたこれらの中国人たちの仲が悪くなって彼らはよく喧嘩した。そして、こんな事件が起こった。1869年に喧嘩をしたときに一人の中国人が死んでしまったのだ。まもなく何名かの中国人が捕まって、フランス人による裁判で判決が下された。その結果は四人が死刑になったが、その中の一人[Chim Soo Kung 沈秀純]は仲間を救うためにすべての罪をかぶり、自分を犠牲にしてほかの仲間三人を救った。以来、彼はタヒチにいる中国人の間では英雄と見られている。年に一回、彼の墓の前に集まってすべての喧嘩をやめて平和を誓い、このことがタヒチにいる中国人の団結のしるしにもなっている。しかし、彼にほんとうに罪があったのかということは今でも疑問である。とはいえ、この話はタヒチで拡散していて、タヒチの人のほとんどが知っている。現在、タヒチの文化を紹介するホームページにもこの事件が載っている<sup>9)</sup>。

ロンドンがタヒチに長く滞在して、島を出た直後に“*The Chinago*”を書いたので、この小説ができたタイミング（タヒチを出た直後）とこの物語の舞台（タヒチ）、そして、主人公の身分（農園で働く中国人労働者と白人支配者）、具体的なフランス法廷という設定、主人公が無実である可能性のある判決と死刑という処刑など、たくさんの一致しているところがあるので、ロンドンは、タヒチ滞在中に、Chim Soo Kung[沈秀純]についての話を耳にし、その時に中国人についての理解を深めた上で彼自身の中国人についての考えを書き込んで“*The Chinago*”を作り上げたと考えられる。

#### 2.4. “Chun Ah Chun”

スナーク号での世界旅行の時、最初に着いたところはハワイだった。5月20日、ハワイに着いて、10月14日、タヒチに向かって出発し、約5ヶ月間ハワイにいた。“Chun Ah Chun”はロンドンがハワイを去った後に書いた短編小説であり、後に、*Tales Of Hawaii*に収まった。従来、“Chun Ah Chun”の主人公 Chun Ah Chun は実在した人物だとする考えがある。その実在した人物とは、アメリカ及び当時のハワイ王国にいた中国人移民の中で初の百万長者でありながら、当時のハワイ砂糖王のような存在でもあった、「陳芳」のことだった。「陳芳」の英語の名前は Chun Afong である。中国とアメリカでは、常に Chun Ah Chun は「陳芳」(Chun Afong)<sup>10)</sup>であることと認識されているが、さらに詳しく調査して比較したい。

“Chun Ah Chun”は小説であるので、ロンドンが自分なりの考えと表現したいことを書くのは当然なことでありながら、主人公「Chun Ah Chun」には実在した「陳芳」(Chun Afong)といくつかの共通点が見える。まず、このストーリーの一番重要な部分が一致している。実在した「陳芳」(Chun Afong)は Chun Ah Chun のようにハワイ王族の混血の娘 (Julia Fayerweather Afong) と結婚し、二人の間に十六人の子供をもうけた（その中の一人は生まれて何ヶ月かで亡くなり、成長したのは十五人なので、ロンドンが十五人をもうけたと書いた）。十五人のうちには、男の子が三人と女の子が十二人いた。その中の Emmeline Marie Afong はアメリカの官軍司令官 J. A. Magoon と結婚した。そして、「陳芳」(Chun Afong) と Chun Ah Chun は同じく “Kalalau Plantation” を所有し、Waikiki で豪華な別荘を建設したが、後にアメリカ軍に買収された<sup>11)</sup>。百万長者になった粗筋も共通している。仲間と店を経営し、中国人労働者をハワイに導入した。土地を売買して、きび

砂糖農園の経営がうまくいって百万長者になったことは非常に似ている。最後に、中国（当時の清王朝）の駐ハワイ初代領事の職務をやめ、中国の故郷に戻った（ロンドンの Chun Ah Chun はマカオに戻った）点も共通しており、途中、マカオに行った時、同じようなホテルの買い取り事件もあった。このように多数の一致点があるので“Chun Ah Chun”の主人公「Chun Ah Chun」は実在した「陳芳」（Chun Afong）をモデルにしていることは間違いないと言えるだろう。

*The Tools of My Trade* の中にロンドンが“*Aloha!*” *A Hawaiian Salutation* という本を読んだと書いている。この本を紹介するマージネーリアの部分にはこう書いてある。

The Austrian Consul to Hawaii, Mr. Afong, and a rich description of a tropical forest were the subjects of interest to London. His notes include: “12-Ah Fong. 86-87-description of ferns & Hilo forest.” Ah Fong became Ah Chun in London’s “Chun Ah Chun.” (David Mike Hamilton 1986:86)

この本を読んだロンドンが「陳芳」（Chun Afong）に大変な興味を持ったことが紹介されたのだ。遂に、その本の編集者 David Mike Hamilton は「陳芳」がロンドンの“Chun Ah Chun”中で Chun Ah Chun になったと言った。これは有力な証拠と言えるだろう。「陳芳」（Chun Afong）についてロンドンが残した文も見つかった。それは、1916年8月26日の新聞記事の切り抜きに書いたものである。

Clipping from San Francisco Chronicle, 26 August 1916. London wrote at top of clipping:“ Stick into House of Pride my shelf copy, at beginning or end of story entitled ‘Chun Ah Chun.’”: “Death of Judge Humphreys Remove Island Legal Light. It Also Marks Passing Within Month of Second Son-in-Law of Chun Afong, Wealthy Chinese. Honolulu(H.T.), August 25. ... The death here of Judge A. S. Humphreys, one of the most prominent remembers of the Hawaiian bar, marks the passing of the second within a month of the sons-in-law of the late Chun Afong, wealthy Chinese, twelve of whose thirteen daughters were married to prominent white men.” (David Mike Hamilton 1986:190)

この文は、ロンドンが自ら新聞を切ってその上の部分に書き残した文であるので、これは、一番有力な証拠である。実在した「陳芳」(Chun Afong) をモデルとして、ロンドンが“Chun Ah Chun” を書いたことは事実と考えられるだろう。

この小説を書いた後、ロndonは暫く中国人もの小説を書かなかった。最後の中国人もの小説は死ぬ前にハワイで療養した時に書いたものである。

## 2.5. “The Tears of Ah Kim”

“The Tears of Ah Kim” では 1918 年に出版され、*On the Makaloa Mat* に収まった。唯一のロンドンの死後出版の中国人もの作品であり、最後の中国人もの作品でもある。ロンドンがスナーク号の旅で三つの中国人もの作品を書いた後、約 6 年の間中国人もの作品を書かなかった。死ぬ 3 ヶ月前にこの最後の中国人もの小説を作り上げたのだ。彼が Edgar G. Sisson に送った一通の手紙がある。1916 年 6 月 12 日にロンドンがハワイのホノルルで療養中、Edgar G. Sisson に手紙を送ったのだ。その冒頭の部分はこうなっている。

Please find enclosed “On the Malaloa Mat.” This is true and genuine and correct and right of the old Hawaiian life, brought up to the present tick of the clock of Hawaiian life. Please let me know that you have received this manuscript. I am just starting a light humorous Honolulu story to be entitled “The Tears of Ah Kim.” (Jack London 1988:1553)

ロンドン自身が “The Tears of Ah Kim” については、現実、真実であり、そして、ハワイ人の生活として適切だと書いている。ロンドン自身の証言は、“Ah Kim” が現実に存在したかどうかは調べられないが、当時ハワイに Ah Kim のような中国人商人が少なくなかったことは間違いない。

*The Tools of My Trade* によるとロンドンの蔵書の中に *The Paradise of the Pacific: Sketches of Hawaiian Scenery and Life* があった。この本マーゼネーリアの部分はこういうような紹介している。

This book served as yet another source for London’s unwritten Hawaiian trilogy. He

marked passages describing Honolulu's Chinatown ... 136-good Pace story of Chinese always beaten by his mother for the first time crying. 138-Chinese worship. (David Mike Hamilton 1986:143)

この部分を見ると、かつてロンドンが *The Paradise of the Pacific: Sketches of Hawaiian Scenery and Life* を自分の創作の源として扱っていたことがわかる。特にこの本の 136 ページの所にマークを付けていた。いつも中国人の母親から打たれていた主人公が初めて泣いたところにロンドンは興味を持った。実際の文章はこれである。

There is an old story, whether true or not I know not, of a Chinaman who used to be beaten by his mother till she was over ninety years old. He was over sixty, and yet every now and then the old dame would give her somewhat mature offspring a good 'licking' with a stick. But one day he cried, and as it was the first time his mother ever remembered him to have cried, she stopped using the stick and asked him the reason. He replied, very pathetically, I think, that he cried because he saw she had no longer strength enough to hurt him ... (Herbert Henry Gowen 1892:136-137)

ロンドンの小説 “The Tears of Ah Kim” よりはとても短いストーリーであるが、その内容は “The Tears of Ah Kim” の中心内容とほぼ同じと見なされる。同じく中国人の中年男がよく母親から打たれていたが、男は泣いたことがないということや、初めて泣いた原因も同じで母親の力がなくなったと感じたからだということなど、ロンドンがこの短いストーリーを源として最後の中国人もの小説 “The Tears of Ah Kim” を書き上げたと考えられるだろう。

以上は、ロンドンが書いた中国人もの小説とエッセーの背景である。これから、こういった背景を考慮しつつ、ロンドンの中国人もの小説一つ一つを原文に基づいて分析し、ロンドンの中国人に対する人種偏見の変化を調べていきたい。ロンドンの作品の中に中国人や中国に関わるものは他にもある。例えば、“The Human Drift” (1910)、“A Goboto Night” (1911)、“The Valley of the Moon” (1911) などあるが、主要作品でないので、論文の中で少し言及するが、詳しくは論じない。

注

- 1) Russ Kingman, *A Collector's Guide to Jack London First-Appearances Jack London* Research Center California. (私家版)
- 2) Russ Kingman 1979, *A Pictorial Life of Jack London* P.36.
- 3) Sam S. Baskett, "Jack London on the Oakland Waterfront", *American Literature*, 27 (1955-1956), P.363-371.
- 4) 1903年3月9日「ユース・コンパニオン」の編集者あて。
- 5) Jack London 1989, *The Works of Jack London* P.289.
- 6) Jack London 1989, *The Works of Jack London* P.281-282.
- 7) Jack London 1989, *The Works of Jack London* P.289.
- 8) Jack London 1970, *Jack London Reports* P.360.
- 9) Welcome-tahiti.com.(Chinese-Tahitians:TheFirst Naturalized immigrants 1865-1973)
- 10) 「陳芳」のアメリカ名は (Chun Afong) となっている。
- 11) 現在はハワイのアメリカ軍博物館となっている。

### 第3章 ジャック・ロンドンの創作初期の中国人観について

“White and Yellow”と“Yellow Handkerchief”は、彼の全ての著作の中で、初めて中国人を中心人物の一人として書いた小説と認識される。日露戦争の後1905年にこの二つの短編小説は正式に出版された。しかし、“Yellow Handkerchief”の執筆の記録は更に1903年まで遡れる。*JACK LONDON A DEFINITIVE CHRONOLOGY*の中に“1903, Feb 20 mails ‘Yellow Handkerchief.’”<sup>1)</sup>と書かれているので、“Yellow Handkerchief”は1903年2月20日、つまり日露戦争を取材に行く一年前に完成していたことがわかる。“White and Yellow”はそれより早いと考えられる。1903年というのはロンドン(1876～1916)の作家人生(約20年間)の中ではかなり早い時期だと思う。創作初期において、ロンドンに中国人への偏見があったかどうか、そして、あったとすればどのような偏見を持っていたのか。このことを探るためこの二つの短編小説を分析する必要があると考える。

又は、この二つの短編小説は同じ短編集 *TALES OF THE FISH PATROL* の中に収められていて、小説の主人公は同じく「私」と「黄色いハンカチ」となっており、内容の関連性もかなり高いし、特に、この二つの作品を書いていた間には中国人に対する偏見についての変化が見られないため、一緒に扱ってロンドンの初期の中国人観を分析したいと考える。

#### 3.1. 中国人に人種偏見を持つロンドン

二つの短編小説のテーマと物語の設定から分析したいと思う。まず“White and Yellow”については、白と黄、この二つの色で小説の名前が付けられた、そのうち“White”は白色人種、“Yellow”は黄色人種と理解できる、ロンドンが皮膚の色で人間を分別していることがわかるだろう。そして、“Yellow Handkerchief”では、“Yellow”が他の色にしてもよさそうなものだが、ロndonは“Yellow”に固執した。ロンドンが故意に“Yellow”にした理由は、Yellow Handkerchiefが黄色人種であるからだと考える。人種的な概念がロンドンの頭の中に深く入っていたと理解できるだろう。また、二つの物語の設定は、同じくカリフォルニアにいる白人と中国人の対立である。具体的に言えば白人はルールの設定者であり、ルールを守る人である、一方、中国人はルールを破る違法性のある存在にされた。いわゆる、白人は正義であって、中国人は邪悪である。1904年5月22日、チャーミアンへの手紙の中にロndonは “In the past I have preached the Economic Yellow Peril ;”<sup>2)</sup> と書



いた。“The Yellow Peril”を書いた時に中国人が白色人種の脅威であったなら、この時には中国人は白人の国アメリカの資源を略奪する経済的な脅威だと彼は考えたのだろう。ロンドンが書いた白人の「私」は、中国人の密漁への取り締まりにおいて、どんな時でもどんな困難があっても妥協しないで、命をかけて全力を尽くす人物として描かれたので、ロンドンの中では、黄色人種の中国人と白人の矛盾は調和できないものと考えられただろう。

小説の中に中国人に対する呼び方がいくつも出て来た。次に、これらの呼び方について分析したいと思う。二つの小説の中で普通の呼び方“Chinese”以外で一番使われているのは“Chinaman”である。現在、中国人に“Chinaman”と呼びかけたら大変なことになる。例えば、2004年の番組でアメリカのNBAのチームGolden State Warriorsの監督Steve Kerrが有名な中国人選手姚明に“Chinaman”と言ったが、これは大変な人種偏見の意味を含む言葉なので、Steve Kerrは姚明に謝ることを要求された。それ以外にも“Oriental”(P.16)、“the swart Mongols”(P.18)、“savage crew”(P.20)、“yellow-face heathen”(P.217)、“coolies”(P.219)、“a yellow barbarian”(P.232)<sup>3)</sup>のような象徴的な表現によるアジア人に対する偏見や蔑視の言葉もあった。“Oriental”と“coolies”はもちろんアジア人に対する侮辱的な呼び方である。最初アメリカに行った中国人は重労働に従事する人が多いので、「中国人＝“coolies”」がロンドンの頭の中にあっただろう。“Oriental”は“The Yellow Peril”の中にも使われた。“the swart Mongols”については、今でもアジア人、モンゴル人以外にも中国人と日本人、又はインド人やネパール人などもモンゴル人種と言われている。その根拠は、ドイツの人類学者Blumenbach, Johann Friedrichの論文“De generis humani varietate nativa”にあった。彼は広く人を五つの人種に分類したが、モンゴル人種はその中の一つで、近代になると優生学の見解の影響が広がり、“the swart Mongols”の様な言葉は蔑視的な呼び方と見なされていて、人種偏見に繋がっていた。“savage crew”、“yellow-face heathen”、“a yellow barbarian”は、更に中国人或いは黄色人種に対する人種偏見を表す露骨な表現であろう。

“White and Yellow”の中で「私」とYellow Handkerchiefの間に二回会話がなされた。それは、

“Yes”, I said. “Bime by, allee same ddown, velly quick, you bail now. sabbe?” (Jack London 1905:23-24)

“Now keep your distance” I commanded, “and don’t you come closer.”“Wha’ fo” he demanded indignantly, “I t’ink um talkee talkee heap good.”“ Talkee talkee,” I answered bitterly, for I knew now that he had understood all that passed between George and me “What for talkee talkee? You no sabbe talkee talkee.” He grinned in a sickly fashion, “Yep, I sabbe velly much. I honest Chinaman.” “All right.” I answered “You sabbe talkee talkee, then you bail water plenty plenty. After that we talkee talkee.” (Jack London 1905:30)

というものである。ロンドンが描いた中国人はアメリカで生活しているのに変な英語しか喋れない。少し中国人の特徴を捉えてはいるが、これは中国人に関する醜悪な描写でもある。また、主人公 Yellow Handkerchief の外観描写も次のように二箇所ある。

This was met by a curdling yell of rage. A big Chinaman, remarkably evil-looking, with his head swathed in a yellow silk handkerchief and face badly pock-marked.] (P.19)

「Leading them came a big, muscular man, conspicuous for his pock-marked face and the yellow silk handkerchief swathed about his head. It was Yellow Handkerchief, the Chinaman...(Jack London 1905:216)

このような外観描写を読んでもと中国人を海賊や悪魔のような存在としてロンドンが書いていることが分かる。しかしこの描写は中国人の特徴をあまり捉えていない上に、このような外観は人に悪いイメージしか与えない。中国人のことを醜悪に描いた結果と言える。この様に中国人を醜悪に描いたロンドンに中国人に対するの偏見があったことは一目瞭然だ。

故意に白色人種と黄色人種を分けて、中国人に対する人種偏見を持つようなひどい呼び方の表現を多数書き出し、醜悪な描写をしたことも含めて、ロンドンは中国人に人種偏見を持っていたことは間違いないだろう。しかし、アメリカ白人が持つ中国人への偏見はその時代の象徴の一つであるので、ロンドンが中国人への人種偏見の急先鋒であるかどうかについては次の節で説明したいと考えている。

### 3.2. アメリカ白人としての人種偏見

“Chinaman”については、主人公の「私」と Yellow Handkerchief の会話の中で Yellow Handkerchief が自ら “I honest Chinaman” と言い放った、自分の仲間については “No can do. Velly bad Chinamen, heap velly bad. I t'ink-um-” と言った<sup>4)</sup>。Yellow Handkerchief が自分自身と仲間に偏見を持っているとは思わないが、よく “Chinaman” と呼ばれてきたので覚えたのだろう。“Chinaman” を調べて見るとこの表現を含む本や文章の名前はいくつも出てくる。例えば、*Jew and Chinaman*、*Real Chinaman* 等々である。これらの本の出版の時期はほとんどロンドンが生きていた時期と重なる。そして、あまり中国人に対する偏見がないと言われていた、ロンドンの同時代作家 Mark Twain の手紙の中にも、“Chinaman” といった呼び方も出て来るので、ロンドンが生きた時代に “Chinaman” という呼び方はよく使われていただろう。“Chinaman” は確かに中国人への偏見を含む言葉に違いないが、現代とは違って当時は普通に使われていたと思うので、ロンドンが偏見を持っていたとしても、当時においてそれは一般的な白人が持つ偏見に過ぎないと考えられる。“the swart Mongols”、“savage crew”、“yellow-face heathen”、“a yellow barbarian”、こう言った表現は、白人のアジア人に対する文化や道徳への無理解が原因だと思われる。ロンドンと同じ時代の新渡戸稲造は日本の宗教について、ベルギーの友人 M. de Laveleye から “No religion! How do you import moral education?” (新渡戸稲造 2017: 19) と言われたことがある。白色人種と黄色人種の間での異質の文化や道徳への無理解の問題は現代にもあるだろう。白人の道徳はおおむね宗教から得たものと言える。自己の信仰をキリスト教から仏教に変えたドイツ人のケネル無方は「ドイツにあつて日本にないものは何か。それは宗教の授業だ。... 無宗教であることを選んだ人は、宗教の授業の代わりに、道徳を学ぶことになっている。」(ケネル無方 2015:24-25) と書いた。このように宗教から道徳を身につけた白人たちは、宗教概念が薄いアジア人をよく理解できずに、上記のような言葉を発したのだろう。ロンドンだけではなく、ベルギーの教授にさえ理解できないものを一般の白人はもっと理解できないだろう。しかし、ロンドンの著作 “The Yellow Peril” と “If Japan Wakens China” の中に次のような表現がある。“The Yellow Peril” では

“What do you think of the Japanese?” was asked an American woman after she had lived some time in Japan. “It seems to me that they have no soul.” Was her answer. This must not be taken to mean that the Japanese is without soul. But it serves to illustrate

the enormous difference between their souls and this woman's soul. There was no feel, no speech, no recognition. (Jack London 1989:286)

また、“If Japan Wakens China”には

An American lady of my acquaintance, after residing for months in Japan, in response to a query as to how she liked the Japanese, said: “They have no souls.” In this she was wrong. The Japanese are just as much possessed of souls as she and the rest of her race. (JACK LONDON REPORTS 1970:360)

という部分がある。ロンドンと比較的早く白色人種と黄色人種との異質の文化や道徳についての無理解の問題に気付いたのだろう。日本人には魂がないのではなく、日本人の魂はその白人女性の考える魂とは違っているのだとロndonは分析し、その女性の考えは間違っていることを指摘した。ロndonはだんだんアジア人のことを理解して来たからこそ、こう指摘できたのだろう。アジア人への理解が深まるにしたがって、上の様な偏見や無責任な言葉はロndonの作品の中から消えて行く傾向がある。この時は、ロndonがまだ理解できていなかったのだ。この点について言えば、ロndonが他の白人より中国人に対する偏見を持っていたとは言えない。

「私」と *Yellow Handkerchief* の間の二回の会話に関しては、そのころロndonと出会った中国人というのは、社会的地位がかなり低い中国人である。出稼ぎの目的でアメリカに行った中国人は英語を勉強する余裕がないのも事実であるのに、ロndonは中国人の欠点ばかりを捉えているので、やはり中国人への偏見があったのだろう。しかし、この偏見は当時の社会現象だと考えると、ロndon特有の偏見ではないとも言えよう。

アメリカは、1882年に中国人排除法案が国会で通ったあと、1894年に条約を改正してアメリカにいる中国人への制限を厳しくし、1902年の法改正で完全に中国人を締め出してしまった。アメリカ、特にカリフォルニアにいる白人は中国人への偏見がひどかった。中国人排除法案の審議が国会で進むことは、多くのアメリカ白人が中国人への偏見や敵意を持っていたことを示している。中国人をアメリカから排除しなければならないという講演をする白人もいれば、直接中国人の店を燃やす、あるいは中国人を殺す白人もいた。このような状況の中では、逆に中国人に偏見を持ってないアメリカ白人はごく少数だったと考えら

れる。残念ながら、ロンドンはこのごく少数の人たちに入らなかった、しかし、この時のロンドンが他のアメリカ白人より中国人への偏見が強かったとは思わない。この時のロンドンは公的な場で社会主義を宣伝したが、中国人を締め出せとは宣伝していない、普通の中国人に暴力をふるうことは決してなかった。ただ、社会の影響と自身の原因で彼の中に中国人への偏見は確かに存在していた。その時のロンドンの様な偏見は当時のアメリカ社会においては一般的だったと考えられる。

### 3.3. 中国人に対するロンドンの独自の見解

この頃のロンドンには他の白人以上の偏見を持っていたわけではないことがわかったが、中国人に対して彼は独自の認識を持っていたと思う。人間は一人一人自分の考えを持っている。例え同じ中国人への偏見を持つ白人の中でも、その考え方はそれぞれ違うだろう。では、この頃のロンドンは中国人について、どんな考えを持っていたのだろうか。この二つの小説の具体的な内容から分析すれば、それは明白になると考える。

まず、ロンドンには中国人が臆病者だと考えていた。“White and Yellow”では中国人をこのように書いた。

He of the yellow handkerchief and pockmarked face came toward me threateningly, but I put my hand into my hip pocket, and he hesitated. I was unarmed, but the Chinese have learned to be fastidiously careful of American hip pocket (Jack London 1905:19-20)

「私」が手をズボンのポケットに入れた時、中には何も入っていないのだが、Yellow Handkerchief がすぐおとなしくなったところを見ると、彼は臆病者だろう。さらに次の部分も見てみよう。

the sail bellied out, and the Reindeer heeled over – over, and over, till the lee-rail went under, the deck went under, the cabin windows went under, and the bay began to pour in over the cockpit rail ... While I pressed her under and debated whether I should give up or not, the Chinese cried for mercy ... The spirit of the Chinese was broken, and so docile did they become that ere we made San Rafael they were out with the tow-rope,

Yellow Handkerchief at the head of the line. (Jack London 1905:36-37)

船の水漏れがひどくなると泣きながら「私」に寛大に許してくれるよう願った。中国人の精神はもう壊れたのだ。列は Yellow Handkerchief から始め、ロープもかけられることなく自ら連れていく場所に進んだと書かれている。ロンドンには中国人をかなりの臆病者として描いたので、彼の心の中にはそのような中国人像があったと考えられる。

そして、ロndonは中国人が狡猾な者だと考えた。次のように、「私」のポケットの中に銃があるかどうかをこっそり確認したと書いている。

I felt some one brush against my hip pocket. I made no sign, but out of the corner of my eye I saw that the Yellow Handkerchief had discovered the emptiness of the pocket which had hitherto overawed him. (Jack London 1905:23)

このように中国人を狡猾な者と書いたところは何箇所もある。小説の中では、「私」は Yellow Handkerchief に騙されて、仲間の船と繋ぐロープを切断したが、その後、逆に「私」は Yellow Handkerchief たちに捕まった。そして、「私」を無人島に置き去りにして成り行き任せにした後、Yellow Handkerchief は一人で島に戻って、「私」を殺そうとした。または、無人島で「私」が見つからなかったので、「私」を海から出させるため、わざと一回島から離れるふりをして、すぐ無人島の反対側に上陸したのだ<sup>5)</sup>。ロndonは心の中で中国人は狡猾だと考えていたのだろう。

また、ロndonの心の中では中国人は醜い悪魔のような存在でもあった。特に、Yellow Handkerchief の外観を描く時に、醜い悪魔のように描いたし。“This made him more evil-looking than ever,...”<sup>6)</sup> という文もあったので。ロndonの印象の中では中国人の顔も性格も悪魔のようになっていたように思われる。ロndonは、自伝的小説 John Barleycorn の中に次のように同様の中国人像を書き残している。ロndonが7歳の時のことである。

in San Francisco's Chinatown. In my delirium I wandered deep beneath the ground through a thousand of these dens, and behind locked doors of iron I suffered and died a thousand deaths.... as I cursed my father sitting there underground and gambling with

long-haired, long-nailed Chinamen. (Jack London 1982:949-950)

彼はこのような夢を見たので、この種の偏見は子供の時からあったと思われる。これは、他の白人と違う、中国人に対するロンドン独自の見解だと考えられる。どちらにせよ、悪い中国人像しかなかったようだが、これはロンドンが当時中国人に対して持っていた現実的な見方だろう。

このようにロndonは、創作初期には中国人のことを違法者、アメリカの資源の略奪者、臆病者、狡猾な者、悪魔のような者、無道徳な者、などと悪い所ばかりを書いた。彼が中国人の優れたところを全く書かなかった原因は、彼が中国人のことを全く理解していなかったし、理解しようと思わなかったからだろう。原因は、当時中国人に対してロンドンが持った蔑視的な偏見だと思われる。この様な蔑視的な偏見を持つと、当然中国人のいいところを見つけることできないだろう。当時の社会環境が彼にこの様な蔑視的な偏見を育成したと考えられる。ロンドンだけではなく、その時代のほとんどどのアメリカ白人はこういう蔑視的な偏見を持っていたと考える。つまり、当時のアメリカ白人が中国人に対して持っていた一般的な偏見はこの様な蔑視的な偏見だったとみなされる。

このころのロンドンには日本に来たことがあるが、アザラシ漁船で来たので、日本での滞在時間は短かったし、その目的は日本人の考えやアジア文化を理解することではなかった。しかも、こういうふうに蔑視的な偏見を持つロndonは、自らアジア人のことを深く理解しようとは思わなかったし、わざわざ理解する必要もない、というのが彼の思いだっただろう。結局、日本に上陸した時はほぼ毎日酒を飲んでいて、『ジュン・バーリコーン』によると、小笠原諸島に上陸すると、ここでの10日間はアルコールに明け暮れてしまった。北の海での厳しい作業の後、船は横浜に入ったが、ここでの2週間も酒場以外の所にはほぼ行かなかった。それでも、ロンドンが鋭い目で見た日本には別の一面もあった。“A Night's Swim in Teddo Bay”には、バーでの会話の中に

Yes, a might nice set of people are them japs, for all their being half civilized, ... An enterprising people, they are. ... They're always longing to be, as they call it, Europeanized or Americanized. They're only too quick to discard their old habits and way of doing things for the newer and more improved customs and methods of ours. (Jack London 2009:08-109)

という部分があったので、ロンドンが日本の進歩の一面を見たと言える。日本人を持って中国人を代表することはできないが、同じ黄色人種のアジア人としての共通点を見て彼がもっとアジア人に興味を持って、理解しようとし続けたと思う。この“White and Yellow”と“Yellow Handkerchief”を書き終わったおよそ一年後、日露戦争の従軍記者として2回目に日本に来た時に、彼は朝鮮半島をわたって、中国まで来て、やっと自分の目で中国を見ることができた。日本人、朝鮮人、中国人を比較して、ロンドンのアジア人特に中国人に対する偏見が大きく変化した。つまり、「蔑視的な偏見」から「評価的な偏見」に変化した。次の章で詳しく評価的な偏見と偏見の変化について論じたいと考えている。

中国人への理解が深まるにつれ、ロンドンの中国人への偏見が自然と変化している。この変化は重要な意味を持つので、この変化はどこから始まったのか、どのように発展していったのか、なぜロンドンの頭の中で変化し続けたのか、現代の世界にも通じる大きな意味があると考えられるので、さらに深く掘り下げたい。



注

- 1) Russ Kingman 1992, *Jack London a Definitive Chronology*, P.42
- 2) Jack London 1988, *The letters of Jack London–Volume One: 1896-1905*, P.430
- 3) Jack London 1905, *Tales of the Fish Patrol*
- 4) Jack London 1905, *Tales of the Fish Patrol*, P.30
- 5) Jack London 1905, *Tales of the Fish Patrol*, P.220- 239
- 6) Jack London 1905, *Tales of the Fish Patrol*, P.220

## 第4章 ジャック・ロンドンの黄禍論—黄禍論の歴史に関わって

近年中国が発展してきており、その経済面の影響力が世界中に大きく広がっている。世界の経済の発展、そして貿易を進めるため、共存共栄の意味を持つ大きな経済圏「一带一路」<sup>1)</sup>の政策が始まった。中国を中心にできた一带一路経済圏に対しては、アメリカのポンペオ国務長官が、参加しているすべての国が「財務の罠」に陥るのではないかと言い出した。彼は例として、スリランカ・ハンバントタ港を九十九年間中国が自由に借用していることを挙げて説明した。

今の時代の新たな黄禍論が始まったかのように感じられる。今、中国の資金や技術などが世界各地、特に途上国に進出している最中で、中国ブームになっている時、黄禍論のようなこの中国脅威論が再びこの世の中に蘇るのか。筆者はジャック・ロンドンの“The Yellow Peril”などの作品を分析しながら、黄禍論の歴史を辿って、さらに中国伝統思想についての考察を加え、この答えを探り当てたいと考えている。

### 4.1. 西欧世界の黄禍論の始まり

黄禍論は白人国家において現れた、黄色人種、主に日本と中国についての脅威論であり、1890年代後半にドイツ皇帝のヴィルヘルム 2世が広めた寓意画『ヨーロッパの諸国民よ、諸君らの最も神聖な宝を守れ』<sup>2)</sup>によって世界に流布した。この論調は日清戦争を背景にしている。当時の中国は半殖民半封建社会に落ちていて、ヨーロッパ諸国は中国で各自の植民地を持ち、例えば、イギリスは香港<sup>3)</sup>、フランスは広州地区、ドイツは山東半島、ロシアは遼東半島などの植民地を持っていた。日清戦争が終わり、清王朝が負けて、日本がこれらのヨーロッパの植民地から自分たちの植民地を奪い取るのではないかと考えたため、日清戦争の講和条約に際してロシア、ドイツ、フランスの三国が行った三国干渉があったというわけだ。この際に黄禍論が生み出されて広がった。そして、1904年の日露戦争でロシアの植民地である遼東半島を日本が奪ったので、この論調はさらにヨーロッパの白人の中で定説になったのだろう。

黄禍論の始まりを見ると、ロシア、フランス、ドイツにおける黄禍論の対象は日本を中心としている。しかしながら、1904年にジャック・ロンドンが日露戦争中に日本軍の従軍記者として取材した時に書いた“The Yellow Peril”を読んで見ると、上述したことと大き

く食い違ふところがあることがわかる。ロンドンの“**The Yellow Peril**”の主張は、中国は“**Yellow Peril**”，日本は“**Brown Peril**”である。日本は本当の“**Yellow Peril**”ではない。日本はただこの“**Yellow Peril**”の火を点けたに過ぎなくて、本当の“**Yellow Peril**”は中国であることが書いてある。

では何故同じ白人の国アメリカとフランスやドイツやロシアの間でこんな大きな食い違ひが起こったのか。当然、その中の利害関係を考えなければいけない。日本とヨーロッパが争っていたのは中国での植民地をめぐることである。アメリカは中国に植民地がなかったので、日本とアメリカの間にはあまり利害関係がなかった。そして、かつて匈奴<sup>4)</sup>を代表するアッティラ (Attila) やモンゴルを代表するチンギスハンの息子オゴデイがヨーロッパを制したことがあった。その中で多くのヨーロッパ人が犠牲になったので、ヨーロッパ諸国は当時の大和民族である日本がもしや匈奴やモンゴルのあとを追うのではないかと考えていただろう。アメリカにはこのような歴史がなかったし、一方で、中国人の移民労働者の問題がアメリカで広がったため、同じ白人社会にもかかわらず、アメリカとヨーロッパの間に大きな違ひが起きたと考えられる。

## 4.2. ヨーロッパ諸国と異なるアメリカ産の“**Yellow Peril**”、及びそのジャック・ロンドンへの影響

移民の国と言われているアメリカは世界中から移民を受け入れたが、ロンドンが生きた時代の前後には、白人が主体のアメリカが歓迎しない人種があった。それは中国人と日本人である。その時代に何が起きたのか、遡って見てみたい。

### 4.2.1. 中国からアメリカへの移民

ゴールドラッシュと言えば、カリフォルニア州が初めて世界の視線を集めた出来事と見られていると同時に、中国からアメリカへの大規模的な移民の始まりの時期でもあった。多文化主義研究では全米的に最も名の知れ渡った学者の一人であるロナルド・タカキの著作『多文化社会アメリカの歴史-別の鏡に映して』の中には次のように書かれている。

カリフォルニアが併合された結果、アジアへ向かってアメリカが拡大しただけではなく、アメリカへ向かうアジア人の移住も始まった。

—中略—

もっとも若く、もっとも落ちつかない、そしてもっとも勇敢な中国人の多くは、ガムサアン、つまり「金の山」のことを知って村を離れ、アメリカへ向かった。

—中略—

外国人鉱夫税は、一千八百七十年の公民権法によって無効とされるまで有効であった、それまでにカリフォルニアは中国人から五百万ドルを取り上げており、これは州の歳入全体の二十五ないし五十%に当たる額であった。

一千八百六十年代には、カリフォルニアの鉱山で働いている中国人は二万四千人にのぼり、それはアメリカ全体の三分の二であった。(Ronald Takaki 富田訳 1995 : 334-340)

つまり、ゴールドラッシュは中国からアメリカへの大規模的な移民の原因になったと見られるが、実は、アメリカの拡張による、人手不足の結果である。だから、最初アメリカは中国からの労働力を歓迎していた。中国人労働者は当時のカリフォルニア州の歳入全体の25%から50%に当たるほどに貢献していたし。そして、アメリカの大陸横断鉄道建設<sup>5)</sup>の時に、再び思い出されたのは万里の長城をも造った中国人であった。その後、アメリカにいる中国人労働者はもっと増えたとし、アメリカの人手不足を解決するため、更に、1868年に「米中天津条約追加協定」<sup>6)</sup>ができた。この協定によってアメリカにいる中国人に商業または永住の権利があることが示されていた。しかし、このようにアメリカと中国人労働者の相互的利益が生まれる状況は長くは続かなかった。若槻泰雄の『排日の歴史』の中にはこう書かれている。

他方、「天津条約追加協定」の翌六九年、東部と西部をつなぐ大陸横断鉄道は完成し、東部からの人口移動が激しくなったので、この頃から中国人労働者と白人労働者の摩擦は次第に重大化し始めた。低い賃金に甘んずる中国人移民は雇い主には喜ばれたが、新たに細部にたどりついた貧困なヨーロッパ人移住者とは正面から競合したからである (若槻泰雄 1972 : 15)

大陸横断鉄道が完成し、大量な人口移動が起こった結果、カリフォルニアの労働力が過剰になってしまった。当時カリフォルニアに在住中の中国人労働者たちは用済みになった。遂に、アメリカは用済みになった中国人労働者を見捨てた。その真実は『怒りの葡萄』の

中にも書かれている、資本家は賃金を低くするために全国から労働者をカリフォルニアに掻き集めてきた。そして、資本家と労働者の矛盾が表面化し、資本家による政府は労働者の怒りを中国人労働者に転化した。彼らは中国人労働者が彼らの仕事を奪ったと信じ、結果、カリフォルニアの中国人は白人資本家と白人労働者両方からの怒りを浴びせられた。カリフォルニアにいる中国人労働者に対する暴力事件も続々発生していた。遂に、1879年にはカリフォルニア州法により中国系移民は選挙権を剥奪され、1980年にはさらには中国人移民取締条約が成立し、又、その後一連の中国人移民排斥法等々により中国人は締め出されていった。アメリカにいる中国人労働者たちは権利をどんどん失ってしまったと同時に、これらの力が働いた結果、人種的な偏見や中国人脅威論が自然に生まれてきた。これらの中国人に対する不平等な待遇はロンドンが生きていた時代と重なっていて、お互いに影響し合っていた。

#### 4.2.2. 初期のロンドンの中国人への偏見

ロンドンの前期の中国人もの小説から、彼が中国人に強い人種的偏見をもっていたことがわかる。特に最初の中国人作品 *Tales of the Fish Patrol* 中の二つの短編 “White and Yellow” と “Yellow Handkerchief” には中国人労働者に対する “The swart Mongols”、“Yellow face heathen”、“A yellow barbarian”、と言った呼び方が出てくる。しかし、これらの小説の中の中国人についての描写は次の通りである。

“This was met by a curding yell of rage. A big Chinaman, remarkably evil-looking, with his head swathed in a yellow silk handkerchief and face badly pock-marked.” (Jack London 1976 : 19)

“Leading them came a big, muscular man, conspicuous for his pock-marked face and the yellow silk handkerchief swathed about his head.” (Jack London 1976 : 216)

これらの描写は全く中国人の特徴を表していない上に、1909年に書いた “The Chinago” のような中国人の心理描写が全くない。このようないい加減な描写とひどい呼び方から見ると、ロンドンが中国人のこと全く理解していないということのほか、中国人に対する強い偏見や人種的な差別、中国人への軽視が見える。この時のロンドンは中国人に対して

盲目的な偏見を持っていたと言えるだろう。ロンドンが中国人労働者に対して強い偏見を持つには、このように社会的な原因以外にも彼自身の原因もある。

#### 4.3. ロンドンの中国人への人種偏見の始まりとその原因

ロンドンの小説を巡ってみると、彼の人種偏見はかなり早い時期から形成されたことがわかる。中国人への偏見も“White and Yellow”と“Yellow Handkerchief”より前から存在していた。ロンドンの人種偏見、特に中国人への人種偏見を形成した原因は簡単に纏めると三つがある。

##### 4.3.1. 母親からの影響

その一つ目は母親からの影響と言える。誰でも母親から生まれるし、母親は幼い頃に子供が一番影響されやすい人間であり、そして、その影響は子供の性格などを形成し、長い人生の中で影響を及ぼし続ける。一体ロndonは母親からどんな影響を受けたのか、彼の経歴を語る本と彼の自伝的小説から探り出したいと考えている。

ジャックの母親は、彼の人種（アングロ・サクロン系）以外はすべて劣っていると彼に教えた。（ラス・キングマン 辻井栄滋翻訳 1989 : 35）

ロンドンの有名な自伝的小説『ジョン・バーリコーン』の中には、このようなことが書いてあるが、他にも次のような言及がある。

当時はそこは、人の住まない未開の土地だったが、わが家は古いアメリカの家柄であって、隣人のように移住してきたアイルランド人やイタリア人などとは違うのだという母の自慢を、私はたびたび聞かされた。私たちの地域のどこを見まわしても、古いアメリカ人の一家といえばほかに一軒しかなかったのだ。（ジャック・ロンドン 辻井栄滋訳 1986 : 19）

私の母には持論があった。まず、彼女の確たる主張によると、ブルーネットで黒い目をした人間はどんな連中も、人をだますというのだ。言うまでもなく母は、金髪色白碧眼（ブロンド）であった。次に、黒い目のラテン民族は非常に神経質で、残忍であると思ひ込ん

でいた。再三、母の口から語られる世の中の不思議さや恐ろしさに聞きほれながら、たとえ故意でないにしても、もしちょっとでもイタリア人を怒らせたりしようものなら、きっと仕返しに背中をグザッとやられるよ、と言われるのを聞いたことがあった。“背中をグザッとやられる”－これは、母親独特の言い回しであった。(ジャック・ロンドン 辻井栄滋 訳 1986 : 22-23)

このようにロンドンの至近にいた母親から彼の幼い頭に人種偏見の種を播かれた。つまり、母親からの悪影響である。そのことはロンドン自身の筆からも、彼の経歴が一番詳しく書かれているラス・キングマンの本からも証明できるだろう。

#### 4.3.2. 社会における誹謗

その原因の二つ目は社会の中にある中国人に対する誹謗である。ノリス<sup>7)</sup>(Frank Norris)の「第三社会」にこんな話がある。サンフランシスコのチャイナ・タウンにあるレストランへお茶を飲みに入ったきり行方不明になってしまった白人女性の話であるが、彼女はずっと後にアヘン窟で麻薬患者になり中国人の奴隷になり果てているところを発見される、と言う話だ。当時のアメリカ社会にとっては、中国人の集落チャイナ・タウンは悪魔の巣窟であって、中国人はアメリカ白人を害し、お金をだまし取るなど悪いことばかりをやっている、と宣伝していた。ロンドンの自伝的小説『ジョン・バーリコーン』の中も次のような部分があった。この悪夢は彼の心に残って、酔っぱらうと夢に出て来ただろう。

7歳の時パーティでお酒(ワイン)を進められて、殺される恐れがあったので、飲みすぎて、酔っぱらった、夢の中で中国人が出た。“それはサンフランシスコの中国人街(Chinatown)の不正の巣窟に関する話だった。悪夢の中で、私は地深く無数のこうした巣をさまよひ、鍵のかかった鉄のドアの陰で苦しみ、無数に死を繰り返した。そして、私の父がこうした隠れた地下室のテーブルに着いて、中国人とばくちをやっているのにでくわすと、私はすっかり憤慨し、ひどい悪態をついた。ベッドに起き上がり、引き止めようとする手と戦いながら、大声張りあげて父をののしった。素朴な田舎を自由に走りまわっている子供が耳にするような、大人の口にする思いもよらない言葉、自分で喋っているのだった。それまでそんな悪罵は口にすることはなかったのに、この時には、それがあらかぎりの声になって出てくるのだった。それも、地下に座って、長い髪と長い爪を生やし

た中国人とばくちをやっている父に対する悪罵であった。”（ジャック・ロンドン 1986 : 28）。

アメリカ白人は中国人に対する敵意、憎しみ、警戒心などを煽ぐようにした。そして、このことは7歳のロンドンにも及んで彼の心の中に移り住んだだろう。

#### 4.3.3. ロンドン自身の原因

その三つ目は彼の特別な出自である。ロンドンは一生自分の父親は誰なのか分からなかった。彼とウィリアム・H・チェイニーの手紙を調べてみると、ロンドンは自分の父親はチェイニー教授ではないかと疑ったが、チェイニーはずっとそれを否定していたので、最後には、ロンドンも諦めた。結局、ロンドンの父親は誰なのか、彼には分からないままだったのだ。また、ロンドンの母親はロンドンのことを自分にとって恥のような存在と考えていた。もし、彼女が妊娠しなかったら、ロンドンを生まなかったら、自分の人生がうまく行っただろうとずっと考えていた。ロンドンは両親からの愛情を全くもらえなかった。ロンドンが子供の時、彼と親しい人は三人<sup>8)</sup>しかいなかった。この三人には一時的な関心や面倒を見ることできるが、両親からの愛と比較することはできないだろう。

ロンドンが仕事のできる年齢になると、早くも新聞配達の仕事に就いた。それから、缶詰め工場、ボーリング場などいろいろな所で働いた。しかし、得た給料はほとんど母親のところに行った。その後、黒人の乳母ジェニーのところからお金を借りて、知り合いのところから船を買うことで、人生の冒険が始まったと言う。このように、両親から愛情を得られず、子供の時から牛馬の如くに働いたロンドンは身の頼り処がなかつただろう。社会に出て、アメリカ社会と母親の影響を受けて、自分が唯一自慢できる所は血統であることに気づく。そして、自分が古いアメリカ人（アングロ・サクソン血統）であり、アメリカの主人たる血統であることが彼の身の頼り処になってしまった。こうして人種偏見の思想が彼の頭の中にさらに根深くなったのだろう。この三つの原因でロンドンの中国人への人種偏見が始まったと考えられる。このような偏見を持ったまま1904年に日露戦争取材しに行ったが、5ヶ月の間に日本、朝鮮、中国に滞在したことで、日本人や朝鮮人や中国人に対する彼のイメージがどういうふうになったのか。次の節で分析していきたい。

#### 4.4. “The Yellow Peril” の中の偏見の分析



ロンドンが“The Yellow Peril”の中に一体どんなことを書いたのか。Alex Kershawは *JACK LONDON A LIFE* の中にまとめた。

‘The Yellow Peril’ , Jack warned that the ‘yellow’ Chinese and the ‘brown’ Japanese might one day join forces. ‘The menace to the western world,’ he wrote, ‘lies, not in the little brown man, but in the four hundred millions of yellow men should little brown man undertake their management.’(Alex Kershaw 1997:143)

Alex が纏めているように、中国人と日本人は同じ黄色人種なのにロンドンは二つの国を分けて考えている。つまり、中国は‘黄禍’ (Yellow Peril)、日本は‘茶禍’(Brown Peril)である。白人種の脅威は当時ロシアを倒した小さい‘茶禍’ではなく、四億人の人口を持つ‘黄禍’の中国である。だからいつか日本が中国を目覚めさせたらどうなるだろうと考えていただろう。

ロンドンは、1904年1月23日に日本に到着してから同年の6月4日ごろに帰国するまでの5ヶ月余りの間に、日本と朝鮮と中国で取材をした。横浜に着いてから立ち去るまで二週間ぐらい日本にいた、鴨緑江を渡って中国に着いたのは5月1日で、それからアメリカに帰るまで一ヶ月余り中国にいた。あと残った時間は朝鮮半島で日本軍や朝鮮人と過ごしていた。ロンドンは、この期間中に見た朝鮮人、中国人、日本人について感じたことと、この三つの国が今後の世界、特に白人世界にどんな影響を与えるかという予想を、“The Yellow Peril”の中に書き込んでいる。これから、朝鮮人、中国人、日本人についてロンドンが一体どう考えていたかについて一つずつ分析していきたい。

#### 4.4.1. “The Yellow Peril” 中の朝鮮人

まず朝鮮人については “The Yellow Peril” の中にこう書かれている。

They have splendid vigor and fine bodies, but they are accustomed to being beaten and robbed without protest or resistance by every chance foreigner who enters their country.  
(Jack London 1989:271)

ロンドンは朝鮮人のことを無能なタイプの人間のように書いている。このような朝鮮人は

白人に対する脅威にはならない。朝鮮人はロンドンの胸中では“peril”になる資格がなかったと言うことで、彼らは黄色人種ではあるが“Yellow Peril”にはならないのだ。

#### 4.4.2. “The Yellow Peril”の中の中国人

かつてのロンドンには中国人に強い人種偏見を持っていたということが確認できた。しかもその偏見は盲目的な人種偏見であり、つまり中国人のこと全く理解してないにもかかわらず、中国人に対して強い人種偏見を持っていたのだ。しかし、ロンドンは日露戦争取材する機会を使って中国に一ヶ月ぐらい滞在した。ロンドンの観察を通じて、この1ヶ月間で彼が中国人や中国の事をどのぐらい理解できたのだろうか、そして、中国人に対する彼の偏見にどのような変化が起きたのだろうか。ロンドンは“The Yellow Peril”の中で中国人についてこう書いている。

The Korean is the perfect type of inefficiency-of utter worthlessness. The Chinese is the perfect type of industry. For sheer work no worker in the world can compare with him. Work is the breath of his nostrils. It is his solution of existence. It is to him what wandering and fighting in far lands and spiritual adventure have been to other peoples ... The Chinese is no coward ... Here we have the Chinese, four hundred millions of him, occupying a vast land of immense natural resources-resources of a twentieth century age, of a machine age; resources of coal and iron, which are the backbone of commercial civilization. He is an indefatigable worker. He is not dead to new ideas, new methods, new systems. Under a capable management he can be made to do anything. Truly would he of himself constitute the much-heralded Yellow Peril were it not for his government, is set, crystallized. (Jack London 1989:274-278)

いよいよロンドンには中国人の良いところに気づいたのだろう。すなわち、中国人は不屈の労働者であり、そして、商業文明を持ち、新しい考えや方法やシステムに無関心ではないのだ。その上に、中国は4億人の莫大な人口と莫大な天然資源（石炭と鉄）を持っている。しかしながら、これらの中国人の優れた点はロンドンの中国人への印象を好感に変えることはなかった。逆に、彼は中国に脅威を感じた。ロンドンの中国脅威論が発生した原因には、もちろん当時の黄禍論の台頭と彼の従来の考えの関係も無視できないが、一方、彼の

中国への誤解や理解不足も深く関係していただろう。白人種と黄色人種の根本的な違いは宗教だと思う。特に中国の宗教は白人にとって理解し難いものである。ロンドンと同じ時代に日本で知れ渡っている新渡戸稲造が名作『武士道』を書いた理由については彼が次のように書いている。

ラヴレ氏と散歩をしていると、宗教の話題になった。その高名な教授は「つまり、日本の学校では宗教教育を行っていないということですか？」と尋ねてきた。私が、行っていないと返事をする、ラヴレ氏は驚きのあまり突然立ちとまり、容易には忘れがたい声で、「宗教がない！それでは、どのようにして道徳教育を受けるのですか？」と繰り返した。(新渡戸稲造 樋口健一郎等訳 2017:18)

このように宗教上や道徳上や思想などの相違があつて、高名な教授でも理解不能である。ロンドンの時代は言うまでもなく、今でもお互いに十分理解し合っているとさえ言えないだろう。日本にいるドイツ人の僧侶ケネル無方は白人の宗教についてこう語っている：

ドイツのキリスト教徒は生まれてすぐの赤ちゃんのときに、洗礼を受けるのが一般的だ。幼児の洗礼は、当然本人の意思で受けたものではない。～ ドイツ子供たち 14 歳になるまで親の宗教に準じて、学校の宗教の授業を受ける。カトリックとプロテスタントでは教えが違うので、クラスも別々に分かれて授業が行われる。そして 14 歳になると、自分がどの宗教や宗派に属するかを選択する。または、無宗教であることを選択する。～ 無宗教であることを選んだ人は、宗教の授業の代わりに、道徳を学ぶことになっている。～ 神様の存在を否定し、無宗教で生きていくと 14 歳で選択することは、とても勇気がいることだ。同時に、神様は存在しないという頑なな信仰でもあるから、「無神論」という名の宗教とも言える。このように、ドイツでは学校教育において、子供たちは宗教について真剣に考えざるを得ない。(ネルケ無方 2014:24-25)

「無神論」という名の宗教とも言える」という部分は私たちにはどうしても理解しにくいだろう。やはり、白人種と黄色人種の一番大きな差異は宗教上の差異に違いない。つまり、思想や信仰や道徳の違いだとも言える。詳しく言うと、白人種の宗教は基本的に一神教となっている。ユダヤ教といい、キリスト教といい、そしてイスラム教といい、系統は一緒

とも言える。白人は神が存在していると固く信じている、神は絶対的な存在と考え、神の存在は心の拠り所と考えている。そして、彼らの道徳も宗教から得たものである。宗教がないと生きていけないだろう。しかし、中国では違う。

中国人の道徳は、人間の基本的な感情と自然の法則に基づいて、孔子や孟子を代表とする儒家、そして、老子や荘子を代表とする道家の聖人の教えから得たものである。孔子の残した言葉でできた本『論語』には、「子、怪・力・乱・神を語らず」という言葉がある。即ち、孔子はキリスト教教徒のように神のことを信じていないと言えるだろう。中国人の道徳の中に宗教観という存在は薄いと言える。存在しているのは祖先への崇拝である。森鷗外は『黄禍論梗概』にこのように書いた。

論者は支那には宗教が無いと云ふ説だから～支那には祭典（RITUR）が有って、天を祭ったり、祖先を祭ったりする。天も人格ある神ではない、それ故（WUTTKE）と云ふ人の説に従って、支那には宗教がないと云ふ方が正しい。（森鷗外 1902：35-36）

森鷗外の言う通り、中国人には宗教観が薄い。強いのは祖先崇拝である。中国人が一番大事しているのは家、いわゆる家族のことである。中国の道徳基本“五倫”<sup>10)</sup>の前者の三つは家族の事を言っている。即ち父子、兄弟、夫婦の関係である。祖先崇拝と言えば、私たちは祖先の血を受けてきて、もっと正しく言うと祖先のDNAを継承してきて、祖先への尊敬、感謝の念を持ち、そして受けて来た名字から人格や外貌などに至るまで謝意を持って祭って来た。従って、親孝行は中国人として一番基本的な道徳である。これは白人と中国人の一番の差異だと考える。このように根本的な差異が存在しているので、お互いを理解するのはなかなか難しい。従って遂には、中国人脅威論の道に導かれただろう。

#### 4.4.3. “The Yellow Peril”の中の日本人

ロンドン日本軍の従軍記者として日露戦争取材していたので、多くの時間を日本軍と一緒に過ごしていた。“If Japan Wakens China”の中でロンドンは、長年日本に住み日本人の妻をもらって日本の国籍までとった Lafcadio Hearn より自分の方が日本のことに詳しいと書いている。ロンドンに“Brown Peril”と言われた日本人については、“The Yellow Peril”の中にも、次のように日本人についての彼の考えが載っている：

From the West he has borrowed all our material achievement and passed our ethical achievement by. Our engines of production and destruction he has made his. ~ A marvelous imitator truly, but imitating us only in things material. Things spiritual cannot be imitated, they must be felt and lived, woven into the very fabric of life, and here the Japanese fails.

—中略—

This must not be taken to mean that the Japanese is without soul. But it serves to illustrate the enormous difference between their souls and this woman's soul. There was no feel, no speech, no recognition. This Western soul did not dream that the Eastern soul existed, it was so different, so totally different.

—中略—

Religion, as a battle for the right in our sense of right, as a yearning and a strife for spiritual good and purity, is unknown to Japanese. Measured by what religion means to us, the Japanese is a race without religion. Yet it has a religion, and who shall say that it is not as great a religion as ours, nor as efficacious?」

—中略—

The religion of Japan is practically a worship of the State itself. Patriotism is the expression of this worship. The Japanese mind does not split hairs as to whether the Emperor is Heaven incarnate or the State incarnate. So far as the Japanese are concerned, the Emperor is Heaven lives, is himself deity. The Emperor is the object to live for and to die for. The Japanese is not an individualist. He has developed national consciousness instead of moral consciousness. (Jack London 1989:283-288)

“The Yellow Peril”の中の日本人についての考えを見ると、ロンドンが理解しているのは、日本の神道である。当時、日本は軍国主義の道を歩み始めた、しかも、ロンドンと一緒にいたのは日本軍で、一部の特別な日本人だ。彼が見たのはほんの一部の日本思想で、しかも、その思想は軍国主義という極端なものである。確かに、その思想はその後日本でだんだん拡大されていき、遂に一時軍国主義は日本をリードしたが、しかしそれが日本思想の全てだと考えたら間違いだろう。Lafcadio Hearn が日本で細やかな日々を過ごしてきたことの方が総合的だと考える。ロンドンが日本の軍国主義だけを理解したとしても、

日本のことに詳しいまではといえないだろう。

日本の宗教の核は愛国心である。それには正義などないとロンドンが主張している。ロンドンは日本思想を激しく否定していた。こうなった原因については辻井栄滋がこう言っている。

日本に限った場合、やはりロンドンの日本人に対する悪感情をも指摘しておかねばならない...日本国内での足留め、検閲、あるいは逮捕事件に加えて、渡鮮後、渡満後においても日本軍さまざまな規則による足留め、拘引等々は彼の苛立ちを助長するばかりだった。(辻井栄滋 2001 : 32)

このような原因があつて、日本のことを嫌いになってしまい、ロンドンは、“The Yellow Peril”の中でそうした自分の感情を過激に表現しただろう。

#### 4.4.4. “The Yellow Peril” を書いた時のロンドン

“The Yellow Peril”を読む時には、二箇所気をつけたいと思う。その一つめは、これらの宗教の話には中国の思想については全く触れられていないということだ。主に書いたのは、アメリカなど白人国家がキリスト教による正義をかかげて行なった侵略のことである。そして、日本の宗教の核は愛国心である。それには正義などないとロンドンが主張している。

“The Yellow Peril”をテーマにする時に、なぜ“Yellow Peril”である中国の思想や宗教のことを書かなかったのだろうか。なぜ彼が書いたのは“Brown Peril”である日本思想と白人のキリスト教だけだったのか。まず、考えられるのは、当時ロンドンが中国思想をあまり理解していなかったからだ。“The Yellow Peril”の中には中国人の行動だけが書かれていて、心理的なものには全く触れていないことも証明できるだろう。“The Yellow Peril”の中にロンドンが唯一引用した文は新渡戸稲造の『武士道』からの一節である。『武士道』には、日本の思想は中国の儒家思想に強い影響を受けていると書いてある。特に、孔子や孟子そして王陽明、儒家思想中の聖人の言葉や考えを例で挙げているのだ。『武士道』を読んだロンドンが日本と中国の思想は近いものだと考えた可能性もあるだろう。だから、東洋思想の代表として、彼がある程度まで理解していた日本思想や宗教だけ書いたのだろう。しかし、中国と日本の思想<sup>9)</sup>には近い所がありながら、大きな違いもある。どのみち、当時のロンドンが中国思想を理解していなかったことは間違いないだろう。

二つ目は、まず、“The Yellow Peril”の中のこの文章を読んで見よう。

Back of our own great race adventure, back of our robberies by sea and land, our lusts and violences and all the evil things we have done, there is a certain integrity, a sternness of conscience, a melancholy responsibility of life, a sympathy and comradeship and warm human feel, which is ours, indubitably ours, and which we cannot teach logarithms or the trajectory of projectiles. ~ The colossal fact of our history is that we have made the religion of Jesus Christ our religion. No matter how dark in error and deed, ours has been a history of spiritual struggle and endeavor. We are preeminently a religious race, which is another way of saying that we are a right-seeking race. (Jack London 1989:285)

ロンドンがキリスト教の正義を主張していたのだ。キリスト教を信じている白人は、間違っても、悪いことをしても、侵略をしても、キリスト教を信じているから彼らには正義があると主張したのだと解釈できる。『アメリカ文学作家作品事典』の中にはロンドンについて次のような評価がある。ロンドンはいろいろな思想の影響を受けたと言っているのである。彼は次のような一面もあるのだ。

人種差別主義者、ファシスト、社会ダーウィニズムの信奉者としてロンドン (D.L.Kirkpatrick (編) 1991 : 799)

確かに、ロンドンの主張を見ると、この時のロンドンはまるで極右のようでもある。ファシストと言っても言い過ぎではないくらいだ。

ロンドンが見た事件として、ロンドンが取材していた時のもう一つの出来事を見逃してはならない。*Jack London Reports*の中に次の文章が見られる：

“And there were white men in there ... many white men. I caught myself gasping. A choking sensation was in my throat. There men were my kind. I found myself suddenly and sharply aware that I was an alien ... And I felt myself strangely ... felt that my place was there inside with them in their captivity, rather than outside in freedom

amongst aliens.” (Jack London 1970 : 106)

5月1日ロンドンが中国の安東で目にしたのは、日本軍に捕まったロシア捕虜である。ロシア人とロンドンが同じ白人であることで、ロシア人捕虜を見た時に彼は一時呼吸困難になってしまうぐらいダメージを受けた。そのことにより一層日本人のことを嫌いになって、憎悪の感情がますます強まっていったらう。これらが原因で、“The Yellow Peril” が生まれたとも考えられる。しかし、時が立つと、日本人や中国人に対する理解が深くなるに従ってロンドンの偏見が緩和し、最後には中国人や日本人に対する偏見にかなりの変化が見えてくるのである。

#### 4.5. ロンドンの人種偏見の弱まり

現実ではロンドンが言ったような黄禍論（中国脅威論）は存在しなかった。存在したことがないのだ。中国の名物である万里の長城は防衛的な目的のために築かれたものである。2019年3月8日香港の《南華早報》<sup>11)</sup>によると、マレーシア大統領（Mahathir）は、中国とマレーシアは2000年以上の関係を持っているが、中国はマレーシアを侵略したことがないと言った。逆に、ヨーロッパ人は1509年に東南アジアに辿り着き、二年も経たずにマレーシアを占領した。今回各国が中国からの借金による財務危機に陥ることについては、彼は「国家にはみんな主権があり、外国の金を貸し付けるかを決める権利がある。中国の本質は非常に友好的な商人である。中国は機会を見つけて、他の国の資金が届いていない所に投資する。各国は中国の資金を受け入れるとどんな影響が出てくるか考えた上で、判断している」と言った。日本の文豪森鷗外も黄禍論の真実を鋭く指摘している、彼の『黄禍論梗概』の中には次のように述べられている。

黄禍と云ふ語は白人種と黄色人種との争闘から、新たに生まれて来た語でム（ママ）りまして、白人の側で黄色人に對して抱いて居る感情を表して居るのでム（ママ）ります。

（森鷗外 1902 P2）

森鷗外が言っているような黄禍論は白人優位主義である。しかし、ロンドンの人種偏見は弱まっていくのだ。“The Yellow Peril”の5年後に書いたエッセー“If Japan Wakens China”



では、ロンドンの基本思想はあまり変わらなかったものの、述べ方が柔らかくなり、かなり冷静になっているという傾向がある。そして、ロンドンの最後の中国もの作品“*The Tears of Ah Kim*”の内容にも注目したい。主人公の中国人“*Ah Kim*”はハワイで成功した中国人商人である。彼の貯金では一人しかハワイに迎えることができないということで、彼の好みの中国人女性よりは長年彼を叩いてきた母親を中国からハワイに迎えた。そして、母親の意思に反しないように、母親が生きているうちは好きな女性と結婚しなかった。最後に母親が彼を叩いていた時唯一涙を流した原因について彼は説明している。

つまり母親の力が弱くなって来たのを感じて、母親が年老いたことに気づき、自然に涙が出て来たのだ。ロンドンが書きたかったのは中国人の親孝行についてだと理解できる。宗教や道徳に関わる白人と中国人の一番の差異についてロンドンが理解できるようになったということだ。従って、“*The Tears of Ah Kim*”にはあまり偏見などは出て来ていない。

本研究によって、ジャック・ロンドンが“*The Yellow Peril*”を書いた時には、中国人と日本人についての理解は、以前のロンドンより進歩していて、新しい認識も獲得した。しかし、中国についての理解はまだ表面だけに留まって、又は、日本についての理解は偏って、ロンドンの考えはただの偏見からさらに脅威論や憎悪の感情になってしまった。とはいえ、ロンドンは重要な一步を踏み出したと考えられる。この進歩があつて、ロンドンが中国と日本に興味を持って研究し続けた。そして、その後の“*The Tears of Ah Kim*”や“*Cherry*”など偏見があまりない作品が書けたと考える。この進歩がないと、ロンドンはずっと中国人と日本人に偏見を持ちつづけ、“*The Tears of Ah Kim*”や“*Cherry*”のような作品は書けなかつただろう。“*The Yellow Peril*”はロンドンが中国人と日本人についての理解を深めていくスタートと考えてほうがいいと思われる。ここから一つの国の思想の理解まではかなり遠いけれど、生まれるべくして生まれた作品だと考える。“*The Yellow Peril*”は単なる人種偏見の作品ではないのだ。ジャック・ロンドンの人生の流れの中でも価値ある作品だと考えられる。

現在アメリカのトランプ大統領がアメリカ・ファーストを提唱している。そして、中国とアメリカの貿易戦争が勃発している。ロンドンの時代から今まで 100 年以上たつても、アメリカではこのような自己優位主義が変わらないのである。自国中心の考えを捨てて、多元的社会のことを考えて、そして、中国とアメリカも同じようにお互いを理解したら、誤解や偏見や矛盾などをもっと減らすことができるだろう。強い人種偏見を持つジャッ

ク・ロンドンでさえ中国人を理解しつつあって、それに従って人種偏見が弱くなっていたので、情報が容易に手に入る今の時代においてはより深く理解し合えるだろう。

注

- 1 ) 一帯一路というのはシルクロード経済ベルトと 21 世紀海洋シルクルードのことだ。2014 年 11 月 10 日に中華人民共和国北京市で開催されたアジア太平洋経済協力首脳会議で、習近平総書記が提唱した経済圏構想である。
- 2 ) この絵の流布は黄禍論の広がり大きく関係している。
- 3 ) 1997 年 7 月 1 日に中国に帰還した。一国両制によると主権が中国にあり、香港は 50 年間資本主義制度を維持できる。
- 4 ) 匈奴は中国北方にある遊牧民族の一つである。万里の長城は遊牧民族の侵略を防ぐために建てられたものである。
- 5 ) 特に西からの建設には大量の中国人労働者を雇った。
- 6 ) 第二次アヘン戦争の追加協定である、全八条のうち第 5 条には、アメリカにいる中国人に商業または永住の権利があることが示されていた。
- 7 ) ノリス (Frank Norris) 1870-1902、アメリカの小説家、ロンドンの友人でもある。
- 8 ) この三人は、ジャック・ロンドンの義父ジョン・ロンドン、義姉フローラ、乳母ジェニーを指している。
- 9 ) 中国を支配している思想は道家、儒家と仏教で、日本を支配している思想は神道、儒家と仏教である。儒家と仏教を共有しているが実は日本の国民性に適応するために大きな変化が起きている。
- 10 ) 五倫は儒家における五つの道徳法則である。父子の親、君臣の義、夫婦の別、兄弟 (長幼) の序、朋友の信のことである。
- 11 ) この記事のテーマは“TD SIDE WITH RICH CHINA OVER FICKLE US: MALAYSIA'S MAHATHIR MOHAMAD”で、記者は、BHAVAN JAIPRAGAS である。

## 第5章 ロンドンが考えた日中関係と実際の日中の関係

日本人と中国人は同じ黄色人種であり、漢字や文化の共通性からみると、白人が日本人と中国人を「同文同種」<sup>1)</sup>と考えやすい。白人は言うまでもなく、中国人と日本人でさえこの誤解の落とし穴に落ちることがあるだろう。ジャック・ロンドンはまさにこの落とし穴に落ちた。“The Yellow Peril”の中でロンドンは日本思想と中国思想がかなり近いものだと理解していた。特に、彼が日露戦争時日本軍と共に中国まで行って日本の軍人と中国人が地面に漢字を書いて交流する場面を目にした時、更にそれを確信した。ロンドンは“The Yellow Peril”の中にこう書いた。

Comes now the Japanese. On the streets of Antung, of Feng-Wang-Chang, or of any other Manchurian city, the following is a paper lantern resting on the ground. On one side squats a Chinese civilian on his hams, on the other side squats a Japanese soldier. One dips his forefinger in the dust and writes strange, monstrous characters. The other nods understanding, sweeps the dust slate similar characters. They are talking. They cannot one borrowed the other's written language, and long before that, untold generations ago, they diverged from a common root, the ancient Mongol stock. (Jack London 1989:278-279)

日本人と中国人は元々同じルーツ、つまり古代のモンゴル族から枝分かれしてきたのだ。しかしながら、その後ロンドンは日本人の特徴と中国人の特徴の違いも指摘した。中国人はどこの国より勤勉、器用、不屈である。中国人の商業のやり方は白人に近いもので、日本人と異なる。日本人の愛国心はどこの国にも匹敵しないし、そして日本人は真似が上手で（ロンドンは主に西方の技術の面を指し）、戦う人種であると彼は書いている。遂に、ロンドンにとって、中国人は“Yellow Peril”、日本人は“Brown Peril”としっかり分かれた。中国人と日本人の間にこのような差異ができた原因については、ロンドンは以下のように解釈した。

### 5.1. ロンドンが考えた、中国人と日本人の差異が存在する原因

ロンドンが日本人と中国人の区別を行った原因は、別々の血統を持っていた条件や注入によって引き起こされたのだ、すなわち、マレイ人の血統が日本人に注入されたのだとロンドンは主張した。“The Yellow Peril” の中では、ロンドンが中国人と日本人を故意に分けて言う事がある。特に、同じ黄色人種の中国人と日本人は Yellow Peril と Brown Peril だと分類した。具体的には次のように言っている。

There have been changes, differentiations brought about by diverse conditions and infusions of other blood; but down at the bottom of their being, twisted into the fibres of them, is a heritage in common – a sameness in kind which time has not obliterated. The infusion of other blood, Malay, perhaps, has made the Japanese a race of mastery and power, a fighting race through all its history, a race which has always despised commerce and exalted fighting. (Jack London 1989:279)

このようにロンドンは、日本人と中国人はルーツが同じであり本質的な同一性が存在しているとしながらも、日本人はもしかしたらマレイ人の血統の注入を受けて、中国人との違いができたのではないかとも言う。もちろんこのような考えを持つ人はロンドン一人ではなく他にもいる。ノーベル文学賞作家パール・バックは、ロンドンと同じ見解をもっており、彼女の著書『私の見た日本人』の中ではこう書いている。

日本人は複雑であり、人種のるつぼで、アジア大陸の北方とマレーシア近辺の島々を起源とする多くの民族が混じり合い、長い時間をかけて日本民族としてまとめ、固有の文明を発展させました。(パール・バック 2013 : 24)

また、大野晋の『日本語の起源』によると、日本語はよく言われているような「万世一系」ではなく、未明な X 語から分離し、そのうちの一つが日本に来て定着したという。その X 語から分離したもう一つの言語の Y 語はインドにあるタミル語である。日本語とタミル語との子音と母音の類似から二つの言語の語源は X 語だと判明したと言う。大野は言語だけではなく弥生時代の墓制などの類似点も挙げて説明した。ということは、日本人はそのタミル語を喋る人種の血統も受け継いでいると言えるだろう。この二つとも、ロンドンの考えである There have been changes, differentiations brought about by diverse conditions

and infusions of other blood<sup>2)</sup>ということと一致している。纏めて見るとロンドンの考えは、日本人と中国人のルーツが同じであり、つまり、同種ということで、しかし、血統の注入によって日本人と中国人の分化が起きたというものだ。この考えはロンドンの血統を重視して人種を分別する従来考えと非常に似ている。しかし、本当にそうだろうか。日本人は他の人種の血統を受け継いで皮膚の色や顔が変わらずに性格だけ変わったのか。それをこれから分析して行きたい、しかし、中国人と日本人の比較は大きなテーマではあるので、その中の差異を一々全て取り上げて比較することは不可能であるし、本論文の目的ではないので、ここでは筆者が理解しているものだけを挙げて、ロンドンの考えは正しいかどうかを検討したいと考えている。

## 5.2. 島国の特質と発生の原因

中国語の中には「一方水土養一方人」という諺がある。日本語に翻訳すると「環境は人を造る。即ち、その環境においてはその環境に相応しい人、あるいは、その環境に対応できる人が造られる」となる。一つの場所の地理、地形、気候、季節、環境などによってその土地固有の人間性が形成されて、その土地に住む人達の性格を作り上げると思う。例えば四季折折がある所で生活する人と四季が分かれていない所で生活する人の性格が違うのなら、火山や地震が多発する所と少ない所に住む人の性格も違うだろう。そして、異なる地理、地形などによって異なる民族が生まれ、ついにその民族の特性が形成される。日本の独特な地理、特有な環境と気候などが日本人の性格の形成に影響したと思う。日本人の特質はよく「島国根性」と言われている、この言葉には蔑視の因子が含まれているので、本論文では「島国特質」と言い換える。「島国特質」は島国だからこそ持つ性格と理解できるので、地理はそこに住む人の性格に影響するということになる。客観的に筆者の考えを証明できるだろう。

そして、特性と言うのは自分の国にだけあり他の国には無い性質なのか。かつて、日本人の特性について討論した時“日本人の特質が負けない精神であるなら、中国人には負けず嫌いの気持ちがないですか”と聞かれた。特質というのは一つの国だけが持つものではないと思う。「二面性」と「負けない精神」は日本人の特性を良く捉えている。しかし、二面性を持つ人は日本人だけではないだろう。どこの国の人でも、アメリカ人といい、ヨーロッパ諸国の人々といい、アジア諸国の人々といい、多少は持っているだろう。ただ日本

人には他の国の人々よりこの一面が常に表れている事は事実だ。これは日本人の特性と言える。日本人のもう一つの特性「負けず嫌い」もそうである。他の国の国民がこの負けず嫌いの心を持ってないわけではないが、日本人の方がこの「負けず嫌いの心」が他の国の国民より強いということで日本人の特徴と言えるのだ。だから、民族の特徴と言うのは他の民族が持っていないものではなく、一つの民族において他の民族より目立つ性格のことである。

また、よく武士道を通じて日本人を分析する人がいる。武士道が良く日本人の性格を表しているのは確かであるが、日本人の特性を分析する時、日本の地理、気候や日本人の生活環境において宗教や思想だけを分析して日本人の特性の根拠をさぐり当てようとする事は不正確だ。その分析方法は間違っていると考える。多くの作家は日本の宗教や思想、主に神道、仏教、儒家思想を基にして日本人の特徴を分析して、日本人の特徴を説明しようとする、そして、日本人の精神に辿り着いたと考える。しかしながら、日本人の特徴とこれらの思想や宗教、どちらが先に存在していたのかを聞くと恐らく前者を選ぶ人が多いだろう。これらの思想や宗教が日本人の特徴に相応しいので、日本人はそれを正しいと思って受け入れた、と考えるのだ。『武士道』にも次のような文がある

厳密な意味での論理的教義については、孔子の教えが武士道の最も豊かな淵源であった。孔子が説いた、君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友という五輪の道は、その書物が中国からもたらされるはるか以前から、日本人の本能が感知していたものであり、孔子の教えはそれを確認させたにすぎない。(新渡戸稲造 2017: 44)

新渡戸稲造が言った通り、まずは、日本人が五輪を感知したが、ただ系統的な説にはなっていなかった、孔子の教えは日本人に感知され思想として系統化されたのだ。換言すると、孔子の教えが日本人に相応しいものであったので、日本人が容易に受け入れたわけだ。つまり、神道、儒家思想、仏教は、日本人の在来の感知から生まれた宗教、あるいは、日本人の在来の感知によって受け入れた系統的な思想や宗教だと考えられる。受け入れた系統的な思想や宗教は、より一層日本人の在来の感知を理論にして、より固めたと理解できるだろう。こうした感知は生活環境と深く関係していると思う。以下では、ロンドンが理解していた日本人の三つの特質、即ち「同質性が高い」、「二面性」、「物事を受け入れ易い」を分析していきたいと思う。これらの特性と日本の地理と自然、気候などの関連性を分析

したいと考えている。

### 5.3. 日本人は民族的な同質性が高い

日本の民族特性と言ったら、まず、第一に高い同質性である。換言すると、日本人は一つに固まりやすい民族であり、つまり、民族意識や国家意識が高い民族だと理解できる。日本人のような同質性の高い民族はその右に出るものはほとんどいない。もちろん、ロンドンもこの特性に気付いている。“The Yellow Peril” の中ではこう書かれている。

The Japanese is not an individualist. He has developed national consciousness interested of moral consciousness. He is not interested in his own moral welfare except in so far as it is the welfare of the State. The honor of the State, which is his honor. He does not look upon himself as a free agent, working out his own personal salvation. Spiritual agonizing is unknown to him ... He relates himself to the State as, amongst bees, the worker is related to the hive; himself nothing, the State everything; his reasons for existence the exaltation and glorification of the State. (Jack London 1989:287-288)

ロンドンには、日本人の個人意識は薄く、国家意識が高いと主張し、まるで蜂のような存在だと言った、ロンドンの比喻はとても正確である。普段はみんな女王バチのために働く、敵が来たらみんな一つになって犠牲を払って戦う。第二次世界大戦の終盤にアメリカ軍が日本の本土に攻めて来た時、日本が一億玉砕を提唱した。これは、その時の日本の人口がおよそ一億だったので、全ての日本人が死ぬ覚悟をしてアメリカと戦う姿勢を示したのだ。アメリカ軍の沖縄での上陸作戦に対して日本はその一億玉砕を実施した。その結果、アメリカは大きな犠牲を払ったため作戦を変えたと言う。一億玉砕のような作戦は日本を置いて他の国にはほとんど見ない。どんな原因で日本はこのように一つに固まりやすい国になったのか。そのことは日本の日常生活にも貫かれている。

山本七平は彼の著書『「空気」の研究』の中で、「空気」を読む事は臨在感的把握の事である、と言っている。「空気」を読むとそれは「空気」に従う姿勢になる。その場の「空気」で結果が悪くなってしまうなら、個人の責任が軽減されたり、責任を取らなくて済んだり



することになる。そして、日本人が嫌われたくないため自分を主張しないということはひとつの原因だと考える。「空気」を読む事は日本人にとって、事をうまく行う一つの必要な手段だ。「空気」を読むことは大多数の意見を想像する事と理解できる。ということで「世論」も「空気」の一つの源となるだろう。「空気」を読む事は排他性を持っている。「空気」を読めないは人仲間外れになってしまうからだ。ネルケ無方はこう書いた。

「空気を読む」と言うのもそうだ。日本では、空気が読めない人が一人いると「いじめ」が起こる。空気の読めない人はいじめられるから本人も苦しいが、周りの人も空気の読めない人がいる状況が辛いからいじめたくなる、排除したくなる。(ネルケ無方 2015 : 49)

もちろん、ドイツ人は空気を読まない、中国人も日本人のように空気を読まないので、ドイツ人も中国人も日本人のように一つになりやすくない。「空気」を読む事は日本人が一つになりやすい特性と深く繋がっている。

そして、日本人は基本的に大和民族である、その中の「和」は色々な意味を持っている、例えば十七条憲法にも「和を以て貴しとなす」<sup>3)</sup>という言葉があり、この「和」の意味は平和である。平和の意味は戦争や紛争を起こさないことだ。しかし、日本には「和を保つ」の言葉があり、この言葉は平和以上の意味を持っている。平和以上の意味をさぐり出すためには二つの言葉を持って来なければならない。それは「本音」と「建前」である。「和を保つ」ため「本音」を言わずに「建前」を言うのは一般的なことだ。日本の番組でよくレストランの紹介や試食をする。ゲストはよく「美味しい」、「うまい」と言う。もちろん美味しいレストランは多いが、全ての料理がその人の口に合うとは思えないのだ。全部おいしいと言ったのは「建前」を言って「和」を保ったということだ。この「和」は番組の意見に従うこととみられ、「協力」や「対立を回避する」の意味となる。「協力」や「対立を回避する」ため「本音」を言えず、自分の本当の気持ちが言えない、自分の本音を大事せずに衆に従う、つまり、「和を保つ」は日本人が一つになりやすいことを表すもう一つの表現だ。

または、かつて日本には「村八分」と言う罰があった。「村八分」と言うのは「江戸時代以降に行われた私刑的な習慣で、村の掟に違反した者に対して、一切の取引・交際を絶つこと」<sup>4)</sup>である。昔だけではなく、2000年以降でもそういうこともあった。村の掟に違反したのみならず村のみんなの意見と反する時にも行われる、村の掟に違反した者だけでは

なくその人の家族にも影響を及ぼすため、「村八分」はかなりの重罰と見られる。日本は山と川が多い国である、山と川が村と村を分け隔て、昔は、村を離れて生活する事は極めて困難であったので、それゆえこの「村八分」が成り立つのだろう。この習慣は村に住む人みんなの意見を一つにし、村人は固く団結することができ、村を固く守れると思う。国の最小単位である村ではこういう団結の考えが強いので、ひいては全国的な団結が容易に形成できると考えられる。

日本には一人ではことをなさず、衆を頼んでことを成す風がある。この風の形成は日本の自然環境と深く関係している。日本は災害多発の国である、地震や火山の噴火や津波、河川氾濫、土砂崩れなど自然災害が他の国より極めて多いし、規模も大きい。これらの自然災害が来た時、一人や一家族ではどうしても対応しにくい。一つの村や一つの地域、ひいては全国の全般的な協力が必要になる。社会全般の協力があつて、普段の生活を取り戻すことができる。個人や一つの家族の力ではとても出来ないことだ。その前に、個人は社会に融合しなければならないし、一人で生きるのではなく衆と共に生きる必要がある。それを維持するためには自分の意見を固く主張するより衆に従う方が良いだろう。また、日本は島国であることにも触れなければならない。日本は四つの大きい島、本州、九州、四国、北海道で構成されている。この四つのどの島にも災害が起こる。それ以外の所は海で遮断され逃げ場がない。災難と立ち向かうしかない日本人は同質性が高い特性を生み出したと考えられ、それは日本の「島国特質」とも言えるだろう。

「日本人で良かった」、この言葉は日本でよく耳に入る。普段の会話とか、ラジオとか、広告など日常生活の中でよく使う言葉である。日本人は心の中でこの言葉に深く同意或いは、共感している。人種的な意味でこの言葉を使ったら、少し優越の感情が含まれていると共に僥倖にも感じられるだろう。ちょっとした偏見も含まれているかもしれない。ではなぜ、この言葉を広がったのかを遡って調べてみるとその原因が明らかになる。

初めて公的な場所で使われたのは、イギリスに留学した経験を持つ日本人有名な作家夏目漱石が新聞記事に書いた言葉である。漱石は、1909年9月2日から10月14日まで親友の南満洲鉄道総裁中村是公の招きで朝鮮、満洲（今中国東北地方）を初めて訪ねた時に感じたことをそのまま書き記している。

歴遊の際もう一つ感じた事は、余は幸にして日本人に生まれたと云ふ自覚をえた事である。  
～ 満洲から朝鮮へ渡って、わが同胞が文明事業の各方面に活躍して大いに優越者となつ

ている状態を目撃して、日本人も甚だ頼母しい人種だとの印象を深く頭の中に刻み付けられた同時に、余は支那人や朝鮮人に生まれなくて、まあ善かったと思った。彼などを眼前に置いて勝者の意気込を以て事に当たるわが同胞は、真に運命の寵児と云はねばならぬ。  
(夏目漱石 1909年12月6日 満洲日日新聞 第1面)

当時、旧満洲や朝鮮には数多くの日本人が滞在していた。夏目漱石がそこに行って、この言葉を言い出したのには理由がある。夏目漱石の人生を巡ってみると、彼は1900年にイギリスに留学した。2年間の留學生活の中で人種的な優劣があるということが彼の頭の中に生まれたと考える。特に、進化論が流行していたイギリスでは、その進化論が更に社会進化論にまで変化したイギリスの社会では、黄色人種であり身長が低い夏目漱石は嘲笑の対象になるだろう<sup>5)</sup>。ヨーロッパでいつも嘲笑される漱石は日本の植民地である旧満洲や朝鮮に行った時、日本人としての優越感が出て来て、ついに、不意にこの言葉を言い出したと考える。この言葉は日本人の愛国心を表わしているので、日本人が民族的な同質性が高いことと繋がっていると考えられる。

#### 5.4. 日本人の二面性について

国語の教科書にも取り上げられたルース・ベネディクトの『菊と刀』は、次のように、日本人がいろいろな点で矛盾していることを指摘し、日本人の独特な二面性を説いた。

これら全ての矛盾点が、日本について語る書物の縦系と横系をなしているのだ。これらはいずれも真実なのである。刀と菊は、ともに一枚の絵の中のモチーフなのだ。日本人は、好戦的なくせに平和志向、尚武的であると同時に審美的、傲慢にして丁重、融通がきかないくせに適応力がある。(ルース・ベネディクト 2013:11)

ルース・ベネディクトは日本に来たこともないが、歴史の文献や在米日本人との交流から日本人の特質の一つである二面性を描き出した。文化人類学的研究によって彼女がものを見る目は鋭い。一方、ロンドンでは日本人の二面性という特質については直接には語らなかったが、日米中の商業については“*The Yellow Peril*”の中でこう語った。

So far as the business man is concerned he has grasped far more clearly the Western code of business, the Western ethics of business, than has the Japanese. He has learned, as a matter of course, to keep his word or his bond. As yet, the Japanese business man has failed to understand this. When he has signed a time contract and when changing conditions cause him to lose by it, the Japanese merchant cannot understand why he should live up to his contract. It is beyond his comprehension and repulsive to his common sense that he should live up to his contract and thereby lose money. He firmly believes that the changing conditions themselves absolve him. (Jack London 1989:277)

ロンドンが直接に語らなかったものの、この文を見ると日本人に二面性の傾向があることについて彼が気づいていたことがわかる。

この二面性が存在する原因は一体何なのか。一つの例を挙げる。第二次世界大戦が終わる前に、日本軍がいわゆる「神風」特攻をアメリカ軍に対して実施した。「神風」は台風を指す場合もある。日本に住まないと分からないが、日本は異常に台風が多い国である。毎年の梅雨が終わって夏に入ると共に台風が日本に上陸し、台風の影響は秋まで続く。台風の災害が日本人の多くの命を奪うぐらい尋常ではない状況だが、この日本人の命を奪う台風にはもう一つの顔がある。それは、モンゴル軍が日本に攻めて来た時、日本を攻撃する直前の夜に台風によってモンゴル軍が全滅し、それで日本は台風のお陰で不戦勝になったというものだ。台風には、日本人の命を奪うということと同時に、日本人の力になったこともあるという二つの顔がある。このような自然が日本人の性格に影響したと考えられる。日本人の二面性と日本の自然の関係については、パール・バックがこう語っている。

こうした二面性は予測不可能な地震、台風、津波などの突然の災害といった自然がもたらす脅威によって深まります。... 私の結論は旅行の仕方が多様化する近代以前の数百年間はどうしても地理的に孤立が避けられなかった上に、火山の噴火、津波や台風など絶えざる危険に晒されてきたために孤立化は日本人の精神と心に深く影響を及ぼしたということです。(パール・バック 2013:28)

このような日本人の二面性と日本の自然環境は切り離れない関係にあると思う。また、二面性は「無常」とも言い換えられる。無常について、日本にいるドイツ人禅僧ネルケ無方

は彼の『日本人に「宗教」は要らない』の中でこう書いた。

日本人の無常を感じやすいのは、日本に四季があるからではないか。(ネルケ無方 2015 :40)

そして、これには梅雨も関係している。日本は梅雨がある、その時には湿気が高くなるので、そしてカビが生えやすく物が長持ちしないので無常を感じやすいと言う。

日本は地震、火山噴火、火災、津波などの尋常ではない災害が他の国より多発する。こう言う面から見ればいつも住んでいる所に急に変化が発生して、「通常」は「無常」になり、そこに住む日本人はその「無常」に対応しないといけなくなることで、そして、四季折々と梅雨などあらゆる自然環境の影響があつて、日本人にはそういう二面的な性格が醸成されたと考えられる。

#### 5.5. 物事を受け入れ易い日本人と日本社会

日本は物事を受け入れ易い国と言われてもピンと来ない人が多いだろう。しかし、近・現代には日本は二回急成長した事が確認できる、この二回の急成長から見ればそのことが納得されると思う。1回目は、近代封建制度下の日本が明治時代に鎖国から一気に工業化が進む強い国になったこと。同時に、軍事的にも強くなって来て、日清戦争と日露戦争で自分より強い清王朝とロシア帝国に勝った。2回目は、現代日本は第二次世界大戦で負けて、アメリカ軍に占領されて国民の生活は苦しかったが、戦後まもなく、日本経済が急に発展して、経済力ではヨーロッパ諸国を抜いて堂々の世界第二位の座に着いた。世界に刮目された出来事であった。

近代には、アジア諸国、つまりインドやベトナムやマレーシアや中国次々とヨーロッパの植民地や半植民地になってしまうが、日本だけが生き残って列強並みになった原因についてはパール・バックがこう書いている。

西欧列強がアジアへ侵出していた時期に日本が自ら選んだ鎖国は、一九世紀半ばのペリー提督と黒船の来航によって無理矢理に終止符がうたれました。～ アメリカ人は日本に近づこうとしていた当初は珍しい贈呈品を持って来ました。日本人が見たこともない武器が贈られました-ピストル、ライフル銃などあらゆる種類の銃器があり、物珍しそうに大砲も

受け取りました。電報、電信機器、写真機、楽器などを初めて目にしました。～ 中でも日本人に気に入った贈り物は鉄道でした。～横浜、長崎、函館の三港では貿易が活発に行われ、在米日本人大使館が開設されました。他の国々との間にも条約が締結され、各国に日本大使館が開設されました。日本人はアメリカの侵略によって近代に引き込まれ、ついに世界に窓を開きました。(パール・ベック 2013:29-32)

パール・ベックは近代日本の発展ではアメリカが大きく寄与したと主張した。彼女はまたアメリカが好意的に日本に様々な技術を導入して来て、止むを得ない侵略をして日本を発展させたと言う。しかし、そんな良い国は存在するのか。現在のアメリカ大統領トランプ氏の宣言「アメリカ・ファースト」いわゆる、自国中心思想は、いつでも、どこの国でも存在するだろう。もちろん、当時もアメリカは日本を発展させるためだけではなく、アメリカ自身の利益のために日本を発展させたと考えられる。

そして、現代日本で経済領域における発展があった原因について、池上彰は彼の著書『池上彰の世界の見方アメリカ』の中にこう書いている。

東アジアにおいてアメリカの影響力を維持するためには、日本が極めて重要な位置を占めるようになったのです。社会主義諸国に対抗するためにも、アメリカの影響下にある日本を強大の国にしていかなければいけない、と考えたのです。資本主義にすると、こんなに経済が発展するのだと、東アジア諸国に見せつける。日本を「資本主義のショーウインドー」にしようとした。

アメリカなど海外への輸出が増えれば、外貨が流入して日本経済は発展します。そのため、アメリカはドルと円の為替レートを実際の実力より円安の1ドル=360円に固定しました。日本は貿易を増やし、経済発展の道を歩みます。(池上彰 2016:193-194)

もちろん、日本の発展については、アメリカからの大きな影響を無視できないが、主観的な日本自身の素早い対応性という原因を語らずに、ひたすら客観的なアメリカからの影響だけを言うことは適切ではないと思う。ロンドンも、日本が西方国家の技術を取り入れた素早い対応についてはこう書いた。

From the West he (Japanese) has borrowed all our material achievement and passed

our ethical achievement by. Our engines of production and destruction he has made his. What was once solely ours he now duplicates, rivalling our merchants in the commerce of the East, thrashing the Russian on sea and land. A marvelous imitator truly, but imitating us only in things material. (Jack London 1989:283-284)

ロンドンも、日本人は欧米技術の真似がうまくて早いし、そして、すぐ使いこなすことに気づいただろう。それは真実だ。日本は、アメリカやヨーロッパの軍艦や武器を購入し、速く真似出来て、遂に使いこなすこともできた。そして、西郷隆盛を中心として明治維新を起こし、国家体制まで一気に変えた。一気に波瀾万丈な革新は日本において他の国には見られないものだ。清王朝もヨーロッパの軍艦や武器を購入したが、日本のようには出来なかった。それは日清戦争の始めの頃で、黄海海戦で清王朝が負けた原因にもなったとみられる。

容易に取り入れて、そしてそれが他の国より早い事は今でも続いている。例えば、日本のハロウインだが、ハロウインは典型的なアメリカの祭りで、今世界が日本のハロウインに注目している。日本のハロウインが世界中に注目されている理由については、日本のハロウインは、アメリカのハロウインをそのまま日本に持って来たわけではなく、日本の要素を入れて、日本なりの、日本らしいハロウインになったわけだ。日本のようにアメリカのハロウインを受け入れて自分の文化と混じり合わせた事は他のアジア諸国に例を見ない。又は、近年中国のQRコード決済がかなりスピードで広がってきたが、日本はそれを見て日本国内に素早くQRコード決済を導入した。他のヨーロッパ諸国やアメリカより著しく早い。そして、日本に生まれた中国人陳舜臣が、日本人と中国人の差異について鉄砲の採用の早さを例に中国と比較して、日本の物事の受け入れの素早さを説明した。その原因について彼はこう書いた：

日本より先にアヘン戦争で苦汁をなめているのに、中国は西洋の近代技術採用について、日本の後塵を拝してしまった。やはり、そこに民族的性格の差を認めないわけにはいかない。(陳舜臣 2016 :78)

つまり、物事の受け入れの速さの違いについて、陳舜臣は日本と中国の「民族的性格の差」を原因とした。中国と日本は違う民族であるので、民族の差異が存在することは当然のこ

とだろう。しかし、一体なぜ中国と日本の間にその差異が存在するだろうか。又、違う民族だからと言われると困るのだが、地理的な原因が大きいと思う。日本のことをよく知っている Lafcadio Hearn とロンドンとの間に類似的な表現もある。“If Japan Awakens China”の中にこのような文がある。

Our machinery of warfare, of commerce, and of industry, she has made hers. (Jack London 1970:361)

一方、Lafcadio Hearn の *KWAIDAN* 中の前言の部分にがこう書いてある。

・・・ the very remarkable Dream of Akinosuke, for example, is certainly from a Chinese source. But the Japanese story-teller, in every case, has so recolored and reshaped his borrowing as to naturalize it. (Lafcadio Hearn 1953:4)

両者は別のものについて言っているが、日本人に対する理解は同じように見える。つまり、日本は文化や技術を受け入れ易い国であること。そこで再び「島国特質」を持って来ないといけない。日本は島国性格を持っている。昔、島国は大陸国より情報を得る量も速度も極めて少なかった。自国だけの力によって発展するにはどうしても限界があった。そのままであれば、日本国の命運に関わるであろう。そこで、他の国の文化や技術を受け入れることは、自国の不足を素早く補助する道であった。その例としては、日本は中国の漢字を受け入れて自分の言語を作ったし、中国の儒家思想を受け入れて、より安定的な縦社会を作り出した。島国である事は、日本が物事を受け入れやすい国になった一つの重要な原因と考えられる。日本には「形から入る」という言葉がある。深い意味がわからなくてもいいので早速形から真似すべきだと理解できて、物事を受け入れやすい形を作った。つまり、いい意味を持っているのだ。このような物事を受け入れるスピードというのは日本の命運と関係しているので、日本が物事を受け入れやすいのは当然であろう。

## 5.6. 儒家からの影響

中国の思想が文字化して残って来たのは春秋戦国時代である。その時多種多様な思想と



思想家が現れた。例えば、孔子や孟子が代表する儒家、老子や荘子が代表する道家、墨子が代表する墨家、孫武が代表する兵家、韓非子が代表する法家、鄒衍が代表する陰陽家等々がある。各家独立しながらもその中で錯綜し複雑な関係が存在している。とはいえ、近代の中国に一番影響したのは孔子や孟子の儒家と老子や荘子の道家である。そして、中国の唐の時代にインドから伝わって来た仏教を加えて、この三つの思想や宗教が中国人に影響し続けてきた。ロンドンが読んだ新渡戸稲造の『武士道』には武士道と中国の儒家思想が深く関係していると既にも書いたが、この節では中国の儒家思想と日本の儒家思想を比較分析していきたい。

ジャック・ロンドンが日本人の道徳を理解するについては新渡戸稲造の著作『武士道』から大きな影響を受けたと言える。ロンドンが書いた“The Yellow Peril”の中に唯一引用した著作は『武士道』だということは言うまでもないが、例えば新渡戸の『武士道』にはこのような言葉も書かれている。

The tenets of Shintoism cover the two predominating features of the emotional life of our race. —Patriotism and Loyalty. (神道の教義は、日本人の感情のあり方を規定する二つの様相、すなわち愛国心と忠誠心を説いている。) (新渡戸稲造 2017:42-43)

ロンドンの“The Yellow Peril”の中にも次のような類似している言葉がある。

The religion of Japan is practically a worship of the State itself. Patriotism is the expression of this worship. ~The most admired quality to-day of Japanese is his patriotism. The Western world is in rhapsodies over it, unwittingly measuring the Japanese patriotism by its own conceptions of Japanese. (Jack London 1989:287-288)

このような類似している考えがあることから考えると、ロンドンは『武士道』から影響を受けていると言い切れるだろう。

『武士道』の中にも日本の道徳教育は特に中国の儒家思想からの影響が大きいと書いてある。『武士道』の中に引用した儒家の代表人物孔子と孟子の言葉だけで少なくとも 11 箇所がある。しかも、あらゆる面で引用されている。例えば、義または正義に関する章の中には孟子の言葉「仁は人の心であり、義は人の道である。その道を見捨てて顧みず、その心

を見失って求めることを知らないのは哀しいことである。人は鳥や犬を見失っても再びこれを求めることができるが、心を見失ってはこれを求めることはできない」<sup>6)</sup>を引用した。又は、勇気、敢為堅忍の精神についての章では、孔子の言葉「義を見てなさざるは勇なきなり」<sup>7)</sup>が引用されるなど、11箇所があった。もちろん中には牽強附会のものもあった。例えば自害と敵討ちについての章の孟子の言葉の引用はそのテーマについて若干適切ではないが、他にはほぼ適切だと考える。とすると、当時の日本の道德教育は中国の道德教育と近いものであった事は間違いないし、薩摩の郷中教育も儒家思想を基本としていたし、その中で傑出した人物である西郷隆盛の座右の銘「敬天愛人」も儒家思想の「義と仁」である。「敬天」は目上の人を尊敬すると理解できるし、「愛人」は目下の人たちに愛を注ぐと解釈できるだろう。西郷隆盛にも儒家思想が深く影響しているわけで、「義」だけではなく「仁」も重視することは、日本人が西郷隆盛を愛する理由の一つだろう。ロンドンもそれを理解したと考えられる。ロンドンはここから更にもう一歩進んで、それなら日本思想と中国思想も近いものではないだろうかと考えただろう。しかしながら、日本と中国は別の国であるので、地理、環境、風土、歴史などの区別があったため、日本が儒家思想を受け入れながらもそれを日本なりのものにしていくことは当然のことだ。

儒家思想を儒教と呼ぶなら、儒家は宗教なのかと言う疑問が浮かんでくるだろう。ほとんどの書物の中に儒家思想を儒教と書いている。日本だけでなく中国でも“儒教”と言う言い方がよく目に入る。しかし、儒家は本当に一つの宗教であるのか、宗教の定義を調べてみると『広辞苑』の説明はこうなっている。

神または何らかの超越的絶対者、あるいは卑俗なものから分裂され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事。また、それらの関連的体系。帰依者は精神的共同社会（教団）を営む。アニミズム・自然崇拜・トーテミズムなどの原始宗教、特定の民族が信仰する民族宗教すなわち仏教・キリスト教・イスラム教など、多種多様・・・（新村出 広辞苑 2008—1317）

まず、儒家には神が存在しない。そもそも孔子や孟子が自分を神とは言っていないし、自分たちは神だと思っていない。彼の弟子や後来の人たちも孔子や孟子は先生であると考え、それ以上の尊敬心は持たない。神や超自然なものについて語らないことが儒家の基本である。孔子のこの様な言葉が残されている。

「子、怪・力・乱・神を語らず」(論語・述語)

このことが儒家は宗教ではないと証明できる一つ目の理由である。

または、神道、仏教、キリスト教、イスラム教などこれらの宗教は神社、寺、神殿など神聖な場所や建物を持つことが一般的であるが、儒家にはこの様な場所がない。確かに、孔子廟が存在するけれど、これは偉人を記念する建物と考えられ、西郷隆盛の銅像と同じ様な存在と考えた方がいいだろう。

さらに、信者がいない。中国でも、日本でも、これら儒家に影響が深い国の人にあなたの信仰がなんですかと聞いても、私の信仰は儒教だと言う回答は出てこないだろう。何故ならば儒教という宗教は存在しないからだ。では何故、儒教という宗教がないのに儒家を儒教と呼んでいる人が多いのか。それは西方思想の影響だと考えられる。中国や日本の道徳取得において儒家はかなり貢献している。西方人の道徳取得を調べてみるとキリスト教から得たと考えられる。近代、ロンドンと同じ時代の新渡戸稲造の『武士道』にはそう記載されている。

“儒教”の教は宗教の教ではなくて、儒家或いは儒学の教えである。しかし、儒教を神道や仏教と一緒に並べてみると宗教という感じがしないだろう。そして、従来白人の道徳は宗教から得たものなので、彼らは他の道から道徳を取得することが考えられない。中国人や日本人が儒家思想から道徳を得ていると知ると儒家は宗教と見られがちだろう。現代の白人社会で資本社会が広がると共に彼らの考え方や価値観も同時に広がっているわけで、ここから儒教という呼び方が出て来たと考えられる。

『武士道』の中で孟子と孔子の教えは11箇所引用された。その中で孔子の教えは5箇所と孟子の教えは6箇所である。孟子の教えは孔子の教えより多いことは事実である。孔子は義を取ると主張し、孟子は義の他に仁を取ると主張した。実際には孟子の思想が既存社会の秩序を揺るがし転覆させかねないと見なされ、その書物は長く禁書とされていたのだ。確かに、義と仁両方を取る中国の歴史を巡ってみると、封建政権が何回も繰り返された。『葉隠』の中に次の言葉が残されている。

いにしへ、義を取りて死に殉ふ事、情に感じて志のせむればなり。(山本常朝 1969:3)

義を取る事は大事であると言っているが、仁については語らなかった。新渡戸稲造の『武

士道』は最初に英語で書かれて、後に日本語訳が出来たので、新渡戸の『武士道』が英語を喋る白人に武士道を紹介する本となったが、日本人に武士道を説明する本ではない。新渡戸の動機は外国人が日本人に対して持つ誤解を解消するためだった。山本博文の著書『武士道の名著』には新渡戸の『武士道』についてこう評価した。

新渡戸の『武士道』は、日本人が初めて自分で日本文化の特質を意識し、体系的に日本人の倫理、道徳を解説した優れた日本文化論だったとすることができる。そしてそれは、すでに述べたように、武士道思想を借りて論じた理想的日本人論だった。(山本博文 2013 :204-205)

新渡戸の『武士道』は白人が武士道に共鳴できるように、孟子の「仁」を多く取り入れたと思われる。実際には、孟子より近代の王陽明の思想がより重視されている。王陽明は儒家の中の重要な人物であり、彼は知識の実用を重視し、「心即理」や「知行合一」など儒家思想を革新する考えかたを提唱した。近代日本の偉人、特に鹿児島島の郷中教育を受けた西郷隆盛や東郷平八郎なども王陽明の説を高く評価した。王陽明は論理より行動を為すことを重視する、これは「形から入る」に意味が近いもので、彼の為した行動「格竹」はその代表である。武士道は多くの思想や宗教を統合した産物であって、その中でも日本固有の神道は日本精神の主幹である。しかしその精神をまとめる本が無かったので、理解しにくい面がある。西洋人と東洋人の道徳観念が全く違って、西洋人が東洋人のことを理解できないのと同様に東洋人も、キリスト教徒やギリシア神話の意義に対しては倫理的にも道徳的にも全く理解不能である。西洋人としてのロンドンが東洋人のことを理解しにくく区別しにくいだらう。

日本人と中国人の性格上の類似や区別にとって自然環境の影響は極めて大きいと考える。ロンドンが書いたような血の注入によって性格が変わった事については、影響が全くないといえないが、その影響は環境より極めて薄い事は事実だと考えられる。実際にロンドンは血統にとってもこだわっている。彼の初婚は彼のアングロ・サクソン血統継承のためと思われるし、彼のいろいろ作品の中でも、人種血統へのこだわりが屢々目に入る。ロンドンは自然主義作家と認識されているが、ロンドンの作品の中では遺伝や血統のことがよく出てくる。同じ皮膚の色である二つの民族の国である日本と中国には差異があったがその原

因については、ロンドンの中では自然に血統の別注入としてまとめられたと考えられる。ロンドンがこういう考え、つまり、日本人と中国人が同じルーツであり、だから、お互いに理解できる、しかし、血統の注入によって日本人と中国人の分化が起きた、ということについては、彼なりの考え方と理解できる。血統へのこだわりについては彼の後の中国人作“Chun Ah Chun”の中に最も具体的な表現が書かれている。

ジャック・ロンドンのこのような誤解や理解不能の原因の本質は、道德上の違い、或いは文化の違いである。アメリカやヨーロッパの白人世界はキリスト教中心であるので、アジアはそれとは違う。たとえアジアの中であっても思想や宗教の違いは生じているだろう。

注

- 1) 陳舜臣の『日本人と中国人―“同文同種” と思ひ込む危険』というタイトルの本からの言葉である。
- 2) Jack London(ラス・キングマン、辻井栄滋)(編) (1989) *The Works of Jack London*, p279
- 3) 十七条憲法の中の「第一曰く」の内容である。
- 4) 『日本国語大辞典 第二版』 第十二巻 にある。
- 5) 彼の日記に「なりたいものになれない」という言葉が残されている。
- 6) 中国語では「仁，人心也；义，人路也 ‘舍其路而弗由，放其心而不知求，哀哉！人有鸡犬放则求之，有心放而不知求」となる。
- 7) 中国語では「见义不为无勇也」となる。

## 第6章 “The Chinago” から見るジャック・ロンドンの中国人観の変化

今の時代になっても中国脅威論がアメリカ白人の中に続いている。特に、トランプ氏が大統領になってから、アメリカと中国の貿易戦争が始まろうとしている。たとえ両国の経済はお互いに深く関係しているとしても、貿易戦争が起こったら両国とも経済損失が出るにもかかわらず、アメリカは貿易戦争を起こそうとしている。アメリカは中国に対する警戒心が強いことが明らかだ。アメリカ及びアメリカ白人にはアジア特に中国と日本に対する敵意が昔から存在している。百数十年前にダーウィンの『進化論』が出て、そして、ハーバート・スペンサーが『社会進化論』の思想を広げ、白人は優生論を正当化していたし、人類は今だに皮膚の色などで人間を分類しようとしてもいる。もちろん、白人が一番優れた人種だと考えている人々もまだいる。しかし、十九世紀後半、日本は迅速に現代化を成し遂げ、白人の国ロシアに勝った。中国人の人口と勤勉さを考えあわせて、アジア人は当時西洋人が支配していた世界にとっての脅威と感じて、黄禍論が流行した。ロンドンも黄禍論が流行している時代の作家であり、積極的に黄禍論を提唱した。彼は短編小説 “The Unparalleled Invasion”、エッセー “The Yellow Peril”、“If Japan Wakens China” を書いており、中国に敵意を持ち中国脅威論の文章も残している。

一つの原因は、彼が 1904 年の日露戦争時に日本軍の従軍記者として中国の地に立ち、短い滞在の中で中国の安東、九連城、鳳凰城を訪れたことだ。<sup>1)</sup> 彼は戦争を見ながら中国人の勤勉さに驚いた。特に、中国に来る前に朝鮮半島での長い滞在があったので、戦争中の朝鮮半島の人と中国人の間に鮮明な差異があることを知り、将来中国はアメリカの脅威になると深く感じた。当時は、黄禍論が流行していたこともあって、ロンドンも中国脅威論を含む文章を書いたのだろう。しかし、ロンドンは、中国に興味を持ってさらに中国思想と文化を深く理解すると、彼の小説の中の中国人の描写は中国人らしくなって来た。また、中国に対する警戒心や中国脅威論もだんだん薄くなっていったのである。“The Chinago” はロンドンの中国脅威論が薄くなる始めの短編小説と考えられる。小説の中で中国人の特徴や物事のやり方などを正しく捉えている所が多くなっているため、中国についてのロンドンの理解は深くなったことがわかる。これらが原因で、中国への敵意も弱くなっていった。このように、彼の考えの転換は現在の世界でも考えさせられる点だと思われる。

ジャック・ロンドンの “The Chinago” が初めて雑誌に載ったのは 1909 年 6 月で、雑誌

*Harper's Monthly Magazine*, vol.119 においてである。“The Chinago”はどんな作品なのかについて中国にはさまざまな視点が存在している。その中で多いのは、この小説が中国人を差別していて、小説中の中国人は、臆病であり、反応が鈍く、劣悪な環境や理不尽な待遇に甘んじる奴隷的人物像になっているというものだ。或いは、中国人人夫達は奴隷根性を持ち、無知で愚かで、醜い、など劣等人種としてロンドンが描いたという意見が多数である。

呉氷は「矛盾的杰克・伦敦」の中で「ロンドンは、彼の数少ない中国人関連の作品の中で、嫌いな感情を含めて、中国人を劣等的な民族として描いた」と書いた。

沈大力は「杰克・伦敦的幽灵」の中で「小説“The Chinago”は、中国人人夫を、奴隷根性を持ち、無知で愚かで、醜く、堅苦しい、道理をわきまえない劣等人種の典型として描いた」と書いた。

そして、韩红梅は「试论《中国佬》中的中国劳工形象」の中で““The Chinago”中の主人公阿仇は、農民意識の強い、可哀想な人である。強い農民意識の影響で、阿仇は奴隷根性を持ち、奴隷としての生活を楽しんでおり、阿仇と彼の仲間は無知で愚かだと表現されている、具体的な特徴は劣悪で理不尽な待遇に甘んじて人の言いなりになることである」と書いた。また、王晓莉の「傲慢与偏见—杰克・伦敦笔下的中国人形象」の中も同じ観点があった。

一方、李滨は「论杰・克伦敦中国佬中华人形象的嬗变-以阐释学接受美学批评为观照」の中で「ジャック・ロンドンは“The Chinago”によって彼なりに目的を持って白人統治を風刺し攻撃している。海外にいた中国人の生活状況を書いた小説だ」と言った。このような、さまざまな意見があるので、いったい、ロンドンはどんな気持ちと考えを持って、この“The Chinago”を書いたのかを分析したいと思う。元になった事件を参照しながら、ロンドンに近い時代の中国人作家魯迅の筆の下の中国人像と比較し、さらにこの作品の前に書かれたロンドンの中国人短編小説“White and Yellow”と“Yellow Handkerchief”とも対照して、具体的内容に基づいた“The Chinago”の分析を行いたいと考えている。

## 6.1. ストーリーの梗概

“The Chinago”の大筋を紹介したいと思う。この短編小説は二つの部分に分けられ、前半が法廷の話である。主人公「阿仇」はタヒチで出稼ぎをしている 500 人の中国人人夫の一人



だが、ある日たまたま殺人現場に居合わせて、殺人事件に巻き込まれた。愚かなフランス人の裁判官は、農園の白人監督シェンメールが鞭で打った中国人人夫の顔にある傷痕のひどさで事実を判断したので、無実の阿仇は二十年懲役の判決を下された。白人と中国人の文化が違うから白人の法廷のやり方が分からないこともあり、また、裁判自体もフランス人社会の中にあたりしだったので、仕方なく、阿仇はその判決を受け入れた。

後半は処刑の話である。事態はさらに悪い方向に進んだ。晩餐会に参加していた裁判長が酒を飲みすぎて、本来死刑判決を受けるべき阿丑の名前を書く時に手がふるえてしまい、阿丑と阿仇を間違ったため、阿仇が死刑にされてしまった。処刑当日、憲兵は間違っていることに気づいたが無視した。処刑場に着いた後、農場監督シェンメールと警察部長も間違っていることに気づいたが、たかが中国人一人の命すぎないと考えたので、そのまま阿仇は死刑に処されて死んだ。無実の阿仇はフランスの裁判で二十年懲役になってしまったが、さらに阿丑と名前を間違われて死刑になってしまったのだ。みんなが間違っていることに気づいたが、にもかかわらず、こうして阿仇は死んだ。その原因は何なのか、そしてロンドンは一切何を表現したかったのかを分析したい。

## 6.2. Chim Soo Kung は阿仇なのか？

ジャック・ロンドンの作品には、彼自身の体験か伝聞に基づいていて、そこに彼の創作を加えて書かれた作品が多い。この“The Chinago”は、聞いた話に基づいて創作した短編小説なのか、この物語に当てはまる実在の人物も居たのか、という問題から分析していく。

2013年8月に沈大力が《光明日報》において、ロンドンは実際の事件に基づいて“The Chinago”を書いた、と述べている。しかし彼は、タヒチで起こった事件の詳細や“The Chinago”との関連性について、またロンドンなぜこの事件を知っていたのかということについては論じていない。また、事件の主人公の名前も違っているため、ここで改めてロンドンとタヒチの事件と小説“The Chinago”の関係性についてより詳しく論じることにしたい。

ロンドンは1907年2月27日に“南海の楽園”と呼ばれているタヒチ島に辿り着いた。そして、パペーテ (Papeeta) からライアテア島 (Raiatea) 及びターハーアー (Taha'a) を経てレヴァヴァウ (Raivavae) に至った。<sup>2)</sup> そして、1908年4月15日に、スナーク号の乗組員はレヴァヴァウ (Raivavae) を後にした。そして、1908年4月24日より前に“The

Chinago”を脱稿した。つまり、これはタヒチから出た直後に書いた小説ということになる。このタヒチは中国人と深く関わっている。ロンドンが“The Chinago”を書き始める約40年前の1865年3月に337人の中国人労働者がタヒチに辿り着いており、彼らは白人の農園で日雇い人夫として綿花やコーヒー豆や砂糖キビなどを植えていて、毎日12時間から15時間も働いていた。しかし、残念ながら渡って来た中国人は二つに分かれた、一つは広東人、もう一つは客家人である。<sup>3)</sup>二つに分かれたこれらの中国人たちの仲が悪くなって彼らはよく喧嘩した。そして、こんな事件が起こった。1869年に喧嘩をしたときに一人の中国人が死んでしまったのだ。まもなく何名かの中国人が捕まって、フランス人による裁判で判決が下された(当時タヒチはフランス領である)。その結果は四人が死刑になったが、その中の一人[Chim Soo Kung 沈秀純]<sup>4)</sup>は仲間を救うためにすべての罪をかぶり、自分を犠牲にしてほかの仲間三人を救った。

以来、彼はタヒチにいる中国人の間では英雄と見られている。年に一回、彼の墓の前に集まってすべての喧嘩をやめて平和を誓い、このことがタヒチにいる中国人の団結のしるしにもなっている。しかし、彼にほんとうに罪があったのかということは今でも疑問である。とはいえ、この話はタヒチで拡散していて、タヒチの人のほとんどが知っている。現在、タヒチの文化を紹介するホームページにもこの事件が載っている。

ロンドンはタヒチに長く滞在していて、島を出た直後に“The Chinago”を書いたので、この小説ができたタイミングとこの物語の舞台、そして、主人公の身分、具体的なフランス法廷という設定、主人公が無実である可能性のある判決と死刑という処刑など、たくさん的一致しているところがあるので、ロンドンは、タヒチ滞在中に、Chim Soo Kung[沈秀純]についての話を耳にしたのではないか。そして、ロンドンはその時に中国人への理解を深め彼自身の中国人についての考えを書き込んで“The Chinago”を作り上げたと考えられるのではないか。

### 6.3. ロンドンの中国人に対する差別意識の変化

#### 6.3.1. 中国人についての描写上の変化

1902年のロンドンと1908年のロンドンと比べると、中国人に対する認識にどんな変化が起きているだろうか。1902年に書いた小説“Yellow Handkerchief”と“White and Yellow”における中国人の描写と1908年に書いた“The Chinago”の中の中国人の描写からその変

化が読みとれる。“White and Yellow”と“Yellow Handkerchief”における中国人の主人公についての描写は、次のようである。

This was met by a curdling yell of rage. A big Chinaman, remarkably evil-looking, with his head swathed in a yellow silk handkerchief and face badly pock-marked.

(この時怒っている声で叫んでいる人がいた。体が大きな中国人だ、見た目が悪魔のように、頭には黄色い絹製のハンカチで被っていた、そして、顔にはあばたのある人。)(Jack London 1905:9)

Leading them came a big, muscular man, conspicuous for his pock-marked face and the yellow silk handkerchief swathed about his head.

(彼らのリーダーは体が大きい、筋肉が強い男性だ。目立つのは顔にあばたのある人、そして、頭に黄色い絹製のハンカチで被っていることだ。)(Jack London 1905:216)

短い文章でありながらこの二箇所においては、かなり悪いイメージの中国人像が浮かんでくるだろう。一言でいうと、顔にあばたがある悪魔のような海賊だ。このように悪い中国人の外観の短い描写以外には、心理的な描写或いは性格上の描写は全く見られない。1902年のロンドンでは中国人のことをあまり理解していない上に、中国人に対しての偏見を強く持っていることがわかるだろう。しかし、当時のアメリカ社会において、このような考えを持っている白人は少なくなかったし、むしろ一般的だと思われる。しかし、これに対して、1908年のロンドンの中国人についての描写には変化が起きている。“The Chinago”には、

阿仇は二十二歳だった。上機嫌で人が良く、たやすい微笑した。体はアジアふうにはっきりとしているのに、顔のほうは丸くと太っていた。月のように丸く、一緒にいる同郷人たちには珍しいことだが、穏やかな自己満足と優しい思いやりの気持ちとをふりまいた。またその顔つきも、内を偽るものではなかった。決して迷惑をかけることもなければ、けんかにだって加わることもない。賭け事もやらない。その魂には、ばくち打ちに付き物である冷酷なところがなかったのだ。ささやかなことや取るに足りない楽しみだけで満足していた。綿花畑での焼きつくような労役のあとの涼しいひと時の静寂があれば、彼には限り

なく満足なのだった。何時間も座って、一本の花を見つめたり、生きていることの神秘や謎について思索できるからだ。砂浜の小さな三日月形の水溜まりに青鷺や飛魚の踊る銀隣や、礁湖の向こうに真珠色やバラ色に映える日没といったものを目にすると、うっとりとなり、毎日重なる疲労やシェンメールの重いむちのことなどすっかり忘れることができた。(ロンドン・辻井・森 1999 : 119-120)<sup>5)</sup>

という部分がある。この阿仇の描写はなかなか長い文章であり、彼の外観描写はもちろん性格と内面の描写も含まれていて、とても詳しく書かれている。阿仇の描写の中には“Yellow Handkerchief”のように悪い印象を与える描写は一言もなかった。逆に、中国人阿仇は非の打ちのない善人だと書かれている。したがって“The Chinago”を書いたときには、ロンドンの中国人への見方は大きく変わっていたことが分かる。しかも、当時のアメリカは人種偏見が強い社会のままなので、このように中国人の長所ばかり書いたロンドンには、中国人に対する偏見が“Yellow Handkerchief”を書いたときより明らかに減っていて、一般的なアメリカ人の考え方とは大分違ってきていることが分かる。阿仇の描写だけを見るとそこには中国人への偏見が全く見えないし、そして、心理描写が増えてきたことからすると、ロンドンは自身の中国人についての理解に自信を持つようになったと考えられる。

### 6.3.2. 主人公の名前について

小説“White and Yellow”と“Yellow Handkerchief”の中に具体的な中国人の名前は一つも出て来ていない。ただ、頭に黄色いハンカチを被っているので Yellow Handkerchief という名前を付けているだけだ。これらの描写を見るとその時のロンドンは、中国人のことを書いてはみたものの、中国人のことをあまり深く知らなかっただろう。しかし、“The Chinago”では大きな変化が起こった。小説の中に出てくる中国人一人一人に名前が付けられており、主人公の阿仇はもちろん、仲間の阿丑、翁利、阿童、殺された張戈、本当の殺人犯の阿三など、小説に出てきた中国人一人一人が具体化されていると見られる。そして「阿」という漢字は日本の「さん」と近い意味でマカオと広東の周りで今でもよく使われている。これを見るとロンドンには以前より中国人のことを理解していると考えられる。

### 6.3.3. 中国人の立場

“The Chinago”の中には、中国人の立場に立って、白人を評価するところもある。これは

“White and Yellow” や “Yellow Handkerchief” など、“The Chinago” 以前の作品の中にはなかったものである。具体的な内容は、

こいつら白人どもときたら、わけがわからない。阿仇は白人のたちの不可解さについてあれこれ考えながら、法廷に座って判決を待っていた。心の奥で何を考えているのかわからないのだ。これまでも白人どもに何人か会ってはいるが、どいつもみんな同じだ・・・彼らの心はみないわくありげに働き、捕らまえどころがない、野獣に似ている。ささいなことで悩むが、時には中国人以上熱心に働くこともできる。中国人のように穏健ではない。大食漢で、食べる量ときたら並はずれであり、飲むほうはさらに度を越している。一つの行為がいつ彼らを喜ばせたり嵐のような怒りを呼び起こしたりするものなのか、中国人には皆目わからない。まるで予測がつかないのだ。・・・中国人の目で見れば、白人どもの目の奥には幕状の仕切りがあって、連中の精神状態の裏側を覆い隠してしまっているというわけだ。・・・白人というのはわけのわからぬ驚くべき連中で、悪魔だ。シェンメールを見つめろ。(ロンドン・辻井・森 1999:122-123)

というものである。これを読めば、ロンドンが中国人の立場に立って白人のことをどのように考えていたのかがわかるだろう。まず、中国人は白人のことが嫌いだ。「こいつら白人どもときたら」(There was no understanding these white devils) という一言で嫌な感情が含まれていることがわかる。そして、中国人は白人の物事のやり方と心理を捕まえることはできない。また、白人は中国人のように穏健に働くことはできないし、大食漢で、飲むほうはさらに度を越している。結論としては、中国人から見た白人は悪魔のような存在だとロンドンが考えていたのだ。これで、1908年のロンドンの中国人に対する認識が、1902年に“White and Yellow” や “Yellow Handkerchief” を書いた時より大分深まっていることがわかる、従って、中国人への偏見が弱くなっていることも判断できる。

#### 6.4. “The Chinago” から見るロンドンの中国人理解

小説の内容を見ると、中国人や中国思想についてロンドンがかなり理解していることがわかる、この章では小説の中にある具体的な表現を取り上げながら、その表現が中国人や中国思想に相応しいものであることを証明していきたいと考える。

#### 6.4.1. 「一本の花」(a solitary flower) について

ロンドンが書いた中国労働者阿仇の内面の描写は、アジア人、特に中国人としてはかなり正しいものと考えられる。たとえば、

何時間も座って、一本の花を見つめたり、生きていることの神秘や謎について思索できるからだ。砂浜の小さな三日月形の水溜りに青鷺や飛魚の踊る銀隣や、礁湖の向こうに真珠色やバラ色に映える日没といったものを目にすると、うっとりとなり、毎日重なる疲労やシェンメールの重いむちのことなどすっかり忘れることができた(ロンドン・辻井・森 1999 : 120)

と述べられているが、阿仇がわずかなもの(一本の花など)を思って生きていることや神秘や謎について思索できることは、中国人の考えと近いものなのか。まず、頭に浮かぶものでロンドンの描写に近いのは、中国では「華嚴經」中の言葉である。<sup>6)</sup> その言葉は「一花一世界，一木一浮生，一草一天堂，一葉一如來・・・」で、一つの小さな物には一つの世界がある、つまり一つの小さな物の中に一つの世界が見える、という考えは中国の昔からの思想ともっとも近いものであるだろう。

もう一つ思いうかぶのは「格竹」の昔話である。中国明王朝の儒学者王陽明(1472~1528)は知行合一を提唱した。<sup>7)</sup> 彼が基本思想“格物”を实践した話は「格竹」である。この行動は“The Chinago”の主人公阿仇の行動に一致している。王陽明は竹から真理や道理を探究するため、七日間に渡ってずっと竹を見つめ続けた。王陽明より早い時代に生きた南宋の儒学者朱熹(1130~1200)は改めて「格物致知」について解説し、これを提唱した。<sup>8)</sup> ロンドンの時代に一番影響が深かったのはやはり朱熹の解釈であり、朱熹は「格物致知」について“物事を至るところまで探究して、道理や知恵が現れることです”というような解釈をした。そのあと、王陽明が朱熹の解釈を实践したのは「格竹」である。ロンドンが行った阿仇の心理描写はこの“格物致知”の思想にとっても近いと考えられる。中国の思想をそこまで描写できているとは驚くべきことで、ロンドンは中国のことに詳しいとさえ考えられる。また、この描写には、また新渡戸稲造の『武士道』の中の日本人を描写する次のような文章に相似している部分がある。

Is it any wonder that the sweet-smelling season of the cherry blossom should call forth the whole nation from their little habitations? Blame them not, if for a time their limbs forget their toil and moil and their hearts their pangs and sorrows. Their brief pleasure ended, they return to their daily task with new strength and new resolutions.

(それなら、桜の花の甘美な香りが満ちる季節に、国民全体がその小さな住居から誘い出されても何の不思議もないではないか。一時、四肢が苦勞を忘れ、心が悲哀を忘れようとも、咎めることがないだろう。束の間の快樂が過ぎれば、人々は新たな活力と決意を持って、日常の仕事へと戻っていく) (Nitobe 2008 : 264-265)

既に述べたように、ロンドンが新渡戸稲造の『武士道』を読んだことがある(ロンドンは「黄禍」の中に『武士道』の一節を引用している)。ロンドンの中に、日本と中国には共通点があるとする意識があるようだ。ロンドンが『武士道』の中の日本人についての描写の一部を借りて、中国労働者阿仇の思想に挿入した可能性さえあると考えられる。そうだとすると、ロンドンがアジア人の休息の安らぎについて理解していたことは確かだ。

#### 6.4.2. 「無表情」(impassive)について

もう一つ重複の手法で描いたのは、阿仇と仲間が判決を言い渡された時の次のような反応である。

阿仇は無表情な顔をして座っていると、判事が判決を言い渡した、ほかの四名の顔も、同様に無表情であった。さらに通訳が以下の説明をした時にも、無表情のままだった。すなわち、張戈の殺人については五名とも有罪であり、阿丑は断頭、阿仇はニュー・カレドニアで二十年の懲役、翁利は十二年、阿童は十年というものだ。このことで興奮してみたところで何にもならない。首をはねられるというのに、阿丑でさえミイラのように無表情のままだ(ジャック・ロンドン・辻井・森 1999 : 124)

ここでは「無表情」(impassive)は四回も使われた、始めの「無表情」(impassive)については阿仇たちが普通に疲れたためと考えてもいいが、判事が判決を言い渡した時も「無表情」(impassive)だった。判事はフランス語で言ったはずなので、阿仇たちはフランス語がわからないので、「無表情」(impassive)であることも理解できるが、次に通訳が判決内容を説明

した後も「無表情」(impassive)のままであることは一般的なことではないので、理解しにくいだろう。さらに、死刑であった阿丑さえミイラのような「無表情」(impassive)であったことはどうしても理解できないことである。阿仇達四人が無実なのにもかかわらず、反抗せずに有罪判決を受け入れたことについては、二つの原因があると考えられる、一つ目は、当時、封建社会の統治のため中国で仏教と儒家を広めたことが考えられる。儒教の中には宿命論的な言葉や思想が多いと見られている。宿命論は中国だけではなく、世界中に広がっていったが。インド由来で中国でも広がった仏教はその一つで、メソポタミア、エジプト、インド、ローマなどにもそれはあった。例えば、私たちの生まれた時の家庭に貧富などの差がある時、あなたがあの家庭に生まれたことは運命であると言われたら、容易に受け入れられるだろう。

中国人である筆者も子どもの時から「生死由命、富貴在天」(生死に命あり、富貴は天に在り)の言葉を知っていた。この言葉は孔子の弟子子夏が最初言った言葉だ(「論語・顔淵」)。孔子は弟子の伯牛が忌まわしい病気に倒れた時、孔子はそれを見舞って「亡之、命矣夫、斯人也而有斯疾也！」(命なるかな、この人にしてこの病あるとは！)と言った。儒家のもう一人孟子は「莫非命也、順受其正」(命に非ざることはなきも、その正しきを順い受くべし)と言った(「孟子・尽心上」)。実は、新渡戸稲造の『武士道』の中にもこの文章がある。

仏教は、運命に身を委ねるといふ穏やかな感覚、不可避なものを受容する心、危険や災難に直面した時の禁欲的な沈着を有している。このような思想は封建統治の道具となり、<sup>9)</sup>封建社会に宿命論を広げ、国民を服従させ、反抗心を無くしたわけだ。阿仇たちもそのような社会のなかで生活していたので、その思想の影響を受けただろう。阿仇はその影響を受けており、そのことが、阿仇達がこの不公平な運命を受け入れた一つの原因だと考えられる。

もう一つの原因は、阿仇の判決が降りた後にロンドンが書いていることだが、東洋人と西洋人がお互いにお互いの行動や考え方を理解できないことだ。阿仇はタヒチに居た中国労働者で、奴隷のように扱われ、やり方や順番などが全く分からないフランス人の法廷にいて、フランスの法律も、フランス語さえも分からなかった。そして当時の清政府も全く役に立たない中、反抗しようにもできない状態になっていた。つまり、阿仇達にとって罪を受け入れることは唯一の選択肢になっていただろう。その国にいて、その状況下で阿仇たちが運命に抗したとすれば面白い話ではあるが、現実とは乖離していると考える。

白人が間違っていることは中国人労働者五百人がみんな知っているのだが、その中で指



摘する人は一人も出てこなかった。これは、阿仇が最後に死に追いやられたもう一つの原因だと思われる。ところがこのような観客心理を描写した作家が、もう一人いる。それは中国近代で最も有名な作家のひとり魯迅である。魯迅が医学から文学に専攻を変えた原因は「幻灯事件」である。具体的に言えば魯迅は、日本の仙台に留学中、日露戦争に関するスライドを見た時に、日露戦争中ロシア軍のスパイを働いたとして日本軍に処刑される中国人と、それをぼんやり見ている周囲の中国人の姿に衝撃を受ける。そして彼は当時の中国人の「精神の改造」が第一に必要なだと思ひ至り、文学に進む意思を固める。これが魯迅の幻灯事件だ。同じ日露戦争の時、ロンドンに日本軍の従軍記者として、朝鮮半島に渡って、中国まで来たことがある。いわゆる、ロンドンと魯迅という同じ時代の西洋と東洋の有名な二人の作家であって、日露戦争中の中国人を見た。そして、同時に同じような中国人の弱点を捉えている。同胞の死も他人の事のように観ていることは当時の中国人 10) には存在していた弱点のことは事実である。ロンドンもその弱点を捉えているが、それは中国人に対する偏見とは言えないだろう。ロンドンは当時の中国人労働者の弱点を正確に書いていると見られる。ロンドンは、当時の中国人労働者の弱点を暴露して、中国人としてこの弱点を克服すれば成長できるし、成長できたら同じような事件は起きないだろう、と考えたのかもしれない。

#### 6.4.3. 「陰鷲録」について

「陰鷲録」の中国語名は「文昌帝君陰鷲文」で、明朝の時代の文章と見られている。日本では「陰鷲録」、アメリカでは YIN CHIN WEN/THE TRACT OF QUIET WAY WITH EXTRACTS FROM THE CHINESE COMMENTAR であり、略称は“The Tract of the Quiet Way”だ。TEITARO SUZUKI<sup>11)</sup>と PAUL CARUS が英語に翻訳して、1906 年に出版されている。“The Chinago”の中に「陰鷲録」のテーマが二回出てきたし、「陰鷲録」の内容も二箇所引用されている。

ここで具体的に分析したいと思う。主人公阿仇は二回この文章のことを思い出した。一回目は、クリュショが護送する犯人が間違っていることに気づいたが、そのまま、無責任に見逃した後のことだ。阿仇は「陰鷲録」のある数節を思い出して暗唱することによって、運命に身をゆだねようと努めた。二回目は、阿仇が死の直前に「陰鷲録」の格言を思い出してこそうとしたことだ。「和して生きよ」という思いが浮かんだ。が、それでは当てはまらない。自分はこれから生きようとするのではなく、今まさに死のうとしているのだ。そう、

それではだめだ。「悪意を許せ」—そうだが、許す悪意などない。阿仇は二回「陰鷲録」を思い出すが、一つは目前の死を受け入れようとするとき、もう一つはこの死は阿仇自身の宿命と受け入れようとするときだ。しかし、「陰鷲録」の中の言葉はどちらにも当てはまらなかった。では、ロンドンが「陰鷲録」を否定しているのか？「陰鷲録」が宿命論を含んでいることに間違いはないが、「陰鷲録」の語る宿命とは、まず、善行にはよい報いがあり、悪行には悪い報いがあるということである。両親、兄弟、子孫、妻、友人に対するやるべき言行などの教えであり、善を尽くすことを提唱する。当代の日本でも「陰鷲録」は高い評価を得られた。稲盛和夫が書いた『稲盛和夫の哲学』の中で、稲盛和夫本人が「陰鷲録」からの影響があったと言っている。稲盛和夫が信じているのは「陰鷲録」中の「因果応報の法則」であり、彼は

「運命」と「因果応報の法則」が DNA の二重らせんのように複雑にねじれ合い、縊り合うようにしてできているために、「1+1=2」というように整合性がなく、誰も人生がこの「運命」と「因果応報の法則」の二つの要素からできていること、そして「因果応報の法則」の方が「運命」に勝り、人生を変えることができるということを信じようとはしないのです。しかし、「因果応報の法則」はあるのです。

— (中略) —

われわれが善き意識を持ったとき、宇宙に充満する“すべての生きとし生けるものよ、よかれかし”という意識——“創造主の意識”といってもよいかもしれませんが——と合致します。そのような美しい個人の意思は、宇宙の意識と波長が合い、すべてがうまく行き、物事が成功、発展へと導かれていくのです。逆に、宇宙の意識に逆行すれば失敗するにきまっているのです。(稲盛 2001 : (118-119))

と述べている。稲盛は論理的に「因果応報の法則」が存在していることを説明した。この説はまさに「陰鷲録」から読みとったものであり、人間は善行をすべきだということを提唱しているのだろう。阿仇は「陰鷲録」を思い出したが、彼にとっては、単に運命を入れようとする道具としては、それは当てはまらないことは当然だ。しかし、ロンドンは「陰鷲録」を否定しているのではないだろう。ロンドンが幾つも中国についての本を読んだが、引用したのは「陰鷲録」の内容だけだ。彼はこれを読んだ上で、「陰鷲録」の中の考えは中国人の思想と一番近いものと考えていただろう。ロンドンが彼の中国人作品の中で始めて

中国人の心理描写を入れたのは“*The Chinago*”であることも「陰鷲録」と深く関係しているだろう。そして、彼の中国脅威論が弱まっていたことは「陰鷲録」から深い影響を受けたのだと考えられる。既に書いた阿仇の描写と「陰鷲録」を読む前にロンドンが書いた小説の間には、中国人の描写の違いが見られる。ロンドンの中国人に対する考えが変わったのはすべて「陰鷲録」が原因だとは言えないが、少なくとも、ロンドンの中国思想についての理解がより深くなったとは言えるだろう。これに従って、中国人に対する彼の印象も変化しつつあったと考えられる。“*The Chinago*”を読むまで「陰鷲録」について筆者は知らなかったが、中国人さえ知らない本をアメリカの作家ロンドンがよく知っていたものだ。このことから、ロンドンが中国について強い興味を持っていたことと中国の思想を知りたいと思っていたことが分かるだろう。調べて見ると、ロンドンが読んだ中国についての本は確認できるものだけで何冊もあり、例えば Giles・Herbert Allen の *A History of Chinese Literature*、Krausse・Alexis Sidney の *The Far East: Its History and Its Question* などがある。ロンドンが中国に興味があること、そして、もっと中国を理解したいに従って、中国人脅威論も変わりつつあることが分かる。

#### 6.4.4. 「瞑想と休憩の庭」(garden of meditation and repose)について

ロンドンが中国人のことを正しく書けたもう一つの証拠は、次のような中国人の夢に関わっている。

中国では、古くは人間も実は万物の中のものであり、自然の中の一員であると考えていた。中でも自然の風物は、もっとも自然的であるとみなして敬愛していた。これは、今日なお伝統的な考え方として伝わっている。ヨーロッパでは、中世以前は、自然の風物を畏敬していたけれども、中世において教会勢力が権勢をふるった時代は、自然の風物を低俗なものとして、人間を上位なものとしてみなしていた。(小尾郊一 1988 : 181)

「瞑想と休憩の庭」(garden of meditation and repose)は“*The Chinago*”の中に 5 回も出てくる。この「瞑想と休憩の庭」は阿仇の最終の目的であり、或いは阿仇の理想的な生活であり、すべての彼の努力はこのためだった。この「瞑想と休憩の庭」のために出稼ぎを決め、タヒチに向かった。この「瞑想と休憩の庭」のためにシェンメールの獣のような残酷さに耐え、この「瞑想と休憩の庭」のために二十年もの懲役を飲み込んだ。死の直前に

最後に思い出したのはこの「瞑想と休憩の庭」である。まず、中国人労働者には、ただ働くために働くというより、しっかりした各々の目的があり、この最終目的は他人には無害である。瞑想というのは思想或いは精神上の自由のことだと考えられ、休憩は身体上の自由のことだと考えられる。総じて言えば、阿仇やタヒチに居たすべての中国人労働者は最終目標として心身上の自由を追求していただろう。この小説の最後に、ロンドン是这样書いた。

そしてその瞬間にも（死の直前）、瞑想と休息の庭を最後にちらっと思い浮かべた。涼しい風が吹いており、数本の木々につるしてある鈴がチリンチリンと静かになっている。さらには、鳥たちが眠気を催させるような音を立て、高い壁の向こうからは、村の生活の静かなざわめきが聞こえてくる。（ジャック・ロンドン・辻井・森 1999 : 139）

中国古代の思想家は、儒家だけではなく、もう一つ重要な思想として道家があり、<sup>12)</sup> その代表人物は老子と荘子で、老荘思想といわれている。典型的な行動は隠遁であったが、すべての人間が隠遁したら国が回らなくなるため、老荘思想は主流思想にならなかった。しかし、この思想の中国人への影響は深いものだった。隠遁は道家の中の一つの考えである。阿仇の夢の家は、村とちょっと離れていて、高い壁もあることから、ほかの人間からは離れることを意味している。したがって隠遁に近い考えと考えられる。隠遁とはただ他の人間から離れることではなく、自然を楽しみ心身的な自由を追求することでもある。「涼しい風が吹いており、数本の木々につるしてある鈴がチリンチリンと静かになっている。さらには、鳥たちが眠気を催させるような音を立てて」ということは自然を楽しむことであるので、上述したように、阿仇の最終の目的としての瞑想というのは、思想或いは精神上の自由のことと考えられるし、休憩は身体上の自由のことと考えられる。まとめると、阿仇やタヒチに居た中国労働者たちの最終目標は、老荘思想に従って隠遁した上で、心身上の自由を追求したいという考えだと言える。道教では欲を無くすことを主張しない。無限な世界の中に有限な欲を追求するは道教の主張であり、阿仇の欲は、人に無害で、自然と融合した、心身上の自由を得ることだ。これは阿仇だけではなく東洋人にとって普遍的な追求と考えられる。西洋世界で育ったロンドンがこの点についてなぜか正確に捉えている。

この時のロndonは中国と中国人のことが大分理解できていて、当時の中国人の優れたところであれ、弱点であれ、ある程度正確に捉えることができていたと考える。

## 6.5. 白人による差別の暴露

“The Chinago”の中には白人が四人出てきている。農場のドイツ人監督シェンメール、フランス人憲兵クリュショ、フランス人裁判長、フランス人巡査部長である。この四人がやったことを纏めてみると、農場監督でドイツ白人のシェンメールは人でなしで、中国人人夫たちを奴隷扱いし、握りこぶしで一人の人足を殺した。このことで会社は何千ドルもの損をしたが、シェンメールは何も罰を与えられなかった。そして、阿仇を殺したギロチンを自分で作ったし、しかも三回も実験した。憲兵クリュショは頭が鈍く、飲み込みが遅く愚かだった。知っているのは権利に対する抑制と恐怖だけである。クリュショが心を痛めた、巡査部長の次のような言葉がある。

クリュショ、お前は馬鹿だ！その分かりが早ければ早いほど、それだけうまくゆくということだ。考えてはいかん。言われると通りにして、考えるなんてことは、お前より優れたものに任せることだ。(ジャック・ロンドン・辻井・森 1999 : 132)

愚かなフランス人の裁判官は、農園の白人監督シェンメールが鞭で打った中国人人夫の顔にある傷痕のひどさで物事を判断した。晩餐会に参加していた裁判長が酒を飲みすぎたため、本来死刑判決を受けるべき阿丑の名前を書く時手がふるえてしまい、阿丑を阿仇と間違えたため、阿仇は死刑にされてしまった。

巡査部長は、十五マイル荷馬車に揺られて進むと真珠の貿易業者の娘バーサが待っていることを考えているので、処刑を早く進めようとした。

唯一のドイツ人シェンメールは、頑張っている姿をこの地を統治しているフランス人に見せようと、中国人に対しては余計残酷になった。一方、統治者のフランス人たちは愚かで、ロンドンに中国人の考えを借りて、そのことを小説の最初の所に四回も「フランス人の愚かさ加減にはあきれていた」(ジャック・ロンドン 辻井栄滋・森孝晴 訳 1999 : 116)、「こいつらフランス人というのは、何と愚かなんだろう」、「こいつらフランス人は何と愚かのことよ」、「こいつらフランス人ときたら、自分らより大たわけ者だ」などと書いた。そして、「フランス人たちは、植民地化の才がなく、島の資源の開発でも幼稚な遊戯同然で徒労に終わっていたから、英国会社が成功するのを見てただただ喜んだ」と書いた。

この四人の白人の中に、善人、言い換えると、真面目で性格が良い人はいない。残酷な人でなしのドイツ人シェンメール、臆病の憲兵クリュショ、愚かなフランス人の裁判官、そして、荒唐な巡査部長がいるだけだ。これを見ると、ロンドンは残酷、愚か、臆病などといった白人の欠点を書いているだけだ。つまり彼は、当時の植民地の統治者や権力者たちの中国人に対する残酷で愚かな統治を暴露しているのだ。そして、この白人たちの愚かな統治と中国人に対する奴隷のような待遇により、「阿仇」は死に追いやられたのだ。その白人の差別的な考え方は、フランス人といいドイツ人といい、身分が高い白人といい身分が低い白人といい同じだ。ロンドン是一言でうまく表現できた。それは、「たかが中国人一人ではないか」(It was only a Chinago) という言葉や類似の表現がこの小説の中に計五回も出てくることでわかる。最初の一回目は、シェンメールの握りこぶしの一発で中国人人夫がひとり死んだ時だった。具体的内容としては「シェンメールとその恐るべき握りこぶしなど問題ではない。まあ、たかが中国人一人ではないか」というものだ。

二回目は、阿仇の判決が二十年懲役から死刑に変えられてしまう最初の原因に関わる。「ところで、たまたまこの裁判長は、前夜にフランスの軍艦の艦長と航海士たちに晩餐会を催していた。命令書を書きあげるときのその手は震え、目もものすごくずきずきと痛んでいた。命令書を読み返しもしなかった。どっちみち、自分が署名して渡すのは、たかが中国人一人の命じゃないか」と書かれている部分においてだ。

三回目は、憲兵のクリュショが思ったことである、阿仇を護送中に二人が会話している中で、フランス人憲兵クリュショは阿仇が間違っただけで死刑にされたことを察知した。ここでロンドンは

けれども、クリュショは思案していた。荷馬車を止めたことをすでに後悔していたのだ。裁判所の思い違いのことは知らなかったし、うまい解決法もなかった。が、はっきりとわかっていたのは、自分はこの中国人をアーティマオーノウまで連行せよとの命を受けたのだし、そうするのが自分の任務であるということだった。もしこいつが間違っただけで、こいつの首が切り落とされるとしたら、どうしよう？しよせん中国人一人にすぎないのだし、どうせ中国人なんてどうってこともないだろ(ジャック・ロンドン 辻井栄滋・森孝晴 訳 1999 : 132)

と書いた。

四回目は、ロンドンが悪魔と比喻しているシェンメールだ。もちろんこの悪魔シェンメールも間違いに気づいたときには完全に驚いたが、次にあるように阿仇を救おうとはしなかった。

シェンメールは驚いた。ほんのしばらく二言三言悪態をつき、わが手でこしらえ、動くのを見たくて仕方がない装置を残念そうに見やった。「いいですか」と、彼は断固として言う。「この仕事を延ばすわけにはいきません。その五百人の中国人たちの仕事をもう三時間分も無駄にしちまいましたぜ。ほんとに処刑されるもののためにもう一度何もかもやり直しなんてことはできやしません。やはりこの仕事を片づけてしましましょう。たかが中国人一人のことなんですから」。(ジャック・ロンドン 辻井栄滋・森孝晴 訳 1999 : 137)

このフランス白人はおおっぴらにそんなことを言った。最後は巡査部長とシェンメールが堂々と、間違っただのは自分ではないし阿仇が死んでも自分は責任を負わないと論じ、巡査部長は阿仇の命を救う最後のチャンスを逃してしまった。彼は「わかった、そのまますめろ。たかが中国人一人」と言いなつ。ロンドンはこの言葉を強調したかったに違いないが、ではこの言葉はどんな意味を表しているのだろう。これはわかりやすいことだ。タヒチの社会でフランス白人は中国人労働者を軽視し、更には、中国人労働者の命まで軽視していた。ここに見られる人種偏見はフランス人が作ったタヒチ社会にある。いわゆる、白人社会である。このような偏見は、当時の一般的に白人社会の中にある中国人に対する人種偏見と思われる、ロンドン自身の人種偏見ではないと言えよう。人種偏見によって白人がやったこれらのことは、白人の奇行としてロンドンは書いているので、彼はむしろこのようなことをやる白人は正しくないと考えていたと言えるだろう。フランス白人は、自分たちが犯したミスを知ってもこのミスを見逃して修正しない。これらは、当地を統治しているフランス人或いは白人の愚かさに対する皮肉な描写と考えられるだろう。そして、当時の中国の清政府は中国を治めることに必死だったので、国から出た中国人のことには清政府の影響は及ばないと白人も分かっていた。中国から出た中国人はまさに親のない子供のように可哀そうだ。そんな中、「たかが中国人一人ではないか」の一言で、間違っただけで中国人を殺しても何も罰を受けないとフランス人たちが考えていたことをロンドンはいまうまく表現している。1850年代には白人はタヒチにいる中国人労働者を奴隷扱いしていたことを暴いている。ロンドンが“The Chinago”を書かないと、当時、タヒチにいる中国人労働者

に強い人種偏見があったことが見過ごされてしまうだろう。しかし、ロンドンはこのよう  
なことを書き記して、当時の道徳のある白人にも反省を迫っている。

#### 6.6. 東洋思想と西洋思想の差—人種偏見が存在している一つの原因

ロンドンは次のようにいろいろな立場に立って、自分の考えを表明している。この考えは、  
当時の白人に人種偏見が存在していた原因を示していると考えられる、

こいつら白人どもときたら、わけがわからない。白人の不可解さについてあれこれ考えなが  
ら・・・これまでも白人どもに何人か会ってはいるが、どいつもみんな同じだ—たと  
えば船の航海士や水夫、フランス人の役員、シェンメールを始めとする農園の数人の白人  
たちといった連中だ。彼らの心はみないわくありげに働き、捕らまえどころがない。これ  
と言ったら原因もなく腹を立て、しかも、その怒りはいつも物騒だ。そんな時ときたら、  
野獣に似ている。ささいなことで悩むが、時には中国人以上に働くこともできる。中国人  
たちのように穏健ではない。大食漢で、食べる量ときたら並はずれており、飲む方はさら  
に度を越している。一つの行為がいつ彼らを喜ばせたり嵐のような怒りを起こしたりする  
ものなのか、中国人には皆目わからない。まるで予想がつかないのだ。あるときには喜ば  
せるものであっても、次の時には手の平を返したように激しい怒りを引き越すこともある。  
中国人の目で見れば、白人どもの目の奥には幕状の仕切りがあって、連中の精神状態の裏  
側を覆い隠してしまっているというわけだ・・・(ジャック・ロンドン・辻井・森 1999:122-123)

阿仇達は、フランス人が作った社会で生活しているが、フランス人（白人でもある）のこ  
とは理解できない。このことは阿仇達が「無表情」に判決を受け入れた、封建思想の影響  
以外にもう一つの原因だとも考えられるだろう。ここにも中国人と白人の比較描写がある。  
中国人より白人の方が仕事に関しては穏健ではないし、白人は大食漢でもあり、飲む方は  
さらに度を越しているし、そして、白人は哀楽が激しいであることをロンドンが書  
いた。もしロンドンに強い人種偏見があるなら、中国人が白人より優れているというよう  
なことを書かないだろう。だから、ロンドンはその時、中国人のことを以前よりもっと理  
解できるようになり、中国人に対する偏見がかなり弱くなってきたということがわかる。  
ロンドンは、白人と中国人には顔と文化の相違点があって、お互いがお互いを理解できな



いし、見分けさえしにくいことを強調するために、このような言葉を、次のようにさらに三回も使っている。

阿仇は、外国人どものわけわからない流儀とあれこれと考えてみた。が、どうにも説明がつかない。(ジャック・ロンドン・辻井・森 1999 : 133)

憲兵にしてみれば、中国人はどいつもこいつもみな同じように見えるのだ、どの顔も似たり寄ったりというわけだ。(ジャック・ロンドン・辻井・森 1999 : 131)

五名の中国人たちは、拘置所に連れ戻された。彼らは衝撃を受けてはいなかったし、嘆いてもいなかった。判決が思いがけないのであったのは、白人どもとのやり取りですっかり慣れていることであった。中国人は連中からつねづね、思いがけないことばかり予想していたのだ。自分たちが犯していない罪に対する重い処罰は、白人どもがやらかす無数の奇行と全く同様にわけの分からないものだ(ジャック・ロンドン・辻井・森 1999 : 125)

しかし、阿仇が処刑された原因に関しては、白人と中国人がお互いにお互いを理解できないことが確かに大きな理由になっていたが、お互いにお互いを理解できないだけが原因ではない。このように文化、習慣、顔さえ理解したり分別したりできないことは、人種偏見が存在する大きな原因になるとロンドンは考えていただろう。

ロンドンが子供の時に母親から受けた教えと彼自身の成育環境、読んだ本、受けた思想的影響など、そして、当時人種偏見が充満していたアメリカ社会からの影響もかかわって、ロンドンの価値観の中に人種偏見が形成されたと考えられる。人種差別をロンドンの思想から簡単に引き離すことができないのは当然だと考える。しかし、日露戦争取材した時に現実の中国社会を目にして、また、中国のことに興味を持って、中国についての本を読んで、そして、ハワイやタヒチに居た中国人の話聞いて、彼自身の中国文化と中国人への理解が深まり、それに応じて中国人への偏見が自然に弱まった、ということが“*The Chinago*”から読めるのだ。

アカデミー作品賞を受賞した作品『グリーン・ブック』の中で、人種偏見を持つイタリア系アメリカ人トニー・リップと黒人ピアニストのドクター・シャーリーは人種偏見が残っているアメリカ南部でのコンサートツアーをするが、トニー・リップは黒人への人種偏

見の思想の縛りから脱出して、ドクター・シャーリーと深い友情を結ぶ。トニー・リップの黒人への人種偏見が黒人との友情へと変化した原因は、二人が8週間に渡って旅をする中で黒人のことを理解し合っただけで人種偏見がなくなったからだと考えられる。人種偏見が発生する一つの原因は、その人種への理解不足だと思われる。ロンドンも同じで、最初まったく知らない段階で少しだけの理解によって誤解して“The Yellow Peril”を書いたが、“The Chinago”を書いた時にはもっと中国人についての理解が進んだために変化が起きた。

もちろん、“The Chinago”を書いた当時も、アメリカ社会の中には中国人への偏見が相変わらず強かったので、変化しているのはロンドン自身の方だと言える。確かにロンドン自身にも白人至上主義が残存していただろうし、“The Chingo”にもある程度人種偏見の言葉が書かれている。ロンドンの頭の中から一気にすべての人種偏見を全部追い出すことはできないからである。“The Chinago”の中の中国人の描写には一定の正確性があり、中国人が白人より優れているところもしっかり書かれているし、そして、さらに白人への皮肉な描写も見てみると、この時のロンドンには中国人についての認識が深まっている同時に、中国人への偏見が弱まっていると言える。

注

- 1) ロンドンが行った中国の現在の地名では**丹东**、**凤城**、**九连城**だ。
- 2) ここはラス・キングマンの『Jack London』を引用しているが、地名だけは Google map が表示される名前である。
- 3) 客家は 4 世紀初頭から 13 世紀初頭にかけて、黄河流域から南下して住み着いた漢民族。原住民と区別するため、「客家」と呼ばれる。現在では広東、福建、広西、湖南、台湾などの省に居住している。因みに、今のシンガポール大統領の家族みんな客家人だと言われている。
- 4) 阿仇に当たる現存した人の名前当地の名前と中国の本名。
- 5) 本論文が引用している“The Chinago”の日本語訳文は、全て辻井栄滋氏が翻訳した“支那人”からのものである。
- 6) 「華嚴経」は二世紀に始めて作られ、早い時期に中国に伝わってきた。この考えは中国の儒家思想に近いものであるので、中国人はそれを容易に受け入れた。
- 7) 王陽明の思想は日本の武士たちにも深く影響した。その代表人物は西郷隆盛である。
- 8) 「格物致知」の由来は「礼記・大学」の八目—格物、致知、誠意、正心、修身、齐家、治国、平天下—の始めの二つであり、「礼記・大学」は孔子の弟子曾参（前 505～前 434）によって作られた本である。年代が遠く離れているため格物致志の元々の解釈はなくなってしまう、「格物致知」の解釈については漢代から現代まで変わり続けてきた。
- 9) 儒家は中国の伝統思想として今も影響力がかなりある。中国の国宝だと言ってもいいほどの思想だと思うが、ただし、正しい解釈が必要である。もちろん、封建社会の儒家思想封建社会の国民を奴隷化する道具になった、という意味では、本当の儒家思想ではない。統治者は統治を有利に進めるためその一部だけを取り上げて利用するわけで、違う解釈をしたものを国民に教えて、国民の反抗心を無くすため使国民を愚かすものだ。
- 10) 時の清政府封建統治下の中国人のことである。
- 11) 鈴木大拙、つまり本名鈴木貞太郎のことである。
- 12) 道家は中国三大思想の一つ、老子が中国人に基づいて創立した思想であるので、中国人への影響が強い思想である。代表人物は老子と荘子、時には老荘思想とも称されている。

## 第7章 “Chun Ah Chun” から見るジャック・ロンドンの中国人観の変化

ジャック・ロンドンは短い人生の中でたくさんの作品を残しているが、そのたくさんの小説の中で主人公が現実に存在した人物である作品は多くない。しかし、今から分析する“Chun Ah Chun”はその中の一つである。この小説は *The House of pride & Other Tales of Hawaii* の中に納まっている。ところで、主人公の Chun Ah Chun は実在したのである。本当の名前は「陳芳」と言い、英語名は Chun Afong であって、中国で生まれ育ち、ハワイで事業を切り拓いた。第1章において Chun Ah Chun と Chun Afong をモデルにしていることについて詳しく紹介したので、ここでは詳しく論じないが、以上のことだけを確認しておきたい。

今まで分析して来たロンドンの中国人もの小説の主人公では、“White and Yellow” と “Yellow Handkerchief” における Yellow Handkerchief とその仲間や、“The Chinago” の中の Ah Chou と彼の仲間は、社会の最下層の中国人であったが、Chun Ah Chun はそれと違ってハワイのエリート中のトップであった。詳しく言うと、ハワイ王国の部長と初代清王朝駐ハワイ大使を務めた人物である。そうすると、描く相手の違いによって、いつもと違う中国人像があらわれて来るのであろう。ここでその新しい中国人像を明らかにし、それによるロンドンの中国人への偏見の変化を追及したい。また、ロンドンのこの小説を書く目的について、具体的な内容に基づいて解釈したい。最後に、現存した「陳芳」のことを調べ、Chun Ah Chun と比較して、両者の異なるところを分析し、Chun Ah Chun を書いた時にロンドンが中国人に対するどんな見方を持っていたかを分析したいと考えている。そうすることで、この小説においてロンドンが表現したいこと、そして、当時（1908年）のジャック・ロンドンの中国人観が明らかになると考える。

### 7.1. ロンドンの新しい中国人像

ロンドンが今まで書いた中国人像には、“White and Yellow” と “Yellow Handkerchief” の中の怖くて、醜い中国人像がある、“The Unparalleled Invasion” の中には完全に存在感がない無感情な中国人像がある、“The Chinago” の中には、性格はいいが、奴隷根性が残る中国人像もある。“Chun Ah Chun” にはそれらと違って斬新な中国人像が現れた。商人としての Chun Ah Chun は不法の漁師や農園の出稼ぎ者と根本的な違いがあるが、ロンド

ンが中国人商人を描いたことは、彼の頭の中に一つの新しい中国人像が形成されたのだと考える。この斬新な中国人像について、小説の中の描写を分析して、ロンドンの新しい中国人像を具体化したいと考えている。

#### 7.1.1. 目立たない中国人商人

この小説は Chun Ah Chun の外観描写から始まっている。この外観によって、どんな中国人像が見えてくるだろう。まず、ロンドンが描いた Ah Chun の外観を分析したい。

There was nothing striking in the appearance of Chun Ah Chun. He was rather undersized, as Chinese go, and the Chinese narrow shoulders and sparseness of flesh were his.....Ah Chun had shrewd little eyes, black and beady and so very little that they were like gimlet holes. But they were wide apart, and they sheltered under a forehead that was patently the forehead of a thinker. (Jack London 1984:151-152)

これは単に Ah Chun の描写ではなく、ロンドンの持つ中国人のイメージの一つでもあると考えられる。このイメージの中では、中国人はやや小柄であり、肩は狭く体は痩せているのである。これは元気なイメージではないが、「陳芳」の写真を見ると、実在する「陳芳」の事実に沿っているのが、客観的な事実である。顔については、鋭い目と思想家の額を持っている、鋭い目には普通の人間には見えないものが見えるし、思想家の額には知恵があると考えられる。ここはロンドンが勝手に思ったところであるので、彼の主観的な想像となる客観事実より主観想像（主観意識）の方がロンドンの内心を表している。ロンドンが勝手に思ったことではあるが、鋭い目と思想家の額というよりよい中国人像が現れて来た。忠実に「陳芳」の外観を書いた後にロンドンがよりよい描写を得たことを考えると、彼の中国人に対する人種偏見がそこに表れているとは考えにくい。少なくとも、ロンドンが生きていた時代の一般白人より彼の偏見の度合いはかなり低くなっただろう。

#### 7.1.2. 信用できる誠実な人

次に注目したいところは、ロンドンが Ah Chun を信用できる誠実な人に描いたところである。

And, finally, Ah Chun was a paragon and an honest business man. Despite the fact that business morality was higher than on the mainland, Ah Chun outshone the business men of Honolulu in the scrupulous rigidity of his honesty. (Jack London 1984:169-170)

ロンドンが全力を尽くして、Ah Chun を信用できる誠実な人に描いたと言える。ロンドンの描写による Ah Chun は、信用できる商人の中でも真っ先に挙げられるべき人である。人種偏見を持つ作家は偏見を持たれる側の相手についてこのような描き方をしないだろう。信用できる誠実な人の描写と頭がいいことを描いたことには違いがある。頭がいいことを描くと、それを悪用すれば悪人になる。例えば「傳満州」<sup>1)</sup>である。しかし、信用できる誠実な人となると道徳の頂点に立つことになる、そこには非の打ちどころがないと思う。ここを見るとロンドンの中国人への偏見は全く見えないし、より客観的に中国人のことを描いたと言える。ロンドンが、中国人の中にはそういう信用できる誠実な人がいる、つまり、道徳が高尚な中国人がいると認識したということになる。一体どの程度信用できるのかについては、ロンドンは以下のように具体的な例を挙げた。

It was a saying that his word was as good as his bond. His signature was never needed to bind him. He never broke his word. Twenty years after Hotchkiss, of Hotchkiss, Morterson Company, died, they found among mislaid papers a memorandum of a loan of thirty thousand dollars to Ah Chun ... There was no note, no legal claim against him, but he settled in full with the Hotchkiss' Estate, voluntarily paying a compound interest that dwarfed the principal. Likewise, when he verbally guaranteed the disastrous Kakiku Ditch Scheme, at a time when the least sanguine did not dream a guarantee necessary — “Signed his check for two hundred thousand without a quiver, gentlemen, without a quiver,” was the report of the secretary of the defunct enterprise, who had been sent on the forlorn hope of finding out Ah Chun's intentions. (Jack London 1984:170-171)

ここでロンドンは二つの例を挙げた、一つ目は、ホッチキスの会社が Ah Chun に対して与えた、三万ドルの貸付金の覚え書きが見つかったことだ。その覚え書は20年も前のもので、Ah Chun にとって不利な法的請求はなかったものの、彼は全額と複利まで支払った。二つ

目は、Ah Chun は口頭で保証しただけなのに、躊躇なくその会社に対する二十万ドルの小切手に署名したことだ。ロンドンが描いた Ah Chun の信用度は余程高いものと思える。この高い評価の相手は中国人 Ah Chun である。ということは、中国人には誠実な一面もあるとロンドンが認識できたのだと考える。信用できる人とは、換言すると責任感が強い人となる。約束に対する責任感だけではなく、家庭にも強い責任感を持っている。Ah Chun は、家庭の問題が生じてその溝を埋められない時、故郷に戻ると決心したものの、すぐには帰らなかった、娘たちを結婚させてからマカオに戻るというストーリーをロndonは描いた。

ロンドンがこのように変化できたのは、一気に進歩したわけではなく、その前に、“The Yellow Peril” の中でも彼が中国人商人は誠実であると書いた。しかし、そのころのロンドンには中国人が白人の脅威だと強く主張していたわけで、中国人商人の誠実なところは白人の真似であると書いた。中国人の優れたところは白人にとっては脅威であって、それは中国人脅威論に繋がっていた。“Chun Ah Chun”の時点のロンドンはそのより成長したのだ。中国人商人の誠実さを描いた時、それは白人の脅威としてではなく、他の企業を手伝った人物として描いた。商業道德の高い中国人商人は白人の脅威であるというふうには描いていないので、ロンドンがより客観的な中国人像を書けたと思われる。

### 7.1.3. 能力が高い商人

能力が高いことは Ah Chun が成功した原因である。ロンドンの筆下の Ah Chun は能力が非常に高い。具体的には観察力及び学習能力と冷静に物事を考える能力、または、予測能力として表現されている。ロndonは以下のようにいくつかのことを描いた。

Ah Chun was observant. He perceived little details that not one man in a thousand ever noticed. Three years he works in the field, at the end of which time he knew more about cane-growing than the overseers or even the superintendent, while the superintendent would have been astounded at the knowledge the weazened little coolie possessed of the reduction processes in the mill.

— 中略 —

Ah Chun hired out as cook. He was a good cook, and in three years he was the highest-paid chef in Honolulu. ... There were boom times in Hawaii. Sugar was being extensively planted, and labor was needed. Ah Chun saw the chance, and went into the

labor-importing business. He brought thousands of Cantonese coolie into Hawaii, and his wealth began to grow. ... He did not talk for publication, but he forecast events more clearly and farther ahead than did the men who engineered them. In his mind's eye he saw Honolulu a modern, electric-lighted city at a time when it straggled, unkempt and sand-tormented, over a barren reef of uplifted coral rock. So he bought land. (Jack London 1984:154-157)

Ah Chun は農園で働いたときから身の回りのことに注意深く、要領もいいし、未来のことについても正しく予測できた。Ah Chun はこれらの能力があったからこそ成功ができた。そして、彼は、穏やかな性格で、家庭の問題があっても怒ったりは決してしなかった。冷静に物事を考えてから一番いい解決方法を導いた。このような能力は、中国人であれ、白人であれ誰もが持てるわけではない。実在した「陳芳」は能力が高いと思うが、そこまで能力が高い超人のような頭脳を持っていたとは思えない。実在した「陳芳」は個人より人と組むのは上手である。店の経営をした時も、中国人の労働者をハワイに輸入した時も、アヘンの経営をした時もパートナーと共にやっていた。この小説の中でロンドンが中国人 Ah Chun に超人的な頭脳を付与した。ロンドンの作品を読んでもこのような超人的な能力を持つ主人公の小説がたくさんある<sup>2)</sup>が、彼らは基本的に白人である。ここで中国人 Ah Chun にこのような待遇を与えたことは異例で驚くべきことだ。この背後には、ロンドンの中国人に対する人種偏見があまり残存していないことがあると言える。

以上をまとめて見ると、ロンドンがこれまでよりよい中国人像を描いた。つまり、外観から見ると彼は、金銭的には余裕がある人物だが、百万長者には全く見えないし、目立たない控え目な人だ。世間の評判を聴くと、彼は信用できる誠実な人であるし、家庭にも責任感が強い。Ah Chun が行ったことを見てみると、彼は頭が抜群によく、超人的な知恵を持っている人である。ロンドンがこのような中国人像を持っていたことを考えると、この時のロンドンには中国人への偏見があまり残されていなかったと推測できよう。

## 7.2. ロンドンが描いた主人公 Chun Ah Chun の家庭問題の真意

Chun Ah Chun の家庭問題をまとめるとそれは三つある、つまり、西洋の教育を受けた子供と中国文化の影響が強い Ah Chun の生活習慣上の差異、Ah Chun の娘たちの結婚問



題、家族が与えられない Ah Chun が望んだ老後生活である。この三つの問題が Ah Chun のストーリーを展開させた。ここでこの三つの問題を分析し、その問題に対する Ah Chun の解決方法と問題の本質を探り、そして、ロンドンがこの三つの問題を描いた意図にまで迫り、そのことにより、中国人に対する彼の人種偏見の変化を明白にしたい。

### 7.2.1. 生活習慣上の問題

全ての問題は子供の教育に起因している。Ah Chun は子供の教育について気前がよかつたし、ハワイで身代を築いた彼は西洋教育を拒むこともなく、しかも、積極的に子供をアメリカやヨーロッパの名門校に送り出した。

Ah Chun had been liberal in the matter of education. “Never mind expense,” ... And so with his sons and daughters. It had been for them to get the education and never mind the expense. Harvard, the eldest-born, had gone to Harvard and Oxford; Albert and Charles had gone through Yale in the same classes... (Jack London 1984:164-165)

ロンドンが書いたように Ah Chun は子供の教育には金を惜しまず、熱心だった。教育に熱心であることは、儒家教育を受けた中国人、特にエリート層にとっては一般的なことである。もう一つの儒家思想を受けた日本人も子供の教育にとっても熱心である。ロンドンの日本人もの短編小説 “Sakaicho, Hona Asi and Hakadaki” の中では、人力車夫である Sakaicho はわずかな給料で彼の子供をアメリカに留学させたい人物としてロンドンは描いている。儒家思想の影響の下で中国人や日本人が子供の教育に熱心であることを、ロンドンは正確に捉えていると考えられる。

西洋教育を受けた Ah Chun の娘たちがハワイに戻って来た後、娘たちは彼の生活に干渉しようとした。具体的には、ロンドンはこの小説の中で二つの出来事を描いた。一つ目は、妻と子供たちが次のように勝手に Ah Chun の名前を、A'Chun さらに Achun にまで変えた<sup>3)</sup>。

Of course, his children were not known as the Ah Chun children. Mama Ah Chun had spelled it A'Chun, but her wiser offspring had elided the apostrophe and spelled it Achun. (Jack London 1984:165-166)

つまり、子供たちが Ah Chun の子供だという事実を他人に知られたくないので、Ah Chun の名前を変えたのだ。百万長者 Ah Chun も当初はクーリーだった。当時白人社会では優生学が流行していて、お金があっても出身或いは血筋が良くない家族は差別されていた。その差別を避けるため、Ah Chun の子供たちは苦力出身の父親がいることを知られたくないのだ。これは、白人社会において出身を重視する結果だと思われる。もちろん、Ah Chun はこのことを見透かしたが、自分の生活にあまり影響がなかったため子供たちのすることを放任した。二つ目は、子供たちが次のように Ah Chun の服装を変えようとしたことだ。

But when his children arose to the height of a starched shirt, a stiff collar, and a frock coat, Ah Chun would have none of it. He preferred the loose-flowing robes of China, and neither could they cajole nor bully him into making the change. (Jack London 1984:166)

しかし、今回は Ah Chun がこのことを拒否した。Ah Chun の日常生活に支障が出たからだ。遂に、妻と子どもたちは一緒になって、白人社会で度々行われたボイコットを、家の中で Ah Chun に対して実施した。それに対して長年ハワイの上流社会で生きてきた Ah Chun には彼なりのやり方があった。つまり、反抗する子供たちと過ちを犯している配偶者に締め出しをくらわした。何十人という召使いを解雇し、持ち家を閉鎖し、ホテルに移り住むというような対応をした。召使いに慣れていた妻と子どもたちのボイコットは失敗した。その後、Ah Chun はその多くの召使いとともに家に戻ってきた。それからの Ah Chun はこれまでと変わらなかったが、妻と子どもたちは何の疑問の声も上げなかった。

この Ah Chun の家で起こった問題は単なる家族問題ではなかった。その背後にあるのは妻と子供たちが持つ西洋文化と Ah Chun が持つ中国文化の衝突である。家族愛を持ってしてもこの異文化の溝を超えられないこと、これこそは、ロンドンがこの Ah Chun の親子問題によって描きたかった最大のポイントだと考える。この小説の中には次のような文もある。

But Ah Chun saw the problem more clearly than they. No one knew as he knew the extent to which he was an alien in his family. (Jack London 1984:169-170)

つまり、Ah Chun は家族の中で異質な存在だということである。Ah Chun の知恵で彼の生活習慣を守りながら、何とかこの問題を解決したものの、次の問題が出て来た。

### 7.2.2. Ah Chun の娘たちの結婚問題

Ah Chun の二つ目の家族問題は彼の娘たちの結婚問題である。小説のこの部分は筆者を一番魅了したところだ。この問題を詳しく論じる前に一つ重要なことを言わなければならない。それは、Ah Chun の子供たちが混血だという問題である。ロンドン Ah Chun の子供たちの血筋を詳細に分析し、しかも、それを小説の中に 3 回も描いた。

Thus, his children by Mrs. Ah Chun were one thirty-second Polynesian one-sixteenth Italian, one-sixteenth Portuguese, one-half Chinese, and eleven thirty-seconds English and American. (Jack London 1984:160)

アングロ・サクソンの血統はロンドンの誇りであるので、ロndon は純血主義者とも言える。しかし、Ah Chun の子供には幾つかの血統が混じっている、ロンドン はそれをしっかりと書き分けていた。彼は血統と言うものに興味を持っていたと言えるし、そして、血統と繋がる人種問題にも興味があるといえる。その興味によってロンドンがもっと人種のことを知りたいという気持ちを持ったことは彼の中国人に対する偏見の変化に関係があると思われる。Ah Chun の娘たちの混血が原因で彼女たちの結婚問題が惹き起こされている。原文ではこう書かれている。

“Our daughters are beautiful women”he said to his wife, one evening“There are many young men, The house is always full of young man, My cigar bills are very heavy, Why are there no marriages?” ... “Ah, they like them well enough”Mama Achun answered; “but you see, they cannot forget that you are your daughters’ father.”“The young men are more particular.”“There is that Captain Higginson, He seems to like Henrietta.”Achun said .“He will never marry her.”retorted Mama Achun “He will be an admiral before he dies-”“His family in the United States is a high one. They would not like it if he married...if he did not marry an American girl.” (Jack London 1984:

まず、Ah Chun の妻が言おうとして言い換えたところを補ってみたい。前後の文を読んでも、They would not like it if he married (with your daughter) となる可能性が非常に高いと思われる。つまり、中国人のハーフとは絶対に結婚しないということであろう。当時、アメリカのエリートはロンドンと同じ純血主義者がほとんどであった。彼らの結婚相手はアメリカの白人女性で、Ah Chun の娘たちのように混血の女性、特に、中国人の血統が半分を占めている女性はいくら美人で教養が高くても、いくら好きになってもアメリカのエリート層の結婚相手になることはできない。ここで、ロンドンは当時のアメリカの白人社会における中国人に対する人種偏見について表現しているのだ。このアメリカにおける中国人に対する人種偏見は Ah Chun が直面する二つ目の家族問題の真実である。それは超えられないような問題であるが、Ah Chun は今まで積んできた経験を生かし、この問題を解決した。Ah Chun は、妻にまるで関係がないような問題を尋ねて、次のように議論した。

“What is the greatest thing in the world?” Ah Chun demanded with abrupt irrelevance. Mama Achun pondered for a moment, then replied: “God.”

He nodded. “There are gods and gods. Some are paper, some are wood, some are bronze. I use a small one in the office for a paper-weight. In the Bishop Museum are many gods of coral rock and lavastone.”

— 中略 —

“What is greater than God, then?” he asked. “I will tell you. It is money. In my time I have had dealings with Jews and Christians, Mohammedans and Buddhists, and with little black men from the Solomons and New Guinea who carried their god about them, wrapped in oiled paper. They possessed various gods, these men, but they all worshipped money. There is that Captain Higginson. He seems to like Henrietta.” (Jack London 1984:

ここでロンドン、Ah Chun と妻の会話を使って god と money を比較した。中国人商人 Ah Chun と妻の観点は分かれている。つまり、中国人の考えを代表する Ah Chun の観点は “the greatest thing is money” であり、一方、白人の考えを代表する妻の観点は “the

greatest thing is god”となる。お金の力は神を超えるかどうかについて、Ah Chun は娘たちの婚姻問題と結びつけて実践した。つまり、長女 Henrietta と結婚する者に三十万ドルを提供することにしたのだ。

結局、白人のエリートたちは彼らの信仰や血統への固執を忘れてしまった。“His family in the United States is a high one. They would not like it if he married...if he did not marry an American girl.”という人種偏見を持っていたはずのアメリカの名門出身の Captain Higginson は、自分の海軍少将という身分と名門の出であることを忘れ、三十万ドルを手に入れるために中国人の血統を半分持っている Ah Chun の娘と結婚した。アメリカの名門出身の Captain Higginson が持っている人種偏見は、中国人商人 Ah Chun の三十万ドルに負けた。お金が人種偏見を超えたということは、アメリカの人種偏見に対するロンドンの皮肉に他ならない。今まで偏見をもたれて来た中国人のやり方で、白人のエリート層を屈服させることを描くのは、皮肉を利かせた風刺である。

ロンドンはより一層その皮肉を描いた。“Ah Chun’s munificence had its effect. His daughter became suddenly eligible and desirable”<sup>4)</sup>とあるように、次々と Ah Chun の婿になったのは「準州長官」、「アメリカ移民局弁務官」「前連邦判事」など、人種偏見を強く持っていたアメリカのエリート達であった。しかも、その相場は、三十万ドルよりもっと少ない二十万ドルだったり、最後には十万ドルにもなった。これは強い人種偏見を持っているアメリカのエリート層に対する風刺である。白人社会は見た目からするとキリスト教が支配しているが、実は、お金が支配する金銭社会である。白人の誠実でない一面がここに表れた、つまり、“The Yellow Peril”の中にも書かれているように、神は彼らの背後にいるのだ。彼らは人種の頂点に立っているように見えるが、実際は、ただの拝金主義者である。

Ah Chun は人間の拝金主義を見透かし、次のようにロンドンはがそれを軽蔑するような描き方も用いた。

“He will never marry her,” retorted Mama Achun. “He will be an admiral before he dies”

“A rear admiral,” Ah Chun interpolated. “Yes, I know. That is the way they retire.

“His family in the United States is a high one. They would not like it if he married...if he did not marry an American girl.”(Jack London 1984:178-179)

ロンドンが描いた Ah Chun の言葉には白人社会の誠実でない一面への皮肉が含まれている。彼は “A rear admiral, high one family, must be marry an American girl” と言っているし、そして大金を投じれば、どんな偏見を持ったアメリカ人も服従するだろうと考えている。ロンドンはこの社会が拝金主義なのだということを見極めていた。一方、当時外国にいる中国人の目的は出稼ぎがほとんどで、お金のためにやって来ていた。そして、中国には「有钱能使鬼推磨」<sup>5)</sup> という諺もある。商人である Ah Chun が金銭の力をよく知っていることが、現実に沿って描かれていると考えられる。

白人社会を風刺していることから、ロンドンの人種偏見が弱まっていたことを示している。もしロンドンが中国人に対して強い人種偏見を持っていたなら、中国人を使って白人社会を風刺することはできなかつただろう。

### 7.2.3. Ah Chun が望んだ老後生活

ハワイで家族と平穏な生活をするを、もちろん Ah Chun は望んだが、現実では不可能であった。Ah Chun の身近に次のような一つの不可能な例があった。

But he knew that with his immense fortune peace and repose could not possible be his. Already there were signs and omens. He had seen similar troubles before. There was his old employer, Dantin, whose children had wrested from him, by due process of law, the management of his property, having the Court appoint guardians to administer it for him. Ah Chun knew, and knew thoroughly well, that had Dantin been a poor man, it would have been found that he could quite rationally manage his own affairs. And old Dantin had had only three children and half a million, while he, Chun Ah Chun, had fifteen children and no one but himself knew how many millions. (Jack London 1984:175-176)

Dantin の場合持っていたのはただの五十万ドルと 3 人の子供だけしかなかったが、財産の奪い合いがひどかった。Ah Chun は何百万ドルの大金を持ち、子供が 15 人もいるので、その財産の奪い合い競争は想像するだけで怖くなるだろう。Ah Chun は晩年には、平穏な生活を送るためにハワイを離れ故郷に帰る決心をした。ロンドンがここで描こうとしたこ

とは白人の金銭社会がその一つで、中国人と白人の道德感の違いがもう一つだ。中国人に影響が強い儒家では親孝行は道德の首位にある<sup>6)</sup>ので、したがって、中国の家庭では Ah Chun の家のような問題はほとんど生じない。親が亡くなってからの財産の奪い合いはもちろんあるが、生前からの財産の奪い合いは少ない。親を悲しませるからだ。無論、白人にも親孝行の思想があるが、中国人ほどではないと私は考えている。とはいえ、Ah Chun が追求していた静かで落ち着いている老後は、ハワイの白人の金銭社会では中国人と違う道德観のために実現できないのだ。残った道は、中国に帰るしかない。実は、早い段階で Ah Chun がこのことに気づいて計画を作っていた。Ah Chun の一番大きな願望として、娘たちを結婚させた後、いよいよ帰る時が来た。

Ah Chun was now ready to crack the nut of the problem. One fine morning when the family was at breakfast—he had seen to it that all his sons-in-law and their wives were present—he announced that he was returning to his ancestral soil. (Jack London 1984:184-185)

これで Ah Chun は中国に戻った。Ah Chun は家族の紛争から抜け出して、安楽や静かな生活をしたが、それは、一番幸せな老後ではない。やはり、妻と子供たちが身の回りに付き添ったほうがより幸せになれるが、白人社会では、それはできない。家族愛は人種の溝を越えられない。金銭は一定程度の人種偏見を超えるが、完全に人種の間を越えることができないのだ。

以上は、ロンドンが描いた Ah Chun の家族の問題である。ロndonは Ah Chun の家族の問題を描いたが、本質的には白人と中国人の間の人種問題を描いた。この小説を書いた時、ロndonは人種問題を解決することはできないと考えていたのだろう。それは最後に、Ah Chun が中国に帰らなければならないことを描いたからだ。しかし、人種問題イコール人種偏見ではなく、小説の中で Ah Chun の娘たちが無事に結婚できたことは、ロndonが人種偏見を越えた証である。人種問題の正体に直面し、彼の人種偏見がかなり弱まっていたことがわかる。

### 7.3. Ah Chun と実在した Afong の対比から見るロndonの中国人に対する偏見

小説の流れにとっての必要性和ロンドンがこの小説を通じて表現したいことがあるので、Ah Chun と実在した Afong の間に食い違うところが生じることは当然である。例えば、Afong が中国で一回結婚したことがあることにロンドンは自分の小説の中で全く触れなかった。Ah Chun がレストランで働いた経験があることについては、実在した Afong にはそのような経験がなかった。このような違いがあつて、小説の流れにとっての必要性以外に何かが含まれている可能性がある。それは中国人に対する人種偏見であるのかどうか分析したい。

### 7.3.1. 出身の違い

両者には違う所がいくつかある。まず、ロンドンが小説の最初の所で Ah Chun の出身を紹介していたが、この点については次のように実在した「陳芳」の出身と大きく食い違う。

Ah Chun did not remember his father, a small farmer in a district not far from Canton; nor did remember much of his mother, who had died when he was six. But he did remember his respected uncle, Ah Kow, for him had he served as a slave from his sixth year to his twenty-fourth. It was then that he escaped by contracting himself as a coolie to labor for three years on the sugar plantations of Hawaii for fifty cents a day. (Jack London 1984:153)

Chun Afong was born in 1825. His father, Chun Cheong, a farmer, died when Afong was fourteen. He had two older brothers and four sisters. When he sailed for Hawaii, he left his wife, Lee Hong, to live with his mother, Tsum Yun.

— 中略 —

With so many people coming and going, it was noticed when anyone took up permanent residence in Honolulu, especially when the newcomer wore a queue and dressed in the elegant style of a wealthy Chinese merchant. There were only about a hundred Chinese in the entire kingdom when Afong arrived. He was in his midtwenties, of average height and sparingly built; it was his piercing black eyes that people remembered. (Robert Paul Dye 2010:23)



上の二つの引用を比較してみると、大きな食い違いがわかる。ロンドンが、Ah Chun が父親のことを全く覚えていないし、母親は彼の 6 歳の時に亡くなったため母親に対する記憶がぼんやりしていると書いている。6 歳から 24 歳まで叔父さんの所で奴隷のように扱われていた Ah Chun はそこから逃げ、ハワイのきび砂糖農園で働き、三年の契約が終了した後、阿楊と共に店を開いたが、実際の Afong は 14 歳まで功名のために勉強していて、科挙にも参加したと言われている<sup>7)</sup>。その後、父親が亡くなると、生計を立てるため叔父さんの所で働き始めた。Afong の上に兄が二人いて、姉妹は四人もいる。24 歳の時、叔父さんと共にハワイに行って叔父さんの店で働き、結婚もしたし、母親もまた健在であった。Afong は叔父さんに奴隷のように扱われたこともなければ、きび砂糖農園で苦力として働いたこともない。

ロンドンの小説が現実の話と大きく食い違った原因の一つ目は、彼は実在した Afong について詳しいことを知らなかった可能性があることだ。David Mike Hamilton の *The Tools of My Trade* によると<sup>8)</sup>、ロンドンは“Chun Ah Chun”を書く前に *ALO’HA!’ A HAWAIIAN SALUTATION* を読んだ。この本には Afong のハワイでのことを書かれていたが、具体的な出身のことは書かれていないのだ。二つ目は、小説の流れにとっての必要性である。かわいそうな出身、または、奴隷のように扱われて農園で働いたことと後で百万長者になったことの間には、かなりのギャップが存在していて、小説の方はストーリー性が出てくる。また、Ah Chun のような低い出身だからこそ、彼の娘達が彼の娘だと知られたくないのだ、ストーリー全体との関連性を考えてみれば、主人公 Ah Chun の低い出身はこの小説として重要である。ロンドンが Ah Chun のことを上のよう書いた主な原因は、実在した Afong について詳しいことを知らなかった上に、ストーリーの必要性もあったと考えられ、そこには中国人に対する偏見は関係がないようだ。Ah Chun はレストランで働いた経験があるが、Afong はこのような経験がなかったことは特にそうである。ロンドンは、Ah Chun が働いたレストランのオーナー Dantin の家族の問題を描きたかったのだろう。

### 7.3.2. 結末の違い

もう一つ大きく食い違ったところは、二人の結末である。ロンドンは次のような結末を描いた。

But the little old man was not bound for Canton. He knew his own country too well, and

the squeeze of the Mandarins, to venture into it with the tidy bulk of wealth that remained to him. He went to Macao. (P.186)

Within two months of his son's death, Afong reorganized his Pepeekeo sugar company with a capital stock of \$2,125,000, and in October he sold a part interest to a Honolulu businessman, Alexander Young.

—中略—

He sailed from Hawaii for the last time on October 17, 1890. Afong boarded his ship off the Waimanalo coast. (Robert Paul Dye 2010:31-32)

この二つの文を比較してみると、Ah Chun の帰国は彼の家庭の問題、つまり、人種間の問題は可解不能であるため、彼は止むを得ずに帰ったのだ。実際の話としては、Afong のしっかりしている長男が死んでしまい、次男はプレイボーイで事業を任せられず、そして、年を取って、ハワイでさらに事業を広げる原動力を失ったため帰国したのだ。ロンドンがこの小説を書いた目的は、白人の拝金主義の暴露と人種の間の問題は超えられないということの示唆である。もし現実にあった話に忠実に書くとその目的を達することができなかつたのだ。そして、ロンドンが描いた Ah Chun の帰った場所は本当の故郷ではなく、白人が統治していたマカオであり、つまり、妻や子供とは遠く離れた、そして故郷に近い白人社会である。実際は Afong が中国に帰る時には、本当の故郷である広東の梅溪に帰った。今でも「陳芳故居」という建物が残っていて、彼は清王朝に貢献したので、清政府が彼のために「牌坊」を三つも建てた。ここではロンドンが中国に対する偏見を持っていることが感じられるが、中国に対する偏見というより、黄色人種と白色人種の間では理解し合えないことを描きたかったと考えられる。一度白人社会に入った Ah Chun は二度と中国の故郷に帰れないということを描きたかったのだろう。

以上を見ると、Ah Chun と Afong の間に大きな食い違いが発生した原因は、既に述べたように、Afong についてロンドンは詳しくは知らなかった上に、ストーリー上の重要性もあったため、中国人に対する偏見ではないと考えられる。特に、最後のところに白人ホテルの買収事件を描いたことは注目に値する。このことは白人にとって不利なことである。つまり、偏見にさらされた Ah Chun がもう一回お金を使う事により人種偏見を超えたのである。ロンドンが再三にわたって中国人に対する人種偏見を超えるようなことを描けた理

由は、彼の中にあまり中国人に対する偏見が残されていなかったからだろう。

ロンドンはこの小説を通じて新しい中国人像を描き出した。つまり、目立たない控え目な人、信用できる誠実な人、頭が抜群によい人である。したがって、ロンドンの中国人に対する偏見はかなり弱まったように見える。そして、この小説の内容を見てみると、本質的には白人と中国人の間の人種問題を描いたのだ。Ah Chunの娘の結婚問題を通じて、白人社会にある人種偏見を描いた。Ah Chunの娘たちが無事に結婚できたことにより、白人の金銭社会を風刺し、人種偏見は超えられないものではないことを証明した。Ah Chunの結末により、より小さな人種偏見は超えられたが、人種問題そのものはなかなか解決できないということをロンドンは描いた。ここで、人種問題と人種偏見を分けて考えたことはロンドンの大きな進歩だと思う。つまり、ロンドンの人種偏見がかなり弱まっていたことがわかる。ロンドンがこのように進歩ができたのは、彼のスナーク号の旅と分けて考えることはできないのだ。この旅の中でハワイに長く滞在したことは、彼の中国人に対する偏見が大きく変化したことと深く繋がっている。そして、ロンドンが読んだ *ALOHA!" A HAWAIIAN SALUTATION*の中には中国人のいいところがたくさん書かれているので、この本が、彼の新しくて、よりよい中国人像の形成を助けたと考えられる。

注

- 1) 傅満州博士とは、イギリスの作家 Sax Rohmer が彼の小説 *The Mystery of Dr. Fu Manchu* の中で創造した架空の中国人。西欧による支配体制の破壊を目指して陰謀をめぐらす悪人。
- 2) 『太陽の子』、『マーティン・イーデン』、『海の狼』等々の主人公たちのことを指す。
- 3) このような変化の理由は、西洋人の名前に近づくためとみなされる。
- 4) Jack London 1984, *Jack London's Tales of Hawaii*, p181
- 5) 日本語では“地獄の沙汰も金次第”を意味する。
- 6) 中国の諺「百善孝為先」がある。日本語では「百の善行があっても、親孝行がその首位にある」ことだ。
- 7) Robert Paul Dye “Merchant Prince Chun Afong in Hawai'i, 1849-90” *Chinese America: History and Perspectives* 2010, p23.
- 8) David Mike Hamilton 1986, *The Tools of My Trade Annotated Books in Jack London's Library*, p86.

## 第8章 “The Yellow Peril” と “If Japan Wakens China” から見る

### ロンドンの中国人観の変化

最初の章でこの二つのエッセーを簡単に紹介したが、“The Yellow Peril”は1904年日露戦争の時中国で書かれたもので、“If Japan Wakens China”は1909年スナーク号の旅が終わって、カリフォルニアの農園グレン・エレンに戻ってから書いたエッセーである。二つのエッセーの間に約5年が経過した。ロンドンはずいぶん5年が過ぎた後に、近い内容のエッセーを書いたのか。5年が過ぎた後、ロンドンの黄色人種への偏見は変化したのか。二つのエッセーの内容を比較し、併せて、この5年間の作品、とりわけ中国人もの作品の変化を分析し、そして、この5年間の経緯も調べて、ロンドンのアジア人観、特に中国人観の変化を探りたい。

#### 8.1. 二つのエッセーの内容の比較

ロンドンは近い内容のエッセーを二つも書いた。しかし、その内容がいくら近いと言っても、その間には必ず変化がある。全く変化のないエッセーを二つも書く必要はなかっただろう。その内容から彼の中国人と日本人観の変化を見ることは一番重要なことなので、まず、この二つのエッセーの内容を分析してその変化を明らかにしたい。

##### 8.1.1. 仮説的な表現が多い “If Japan Wakens China”

まず、この二つのエッセーのテーマに注目したいと思う。“The Yellow Peril”では、肯定的な表現が多い。ロンドンが書いたものは、当然彼がその時に思っていたことである。つまりその時のロンドンは白色人種にとって中国人は黄色い脅威であると考えていたのだろう。これを強調するため、直接的に“The Yellow Peril”をテーマにしたと考えられる。しかし、“If Japan Wakens China”には仮説的な表現も多い。『ジャック・ロンドン名論卓説集』の中で森孝晴はこのエッセーのタイトルを「もし日本が中国を目覚めさせたら」と翻訳した。つまりロンドンは、日本が中国を目覚めさせることを肯定できないので、一つの可能性としてこのエッセーを書いた。無論、未来のことについては誰も言い切れないので、ロンドンが“If Japan Wakens China”をテーマにしたことは“The Yellow Peril”より適切だと思う。これに対して、“The Yellow Peril”には、かなり彼の当時の感情、即ち日本

人に対する嫌悪感と中国人に対する不信感が入っていると思われる。逆に、“If Japan Wakens China”を書いた時には、より冷静に考えたため客観的な視点が出て来たのだと考えられる。従って、ロンドンの中国人観と日本人観については両エッセーの間に当然大きな変化が生じて、より正確に中国人と日本人をとらえることが可能になったのだろう。

この二つエッセーはテーマだけではなく、具体的な内容も同じである。“The Yellow Peril”では全ての文章が言い切る感じの文章であって、全文の中に一つも仮説的な表現が出現していない。ロンドンが、日露戦争取材する中で日本、朝鮮、中国を通過した時、自分の目を見たものによって人種的な判断を下し、その判断に自信をもった。特に、“The Yellow Peril”の最初の所には、

To achieve a correct appreciation of Chinese the traveler should first sojourn amongst the Koreans for several months, and then, one fine day, cross over the Yalu into Manchuria. It would be of exception did he cross over the Yalu on the heels of a hostile and alien army. (Jack London 1989:269)

という部分がある。つまり、その特別な状況においてさえ正しい判断ができないと書いた。その状況では、ロンドンに日本軍の従軍記者としての限界があったので、自分の結論に十分自信があったのだろう。しかし、それから5年の年月が経つと、“If Japan Awakens China”を書いた。このエッセーの具体的な内容と表現を見ると、ロンドンの自信が揺らいでいることがわかる。

“The Yellow Peril”と違って、“If Japan Wakens China”は仮説から始まる、全文中に五つの仮説があった。この五つの仮説と将来についての想像でこのエッセーは成り立っている。具体的な内容は以下のとおりである。

① When one man does not understand another man's mental processes, how can the one forecast the other's future actions?

② And as she has surprised us in the past, and only the other day, may she not surprise us to-morrow, and in the days that are yet to be? And since she may surprise us in the future ... that we may calmly say:“Surprise is all very well, but there is not going to be any Yellow peril or Japanese peril?”

③ And who will dare to say that in the Japanese mind is not burning some colossal Napoleonic dream? And What if dreams crash?

④ And what if Japan awakens China—not to our dream, if you please, but to her dream, to Japan’s dream?

⑤ Here is race-adventure—the first clashing of the Asiatic dream with ours. It is true, it is only an economic clash, but economic clashes always precede clashes at arms. And what then? (Jack London 1970:358-361)

この五つの仮説は同時にロンドンが心配していることでもあった。彼は次のように考えた。まず、白人と日中国民はお互いに理解し合えない人種であるので、将来日本や中国がどういふ行動を取るか予測できないだろう。そして、日本はかつて我々白人を驚かせた<sup>1)</sup>が、驚き喜ぶくらいならいいけれど、それが、白色人種に対する黄色い脅威（中国脅威）か日本の脅威にまで発展するかどうか誰がわかるのか。また、日本人の精神の中に、ある巨大なナポレオンの夢が燃えていないかどうかは、誰もわからないが、日本人の夢と白人の夢が衝突したらどうなるか。さらに、日本が中国を目覚めさせた時、もし中国が白人の夢に従わなくて、日本の夢に従ったらどうなるだろうか。最後に、アジア人の夢と我々の夢がぶつかることは人種間の競争である。最初は経済的な競争であっても、しかし、経済的な競争はいつも武力衝突にまで発展するのだ、そこには何が待っているのか。ロンドンはこの五つの仮説を立てたが、仮説はあくまでも可能性の一つである。現実のものとならない場合も十分にある。ロンドンが、中国と日本は彼ら白人の国の脅威になる可能性があるので、みんな気をつけた方がいいと説いているのだと理解できる。これが、ロンドンがこのエッセーを書いた目的である。しかし、“The Yellow Peril”の中ではナポレオンの夢についてはこう書いた。

“The head men of Japan are dreaming ambitiously, and the people are dreaming blindly, a Napoleonic dream. And to this dream the Japanese clings and will cling with bull-dog tenacity.” (Jack London 1970:280)

この表現と③の表現を比較すると、人に与えるイメージが全く違うものになるだろう。“If Japan Wakens China”中の表現はより公平、客観的な表現だと思える。ロンドンのアジア

人への偏見の弱まりとつながっていると考えられる。

最後にロンドンは、“The Yellow Peril”の結論をこう書いた：

Affairs rush to conclusion. The Far East is the point of contact of the adventuring Western people as well as of the Asiatic. We shall not have to wait for our children's time nor our children's children. We shall ourselves see and largely determine the adventure of the Yellow and the Brown. (Jack London 1970:289)

その時のロndonは、白人がこの種の脅威を感じて、直ちに日本人や中国人に立ち向かうべきだと白色人種に説いた。これが“The Yellow Peril”を書いた目的だと思う。しかし、“If Japan Wakens China”の最後の結論は“If”から始まっているし、全編を通して「仮に」の口調で書かれたので、黄色人種脅威論はロンドンの頭の中で弱まっていたと考える。

肯定的な口調と「仮に」のような仮説的な口調で読者に説明すると、読者には違うイメージを与えると同時に、読者への影響もまた違ってくる。そして、そこにはロンドンの考えの変化も読みとることができる。つまり、ロンドンの偏見は二つのエッセーの間で強い偏見から不確定的な弱い偏見にまで変化したと言えるだろう。

### 8.1.2. 同じ女性の話の違う解釈

この二つのエッセーの中で同じ女性の話を引用して、これを批判した。しかし、その批判の言葉についても両者の差異が出ている。その言葉の差異はロンドンの人種偏見の考えにつながっていて、そこにはロンドンの変化が見えると思うので、まずは、次の二つの文章を挙げる。“The Yellow Peril”には、

“What do you think of the Japanese?” was asked an American woman after she had lived some time in Japan. “It seems to me that they have no soul.” Was her answer. This must not be taken to mean that the Japanese is without soul. But it serves to illustrate the enormous difference between their souls and this woman's soul. There was no feel, no speech, no recognition. (Jack London 1989:286)

とあり、“If Japan Wakens China”には、



An American lady of my acquaintance, after residing for months in Japan, in response to a query as to how she liked the Japanese, said: "They have no souls." In this she was wrong. The Japanese are just as much possessed of souls as she and the rest of her race. And far be it from me to the Western soul, and what its value may be in the scheme of things. And yet that American lady's remark but emphasizes the point. So different was the Japanese soul from hers, so unutterably alien, so absolutely without any sort of kinship or means of communication, that to her there was no slightest sign of its existence. (Jack London 1970:360)

とある。その女性の言葉は“日本人には魂がない”である。これに対してロンドンも両エッセーで同じように批判した。日本人には魂がないのではなく、それはこの白人女性の魂と全く違うものだからであり、この白人女性は日本人の魂が全く理解できないのでこの言葉を発したのだ、とロンドンが分析した。ここまでは同じだったが、その後の文に注目したい。

“The Yellow Peril”ではその文章のあとに新渡戸稲造の『武士道』を引用して、日本人と白人の信仰を比較して説明した。日本人の魂は単なる愛国心であって、一方白人の背後には道義にかなった衝動や、誠実に考えだされた公正さがある。つまり、ロンドンは白人の魂は日本人の魂より勝ると考えたのだろう。しかし、ロンドンは“If Japan Wakens China”の中ではより公正に考えた。白人は、日本人の魂が西洋人の魂より劣るという考えには注意すべきであり、日本人の魂はむしろ西洋の魂に勝るかもしれないとロンドンは言った。つまり、自分で“*The Yellow Peril*”の中の考えを否定し、その考えを持つてはいけないのだと言ったのだ。ここにロンドンの変化がはっきりと現れた。偏見を持つより、正確な考えを持つのはもっと重要と考えたのだろう。公正に人種上の物事を考えたロンドンは、黄色人種に対する偏見がかなり弱まっていたと考える。

### 8.1.3. 引用文について

“The Yellow Peril”の中でロンドンは新渡戸稲造の『武士道』を二箇所も引用した。言うまでもなく、『武士道』は英語を使用する人達に日本を紹介する本で、その時には権威のある書物であった。その時のロンドンはどんな日本人観を持っていたのかについて、『武士道』から引用した文から分析したいと思う。それは以下の二箇所である。

Our reflection brought into prominence not so much the moral as the national consciousness of the individual. Its nature-worship endeared the country to our inmost souls, while its ancestor-worship, tracing from lineage to lineage, made the Imperial family the fountain-head of the whole nation. To us the country is more than land and soil from which to mine gold or to reap grain—it is the sacred abode of the gods, the spirits of our forefathers: to us the Emperor is more than the Arch Constable of a Rechtsstaat, or even the Patron of a Culturstaat—he is the bodily representative of Heaven on earth, blending in his person its power and its mercy.

— 中略 —

Sense of calm trust in Fate, a quiet submission to the inevitable, that stoic composure in sight of danger or calamity, that disdain of life and friendliness with death. (Jack London 1989:286-288)

『武士道』を概観すると、第 1 章から武士道と白人の文化や中国人の文化の共通点、特に儒家思想の義と仁の共通点について述べている。しかし後でロンドンが引用した部分はそれとは違って日本人特有のもの、つまり神道に近いものだと理解できる。もちろん、そこにはその時のロンドンの日本人観と彼の従軍記者としての経歴が大きく関係している。従軍記者のロンドンとずっと一緒にいたのは普通の日本人ではなく、日本軍である。特に、日本の兵士が義州の壁に向かって「日本、バンザイ！」<sup>2)</sup>と叫んだことは、ロンドンの心の中に刻み込まれたと思う。しかし、日本軍は全ての日本人を代表することはできない。その時のロンドンは日本軍の軍国思想に集中し過ぎて、普通の日本社会を軽視したのだと考える。このような考えに従って、ロンドンは日本人のほかの性格を軽視し、愛国心だけを重視したのだ。その愛国心は日本固有の神道と繋がるので、新渡戸稲造の文を引用したのである。しかし、その強い愛国心は白人にとっては脅威である。日本人と中国人を同じモンゴル人種から枝別れした二つの民族であるとする白人従来の考えと新しい知識が合わさって、そしてそこに自分の感情も入って、日本の脅威を感じて、遂に中国の脅威も感じて、“The Yellow Peril”を書いたと思う。その日本の愛国心については日本人が本を書いて説明すれば、より説得力があるわけだから、ロンドンが自分の考え方の正しいことを強調するために『武士道』から引用したのだと考える。

“If Japan Wakens China”は Lafcadio Hearn の最後の本 *Japan: An Interpretation*<sup>3)</sup> の序文の部分を説明した。資料を調べて見ると、ロンドンと Lafcadio Hearn の著書との接触が *Japan: An Interpretation* だけではなく、彼が Lafcadio Hearn の本に継続的に注目していたことがわかる。調べたところだけで三ヶ所の記録が残されている。その時期は次のように 1898 年、1909 年以前、1910 年以降の 3 つである。

⑥ 1898 June 15 Jack goes on watch at midnight, the mosquitoes are thick. Can hear chant of Indians from miles down the river. Jack writes, “Lafcadio Hearn & Japanese Half Caste – Saw beautiful, half-breed woman here. Causcasian features, slender from, delicate oval of face and head, describe her environment, how much hard her lot than Japanese Half Caste.” (RUSS KINGMAN 1992:19)

⑦ “If Japan Awakens China”中の引用 *Japan: An Interpretation* の序文部分<sup>4)</sup>

⑧ HEARN, LAFCADIO. *Shadowing*. Boston: Little, Brown & Company, 1910. ...<sup>5)</sup>

Marginalia: London made a mark beside a passage on page 181 mentioning favors of fathers and a mother’s love. (DAVID MIKE HAMILTON 1986:151)

ロンドンが Lafcadio Hearn に注目し続けている理由は、Hearn がその時代の日本を一番知っていた白人だったからだと考える。ロンドンは Lafcadio Hearn を通じて日本のことを知りたかったのだろう。資料⑥を見ると、ロンドンが、従軍記者になる前に Lafcadio Hearn の著書を読んだことがわかる。従って初めて日本に行った後にロンドンは日本に強い興味を持ったのだと言える。さらに、帰国した後に彼はいくつかの短編を書いている。しかし、“The Yellow Peril”の中では Lafcadio Hearn の文を引用しなかった。その理由は、Lafcadio Hearn は 1904 年に死んでしまったので、Hearn が書いた日本は 1904 年以前の日本だからだ。しかし、ロンドンが来日したのは、1 回目は 1893 年、2 回目は 1904 年で、彼が見た日本は発展から軍国主義に陥っていく日本だと考える。1904 年は大きな意味を持つ年である。日本がロシアに勝った年であり、初めて戦争で黄色人種が白人種に勝った年でもあった。しかも陸軍も海軍も全面的に勝利を飾ったので、日本は大きな自信をもった。このことがのちに日本を軍国主義に導いたのだろう。Lafcadio Hearn にはそれを見るチャンスが与えられなかった。ロンドンと Lafcadio Hearn は違う形の日本を見たので、“The Yellow Peril”の中に Lafcadio Hearn の文を引用しなかったのだろう。

“If Japan Wakens China”の中では Hearn の原文をそのまま引用しなかったが、彼の序文の部分に説明があるので、それを読んで見ると、ロンドンの説明が Hearn の以下の文を指していると考えられる。

The early state of the family and the clan; the history of the differentiation of classes; the history of the differentiation of political from religious law; the history of restraints and of their influence upon customs; the history of regulative and cooperative conditions in the development of industry; the history of ethics and aesthetics, --all these and many others matters remain obscure. (Lafcadio Hearn 1905 : 4)

Nobody knows this better than a man who has passed many years in trying to teach English in Japan, to pupils whose faith is utterly unlike our own, and whose ethics have been shaped by a totally different social experience. (Lafcadio Hearn 1905 : 6)

ロンドンはず Lafcadio Hearn の次のような状況を説明した。Lafcadio Hearn は日本にいて、日本人に英語を教えて、日本人の妻も貰って、最後に日本の国籍まで取った。しかしそれでも、Lafcadio Hearn は自分があまり日本人のことを理解できていないと自ら告白した。ロンドンは白人が黄色人種の思想や考えを理解できないと強調したかった。Hearn のような人さえ黄色人種の考えをあまり理解できなかったのも、他の白人はもっと理解できないのだろう。しかし、わからないからこそ、いろいろな可能性があるとも言えるので、ロンドンは仮説を立てて、自分の言いたいことが言えたのだ。彼は自分の仮説を立証するために Lafcadio Hearn の本当に表現したいことを曲解したと思う。しかし、それは Hearn がロンドンの引用した本を書く目的であると考えられる。つまり、お互いに理解しにくいからこそ、この本には価値がある。“The Yellow Peril”の中に日本人の文章を引用することが力を込める主張する意図が明白で黄禍論への注意を喚起するためであるなら、“If Japan Wakens China”の中に白人の文章を引用することは強気な主張がなくなっている自分の説を立証するためである。この二つの引用からもロンドンの黄色人種に対する偏見や敵視の意識は弱まったと言えよう。

#### 8.1.4. 優生学の考えが見えない “If Japan Wakens China”

“The Yellow Peril” 中にはあったのに “If Japan Wakens China” 中にはなかった文がある。それはロンドンの考えの変化の証拠だと考える。特に人種については、“The Yellow Peril” の中には次の文があった。

⑨ Back of our own great race adventure, back of our robberies by sea and land, our lusts and violences and all the evil things we have done, there is a certain integrity, a sternness of conscience, a melancholy responsibility of life, a sympathy and comradeship and warm human feel, which we cannot teach to the Oriental as we would teach logarithms or the trajectory of projectiles. That we have groped for the way of right conduct and agonized over the soul betokens our spiritual endowment. Though we have strayed often and far from righteousness, the voices of the seers have always been raised, and we have harked back to the bidding of conscience. The colossal fact of our history is that we have made the religion of Jesus Christ our religion. No matter how dark in error and deed, ours has been a history of spiritual struggle and endeavor. We are preeminently a religious race, which is another way of saying that we are a right-seeking race. (Jack London 1989:285)

No great race adventure can go far nor endure long which has no deeper foundation than material success, no higher prompting than conquest for conquest's sake and mere race glorification. To go far and to endure, it must have behind it an ethical impulse, a sincerely conceived righteousness. But it must be taken into consideration that the above postulate is itself a product of Western race-egotism, urged by our belief in our own righteousness and fostered by a faith in ourselves which may be as erroneous as are most fond race fancies. (Jack London 1989:288-289)

これは “The Yellow Peril” を筆者が読んだとき気になった部分でもある。白人がやってきた海と陸による窃盗や暴力など、邪悪なことごとの背後には、ある高潔さがあり、良心の厳しさがあり、人生の憂うつな責任があり、同情や友情があり、温かい人間的感情があると言う。白人は過ちや行ないにおいてどんなに暗くとも、白人の信仰は精神的な葛藤や努力の歴史なのである。白人は優れて宗教的な人種なのであり、別の言い方をすれば、正義

を追い求める人種なのだ」とロンドンが主張した。これは、言うまでもなく、強い人種的な偏見が含まれている文である。当時流行していた白人優位論とロンドンの考えは非常によく似ている。この白人優位論は、ダーウィンの進化論からスペンサーの社会進化論にまで発展し、そして、白人の医学者が言うところの科学的な支持も受けた。その考えは、白人の侵略に正当な理由を付けられたので、白人は世界の主人たる人種となって、当時の白人社会の主流思想となった。ロンドンも白人優位論に影響された、特に、ロndonはスペンサーに興味があつて、19歳の時、図書館でスペンサーの『第一原理』、『心理学原理』を借りて読んだ。彼の本棚に少なくとも三冊のスペンサーの本が確認された<sup>6)</sup>。ロndonはかつてスペンサーの考えを固く信じたからこそ、上のような文を書けたのだろう。宗教については、ロndon自身は無宗教であると宣言したので、白人である彼自身と優れて宗教的な人種とは矛盾するのではないかという疑問が浮かんで来る。しかし、白人の無宗教と私たちが理解する無宗教とは違うものだ。白人の道徳は宗教から得たものなので、無宗教も宗教に類似する信念体系と認識しないと行けない。総じて言えば、“The Yellow Peril”を書いた時のロndonは人種偏見が強かった。こうなった一つの重要な原因は、ロndonが白人優位論を固く信じていたからだ。

“If Japan Wakens China”にはそのような言葉は全く見えないが、それに一番近い文としては次のようなものがある。

⑩Japan is the one unique Asiatic race, in that alone among the races of Asia, she has been able to borrow from us and equip herself with all our material achievement. Our machinery of warfare, of commerce, and of industry, she has made hers. And so well has she done it that we have been surprised. We did not think she had it in her. (Jack London 1970:360)

まず、言葉使いについて一つ触れたい。“The Yellow Peril”では“Oriental”という言葉を使っている。この言葉はさかのぼるともつと前の中国人もの短編小説“White and Yellow”の中にも出て来た。ロndonが“The Yellow Peril”を書いた時、この単語を使い続けた。しかし、“If Japan Wakens China”では、代わって“Asiatic race”や“races of Asia”を使っている。“Oriental”には侮辱的な意味が含まれているが、“Asiatic race”や“races of Asia”には侮辱的な意味は含まれていない。これは、ロndonのアジア人に対する人種偏見が弱

まった一つの証拠だと考える。ロンドンのアジア人種への偏見が弱まったことが一番分かりやすいのは⑨と⑩の比較である。⑨と⑩を比較してみると、“The Yellow Peril”において用いられた白人としての優越感溢れる言葉は“If Japan Wakens China”の中では一切書かれていないのだ。“If Japan Wakens China”の中では冷静で対等な言葉を使ったと言える。ということは、白人優位論は彼の中で弱まっていた。白人としてのロンドンにとって白人本位の考えはどうしても彼の頭の中に残存するものの、白人優位論としては彼の頭の中にあまり残されていないと考えるべきだろう。

“The Yellow Peril”と“If Japan Wakens China”の内容を比較した結果、1904年のロンドンと1909年のロンドンではアジア人に対する偏見が大きく変化した。5年が立った後、ロンドンがより冷静で対等な視点でアジア人のことを書いた。この5年間のどの時点でロンドンが変わったのかについて、次の節で主にロンドンの中国人もの作品を通じて分析したい。

## 8.2. 中国人もの作品からロンドンの変化を見る

1904年から1909年の間にロndonは中国人もの短編を三つも書いた。即ち、1907年3月の“The Unparalleled Invasion”と1908年4月12日の“The Chinago”と1908年5月29日の“Chun Ah Chun”である。ここでは一つ一つの小説を詳しく論じることはしないが、注目したいところが二つある。それは、ロンドンが小説を書いた時に中国人に対してどんな偏見を持っていたかということと小説を書いた時点でロンドンが何をしていたかということだ。これが分かればロンドンの中で大体どの時点で中国人への偏見が変化し始めたのか、またそれがどのように変化したかがわかる。

### 8.2.1. “The Unparalleled Invasion” —中国人への偏見の頂点

ロンドンの6篇の中国人もの小説の中で、一番人種偏見が強いのは“The Unparalleled Invasion”であろう。第1章でこの小説と他のロンドンの作品との関係について少し触れたが、この作品において一番酷いことは、中国人を全滅すべきだと主張したことだと思う。白人社会の永久の安心のため、中国人を目覚めさせることなく四億の中国人を全滅しないといけないとロンドンはこの小説を書いた時に思ったのだろう。Russ Kingmanの記録によると、この小説を二度も書き始めた。即ち、1906年3月11日と1907年の3月7日で

ある<sup>7)</sup>。その後の書き出しや書き終わった記録がないので、1907年3月に書き終わったと考えられよう。つまり、ロンドンがスナーク号で出港する前のことである。この時のロンドンは彼の人生の中で一番中国人への人種偏見が強かった時だと考える。1904年に“The Yellow Peril”を書いて、中国人は白人にとって黄禍であると言って、注意を呼び掛けたと思ったら、1907年3月の“The Unparalleled Invasion”の中に書いた行動は中国人を全滅することである。しかも、この作品を1906年に一回書き始めたものの、恐らく途中で中止した。“The Unparalleled Invasion”中の中国人をどう扱うべきか決まらないので、途中で書くのを中止した可能性がある。しかし、1907年の3月には、“The Unparalleled Invasion”中での中国人の運命について決断して、書き続けたのだと考える。それは、中国人を全滅することだ。つまり、1904年から1907年の3月前後までは中国人への偏見が強まり続けていたのだ。

### 8.2.2. “The Chinago” — 中国人への偏見が弱まり始めたことのわかる作品

1908年4月12日に“The Chinago”を書き終わって、ロンドンの二番目の妻チャーミアンがこの短編を編集した。“The Chinago”では登場する一人一人の中国人に名前が付けられた。これは、それまでのロンドンの中国人もの小説になかったことだ。そして、それまでの中国人もの作品にない心理描写もたくさんあった。ということは、ロンドンがこの時点で中国人のことをより理解できていたということだ。また、この小説の中にタヒチの中国人労働者の奴隷根性を確かに書いたものの、それと同時に白人の邪悪さもしっかり書き込んだ。従って、この時のロンドンには白人統治の残忍な一面と中国人労働者への不公平な待遇を暴露したと言える。ということは、ついにロンドンの偏見が減少し始めたことと認識できるのだ。1907年の3月前後のロンドンと比較すると1908年4月のロンドンは大きく変化したと言える。1907年4月13日に彼はスナーク号でチャーミアンと共にホノルルへ向かった。ハワイで船を修理し、乗組員を入れ代えた<sup>8)</sup>。5ヶ月の滞在をして、10月7日、ハワイを後にした。10月7日、マーケサス諸島、タヒチへ向かった。4月、ボウラ・ボウラから出た直後に“The Chinago”を書いた。スナーク号の旅で色々あって、それが彼に影響したと考えられるだろう。

### 8.2.3. “Chun Ah Chun” — さらに中国人への偏見が弱まったことを示す作品

この短編小説は1908年5月29日に書き終わって、チャーミアンが編集したと Russ



Kingman は彼の本の中に記録した。この小説は、ハワイでビジネスに成功した中国人「陳芳」をモデルとして創作した中国人もの短編小説である。初めてアメリカで成功した中国人を描いたものだ。いままでのロンドンの中国人もの小説の中国人像は、違法なやり方でエビを取る漁師 Yellow Handkerchief と農園のクーリー Ah Chou であったが、ここでそれと全く違う中国人像が描かれた。つまり、上流社会にいる中国人である。これだけでも、ロンドンにとって大きな進歩だと思われる。この小説の主人公である Ah Chun は哲学的な頭脳を持つ、とても信用がある商人と書かれていて、ロンドンは好意的に中国人像を書いた。そして、娘との考え方の違いがあった時、Ah Chun はその違いを真正面から避け、哲学的な頭脳を使い、自分なりのやり方でその矛盾を解決した。それは娘達の結婚問題であり、半分中国人の血統を持つ Ah Chun の娘達は、当時のアメリカにおいてはエリートの結婚相手にはならないのだ。当時のアメリカ社会は、中国人に対する強い人種偏見があったのだ。しかし、ロンドンはその問題は超えられないものではないと書いた。最後には、Ah Chun の娘達はアメリカのエリートの中で結婚相手として人気の存在となったのだ。人種偏見を超える物語を書いたロンドン自身の人種偏見はかなり弱まっていた。このときのロンドンは、依然としてスナーク号で航海していて、南太平洋にいた。ロンドンが「陳芳」のことを聞いたのはハワイにいた時と考えられる。しかし、ロンドンはすぐには“Chun Ah Chun”を書かなかった。“The Chinago”を書き終わって約 2 ヶ月後に書いた。ロンドンは内心ですぐに中国人への人種偏見を取り除くことができなかつたのだと考えられる。徐々に弱まっていて、その過程は中国人もの小説の中に体現されていると考えられるだろう。

前文が述べた、ロンドンの優生学的な考えが弱まっていることは、実に、彼のキリスト教信仰の弱まりと繋がっている。“The Yellow Peril”の中で白人が偉大である原因は彼らの背後には偉大な宗教があるからだと言ったが、“Chun Ah Chun”の中では、宗教と神様についてこう書いた。

There are gods and gods. Some are paper, some are wood, some are bronze. I use a small one in the office for a paper-weight. In the Bishop Museum are many gods of coral rock and lavastone.

—中略—

I will tell you. It is money. In my time I have had dealings with Jews and Christians,

Mohammedans and Buddhists, and with little black men from the Solomons and New Guinea who carried their god about them, wrapped in oiled paper. They possessed various gods, these men, but they all worshipped money. There is that Captain Higginson. He seems to like Henrietta. (Jack London 1984:177-178)

ここにあるのは、どの神様を信じる人でもお金のことが好き、お金は神様よりこの世の中で通じる、ということである。現在では阿芳はこのような言葉を言ったことがあるかどうか調べることはできないが、ロンドンがここで書いたことは、彼自身が考えていたことだろう。もちろん、これは現実社会の風刺であるが、彼のキリスト教信仰が弱まっていったことも示していると考えられる。特に、最初の部分に、紙でできた神がいれば、木と銅でできた神もいる等々と書いた。この冒流するような言葉を言うことは信者としては考えられない。ロンドンが社会主義者であり、キリスト教の信者ではないと自称したが、“The Yellow Peril”を読んで見ると、宗教にこだわる部分があったので、結局彼はキリスト信仰から逃れられないのだと思われる。しかし、ここでこのような言葉を発したことは、ロンドンの宗教への信仰はかなり弱まったのだと言えよう。これは、“If Japan Wakens China”の中ではアジア人への偏見がかなり弱まったこととつながっていると考えられる。

1907年の3月前後にはロンドンの中国人への人種偏見が一番ひどかったと考える。そして、一年後の1908年4月にはロンドンに変化が始まった。偏見を持ちながらも、一方で理解が進みつつあったのだ。中国人への人種偏見の頂点からの降下が始まったのだろう。そして、2ヶ月後に“Chun Ah Chun”を書いた時、ロンドンの中国人への人種偏見はさらに弱まったと考える。スナーク号での旅を終えて、グレン・エレンに戻ってすぐに、アジア人への人種偏見がかなり弱まっていたと思われるエッセー“If Japan Wakens China”を書いた。このような流れがあったと思われる。以上のように見てくると、スナーク号での航海をする前と航海をした後で、ロンドンの人種偏見が大きく変化したと思われる。スナーク号での旅がロンドンに影響した原因については次の節で論じたい。

### 8.3. スナーク号での旅及びロンドンへの影響

スナーク号での旅は1907年4月22日から始め、1909年8月29日グレン・エレンに戻るまで、2年4ヶ月くらいの長い旅だった。スナーク号でオークランドからハワイ、そして、

タヒチなど南海の島々、オーストラリアまで進んだ。ロンドンたちはそこでスナーク号と別れ、別の船で南米に行って、パナマを経由し、オークランドに戻った。しかし、この経路は当初の計画と違うものだった。当初は、世界一周の旅を目指した。中国の長江 (Yang-tse River)、ナイル川(Nile)、ウイenna(Vienna)、ロンドン (London)、パリ(Paris)などに行きたかったが、スナーク号は思ったより丈夫ではなかったし、ロンドンと乗務員も体を壊したので、彼らは止むを得ず旅を終え、グレン・エレンに戻った。その中でも特に、中国の長江に行きたかったということだったが、ロンドンが中国に興味を持っていたということの証しであるだろう。結局、中国までは行けなかったが、この旅でのアジア人の理解については収穫が少なくなかった。

### 8.3.1. ハワイのアジア系移民

ハワイは元々ハワイ王国であった。1895年にアメリカの準州になって、1898年に正式にアメリカ領になった。1959年にアメリカ合衆国領としてのハワイ州が成立した。したがって、ロンドンが行った時にはハワイはアメリカの準州になったばかりであった。自治権が高かったので、本土カリフォルニアで行われたアジア系移民の排除に比べると、ハワイへの影響は少なく、ハワイのアジア系移民はある程度の自由を享受することができた。

1898年7月、米国はハワイを併合。翌年には、米国の移民法をハワイに実施した。...日本人が集まる耕地に日本語学校が設立された。1900年には11校、約1500人の生徒が通っていた。1907年になると120校に急増し約5000人を数えていた。...1900年、米国法律適用でハワイの契約移民は禁止され自由移民だけの入国が許されたが、移民会社は法の目をくぐり送り出し続行。(藤崎康夫 1997:40-49)

このように、確かにアメリカの移民法を実施した1899年には中国からの移民が急減した。また、1900年には日本からの移民もかなり減った。アメリカの移民法はハワイへの影響があったということだ。しかし、常にハワイにいた移民には、アジア移民に反対する中心地であるカリフォルニアのような乱暴なやり方や締め出しも多くはなかったと思う。そうでなければ、学校が増え続けることもできないのだろう。大きな原因はハワイで盛んだった砂糖キビ農園や砂糖製造にはアジア人が労働力として必要だったこと。そして、第7代の国王カラカウアが在位した時、アジア系移民に選挙権を含む諸権利が与えられた。その時、

アジア系の移民の中には農業で貯蓄した金を生かし、ビジネスを始めた人もいたし、また、ハワイの原住民と結婚して市民権をもらった人もいて、簡単にカリフォルニアのようにアジア人を締め出すことはできなかつただろう。そして、ロンドンがナカタのために商務兼労務長官への電報の中で当時の法令についてこう述べた。

From the Immigration Laws and Regulations of July 1, 1907, Article(c):“If a Japanese or Korean laborer applies for admission and presents no Passport, it shall be presumed that he did not possess when he departed from Japan or Korea a Passport entitling him to come to the United States, and that he did possess at that time a Passport limited to Mexico, Canada, or Hawaii.” (Jack London 1988:815-816)

この法令を見ると、ハワイがアメリカ本土より緩やかな移民制度を持っていたことは明らかだ。ロンドンがハワイに来て 5 ヶ月の滞在で見たアジア移民は、白人やハワイ先住民とうまく共存できていたことで、彼のアジア人観を変えたと考える。

### 8.3.2. 日本人ナカタとの接触

スナーク号がハワイに着いた時、ロンドンは船の乗務員を入れ替えた。その中の日本人のトチギはみんなに好かれ、仕事を熱心にやったが、船酔いが酷くて仕方なく船を降りた。代わりに、もう一人の日本人ヨシマツ・ナカタが雇われた。このことについて Russ Kingman はこう書いた。

Just a few weeks before leaving for the Marquesas Islands, Yoshimastu Nakata was hired to replace Paul Tochigi. It was a fortunate decision, since Nakata turned out to be a nearly perfect servant, and wherever Jack went Nakata was with him for the next several years, becoming more a son than servant, and always treated as one of the family. (Russ Kingman 1979:182)

ロンドンはこの旅が始まる時から日本人トチギを雇った。途中、トチギが船酔いの原因で解雇された後、ロンドンは再び日本人のナカタを雇った。彼は日本人を気にいったのだろう。上記の引用文によると、ロンドンはナカタを使用人というよりはむしろ息子のよう

かわいがり、常に家族の一員として扱った。オーストラリアでスナーク号での旅が終わった後、他の乗務員は解雇されたが、ナカタだけがロンドンとその後の旅にも同行していて、最後、ロンドンの農園まで連れてこられた。途中、ナカタがアメリカの入国管理局で引っ掛かったが、次のようにその時の記録も残っている。

1909 July 12 Nakata held up by Immigration people.

Jack sends wire to Secretary of Commerce and Labor in Washington, D.C.

July 13 Jack pays \$500 bond for Nakata pending his appeal.

July 23 Receives word than Nakata can stay in the United States.

(Russ Kingman 1992:105)

ロンドンではナカタがアメリカにいられるように 500 ドル<sup>9)</sup>を払って、さらに、U.S. Secretary of Commerce and Labor に手紙を送った。手紙も調べたが、とても長い手紙だった (Jack London 1988 : 185-188)。その中でロンドンは、ナカタを雇用した事、一緒に旅をした事、そして、ナカタのパスポートがなくなった原因及び再発行等々について述べた。彼のどうしてもナカタにアメリカにいてほしい気持ちがわかるだろう。しかも、ロンドンのその後の生活にはナカタは欠かせない存在となった。船での旅といい、馬車での旅といい、ロンドンがどこに行ってもナカタを連れていた。そして、“If Japan Wakens China” を書いてから 1915 年にナカタが仕事をやめるまではロンドンは日本人と中国人の事を書かなかった。ナカタが仕事を辞めた後の 1916 年にロンドンは最後の中国人もの小説 “The Tears of Ah Kim” と日本人もの小説 “Cherry” を書いたのだ。アジア人観に関してはナカタがロンドンに影響したと考える。ハワイで出会って以降のナカタとの接触の中で、ロンドンのアジア人観がいい方向に変化していたと思う。ロンドンのアジア人に対する人種偏見の変化については、彼の近くにいたナカタが大きな役割を果たしたと言える。ロンドンのスナーク号での旅が、彼のアジア人に対する偏見が変化した主な原因の一つであろう。

### 8.3.3. 白人種に合わない熱帯気候

産業革命以来、白人の世界への進出がますます増えた。キリスト教を広げようとして、白人の世界への進出がより激しくなったのだ。スペンサーは更に社会進化論を作り出す。こうして白人は、一番優れた人種で全世界の主人たる存在となった。周知の通り、スペン

サーの社会進化論はダーウィンの進化論から生み出された説である。ダーウィンの説は、主に違う島における同じ種類の鳥の多様性によって適者生存を主張した。世界の各地で生きる別々の人種の皮膚の色についても、違うことは生きる環境に応じた結果だと思ふ。人の皮膚の色で優劣を判断することは大間違いだろう。しかし、ロンドンが生きた時代は優生学が一番流行した時代であったし、無論、自分の人種が優れた人種であるなら、これに誰も反対しないだろう。ロンドンもそういう状況だった。しかし、ロンドンのスナーク号の旅では問題が生じた。それは、次のように病気の襲撃であった。

The crew of the Snark relaxed as much as possible during the two weeks at Maringe Lagoon. Henry and Tehei were down with island fever. Nakata was suffering the torments of ngari-ngari (a terrible rash caused by bush poisoning resulting in severe itching) Jack had several yaws, and Charmian, along with rest, had intermittent bouts of fever. Yet everybody from the Captain down was nearly always able to carry out his full responsibilities.

Jack, Charmian, and Martin took a side trip to Kiaba, where all came down with ngari-ngari. Nakata had already caught it on Guadalcanal. Now they added a generous dosing of Lysol to the daily medication. By this time they were putting just about anything that even looked like medicine in their yaws. (Russ Kingman 1979:206)

スナーク号の乗務員のほぼ全員が病気になった、しかもいくつもの伝染病だった。それで、ロンドンと妻チャーミアンがオーストラリアに着いて、次の日に病院に行った。ロンドンが当初の計画を中断したことについては、病気が主な原因の一つであった。なお、グレン・エレンに戻ってしばらく経つと病気は全治した。この病気についてロndonは次のように考えた。

By December 1908, London had become quite ill with several mysterious maladies. He decided to abandon the Snark voyage in favor of a return to the more temperate climate of the Valley of the Moon, later turning to Charles Woodruff's *The Effects of Tropical Light on White Men* for an answer to his illnesses. (David Mike Hamilton 1986:33)

Steadily, rapidly, Jack regained his health in the California climate. In a few months all traces of his analytical mind was finally put at ease when he came across a book by Lieutenant Colonel Charles E. Woodruff of the United States Army, entitled *The Effects of Tropical Light on White Men*, in which the author had the same medical problem. The ultraviolet rays had simply torn them to pieces. (Russ Kingman 1979:212)

I have made a discovery. Ninety percent of our crew is brunette. Aft, with the exception of Wada and the steward, who are our servants, we are all blonds. What led me to this discovery was Woodruff's "Effects of Tropical Light on White Men," Which I am just reading. Major Woodruff's thesis is that the white-shinned, blue-eyed Aryan, born to government and command, ever leaving his primeval, oversea and foggy home, ever commands and governs the rest of the world and ever perishes because of the too-white light he encounters. It is a very tenable hypothesis, and will bear looking into. (Jack London 1950:148-149)

ロンドンには、自分たちが旅の中で色々奇妙な病気を患った原因は白人が熱帯気候に対応できないからだ結論した。地球上には色々な環境がある。白人に対応できる環境があるなら、対応しにくい環境もある。白人に対応できない環境にその先住民は対応できる、それは進化論の自然の選択だと彼は考えたのだろう。従って、優生学は彼の頭の中で壊れつつあるだろう。それゆえ、彼の頭の中の人種偏見も弱まって行くと考えられる。これも、より公平で客観的なエッセー "If Japan Awakens China" を書けた原因の一つと考えられる。

二つのエッセー "The Yellow Peril" と "If Japan Wakens China" の考え方は近いものがあるとはいえ、その内容を比較して見るとロンドンの考えが大きく変化したことがわかった。その変化は、スナーク号での世界旅から始まって、そして、旅が進むとともに人種偏見が弱まって行ったと見られる。そこで、主な原因を三つにまとめた。カリフォルニアと違うハワイの移民社会、つまりハワイの多民族の融和と共存を見たこと、日本人ナカタとの出会い彼をその後家族の一員として扱ったこと、また、旅の途中で色々な病気を患ったことがロンドンに改めて人種のことを考えさせたことと思う。このことにより、ロンド

ンのアジア人に対する人種偏見がかなり弱まっていったと考えられる。そして、その変化は“**If Japan Wakens China**”の中に体现された、5年前に書いた“**The Yellow Peril**”と比較するとよりわかりやすいので、ここでこの二つのエッセーを比較しながら論じた。しかし、これらのエッセーに出てくる中国人像は、これらはロンドンの最後の中国人もの作品ではないので、従って、彼の最後の中国人像ではない。ロンドンが人生の最後に、中国人に対してどのような考えを持っていたのかを知るには最後の中国人もの作品“**The Tears of Ah Kim**”を分析する必要があるだろう。



注

- 1) ここでは、明治維新、日露戦争のことを指す。
- 2) この表現は、“The Yellow Peril”から取り上げたので、日本軍の従軍記者として取材した時にこのシーンを目にしたとみなされる。
- 3) *Japan, an Attempt at Interpretation* のことを指す。
- 4) “If Japan Awakens China” は 1909 年に書かれているので、1909 年より前に読んだと考える。
- 5) この本の出版は 1910 年であるので、ロンドンでは 1910 年以降にこの本を読んだと考える。
- 6) *An Autobiography* 1904, *Facts and Comments* 1902, *The Principles of Psychology* 1896.
- 7) Russ Kingman 1992, *Jack London a Definitive Chronology* による。
- 8) ここで日本人のヨシマツ・ナカタを雇った。
- 9) 当時のアメリカのサラリーマンの平均年収に近い金額である。

## 第9章 “The Tears of Ah Kim” から見るロンドンの人生の最終段階における中国人観

ロンドンの最後の中国人観を分析する時、彼の最後の中国人もの作品を分析しなければならない。ロンドンにはスナーク号での旅の前後に、いくつもの中国人もの作品を書いた、つまり、旅の直前に“The Unparalleled Invasion”を終わらせ、旅の途中で小説“The Chinago”と“Chun Ah Chun”を創作したし、グレン・エレンへ戻った直後にはエッセー“If Japan Awakens China”を書いた。それは1909年のことであった。しかし、その後しばらくは中国もの作品を全く書かなかった。そして、1916年に及んで最後の中国人もの作品“The Tears of Ah Kim”を書いたのだ。

“The Tears of Ah Kim”は1918年7月に雑誌 *Cosmopolitan* の Vol. 65 に初公開され、すぐに *On the Makaloa Mat* に収められて広く公表された。ロンドンが1916年11月22日の朝に昏睡状態に陥っているところを発見されその後死んだので、つまり、“The Tears of Ah Kim”はロンドンの死後に公開された作品である。彼の中国人もの作品の中でも、唯一死後に公開されたものである。そして、ロンドンは、1916年6月12日にハワイのホノルルで療養中に Edgar G. Sisson に送った手紙の中で、“The Tears of Ah Kim”という小説を書き始めていると書き残している。つまり、この小説は1916年に書かれたものと認識できる。かつてロンドンは *The Paradise of the Pacific: Sketches of Hawaiian Scenery and Life* を自分の創作の源として扱っていた。特にこの本の136ページの所にマークを付けたし、そのマークを付けたところは“The Tears of Ah Kim”の元々のストーリーである。具体的なことは既にも書いたもので、ここでは、上記のことのみを簡単に紹介しておく。

今までのロンドンの中国人もの作品を読んでみると、彼の中国人観が中国人に対する理解の深さにより変化してきた。“The Tears of Ah Kim”の一つ前の中国人もの小説“Chun Ah Chun”の中にはロンドンの中国人に対する偏見があまり見られなかったし、そして、拝金主義至上の白人社会で金銭が人種偏見を超えたことも描いた。しかし、偏見を超えたとはいえ、結末において白人と中国人の間にある人種間の溝を超えることはできなかった。ロンドンの最後の中国人もの作品である“The Tears of Ah Kim”の中では、彼がどこまで中国や中国人のことを理解したのだろうか。この小説の中で彼の中国人観がどのように変化したかについてこの章で詳しく分析したいと考えている。

### 9.1. 中国の道德の頂点としての「親孝行」を描く

中国人もの小説を描く時には中国の文化を理解することが必要である。作者がどのぐらい中国の文化を理解したかについては、作品の中に描かれた重要ポイントから見出すことができる。“The Tears of Ah Kim”では、ロンドンが今まで書いた中国人もの作品と違って、初めて中国人の親孝行についての話を描いている。この話のネタはロンドンが *The Paradise of the Pacific: Sketches of Hawaiian Scenery and Life* の中で見つけたもので、彼が、親孝行は中国人の意識の中で特別に重要な位置を占めていると認識した上で、このネタを広げて“The Tears of Ah Kim”を書き上げたと考えられる。2000年以上にわたって中国人の思想を統治した儒家は親孝行を基本的な徳目として重んじた。儒家の著作『論語』の中には親孝行に関する教えが数多く見られる。

子の曰わく、父母に事うるには幾くに諫め、志の従わざるを見ては、又た敬して違わず、勞して怨みず。(『論語』里仁第四 18, 翻訳：金谷治 1999 79) <sup>1)</sup>

子の曰わく、父母の年は知らざるべからず。一は則ち以て喜び、一は則ち以て惧る。(『論語』里仁第四 21, 翻訳：金谷治 1999 80) <sup>2)</sup>

ここに二つの孔子の文を挙げたが、これだけを読んでも、親孝行について具体的な行為にまで言及して説明したので、親孝行は中国人の道德修養の中で重視されていることが分かる。そして、西洋と中国の間にある思想上の主な差異は、西洋のキリスト教崇拝と中国の祖先崇拝の違いである。中国の祖先崇拝の中でも特に親孝行が重視されていて、亡くなった祖先への崇拝は、健在の親への敬愛、つまり親孝行から始まると考えられる。親孝行とは、中国人にとって行わなければならない道德の最頂点である。このような言葉もある。

<sup>からす</sup>鴉に反哺の孝あり、<sup>ひつじ</sup>羊に跪乳の恩あり。(養育の恩に報いる、親の恩を知ること)  
(『みんなの塾』 10月31日) <sup>3)</sup>

ロンドンが自分の小説の中で中国人の親孝行の徳目を描くことにより、彼はいつもより深く中国人の内面的なものが見えてきたと言えるだろう。ロンドンは中国人についてより理

解できた可能性がある。一体、ロンドンが中国人の親孝行をまともに理解できたかのかどうか、小説の具体的な内容から分析したい。

An Kim の親孝行について、ロンドンは小説の中で具体的に三つの行動を描いた。一つ目はこのように描いている。

Ah Kim, thirty-seven years of age, fat and a bachelor, really did want a wife, especially a small-footed wife; for, Chinese born and reared, the immemorial small-footed female had been deeply impressed into his fantasy of woman. But more, even more and far more than a small-footed wife, did he want his mother and his mother's delectable beatings. So he declined Fu Yee Po's easy terms, and at much less cost imported his mother ... (Jack London 1919:170-171)

ロンドンは故意に二人のことを描いて比較した。つまり、当時 Ah Kim が迫られているのは、将来の妻になる可能性がある気になった女性とよく彼を打った母親、この二人の中で一人しか選べない事である。Ah Kim にとって重要な二人を比較し、彼は母親を選んだことは、母親は彼の中でより重要な位置を占めていることを表している。Ah Kim がよく自分を打った母親の方を選択した理由は、Ah Kim が中国の思想に影響されたと考えられ、中国の儒家思想の親孝行を実践したのだと認識できる。すでに述べた、親の恩を知り養育の恩に報いることとも一致しているので、ここでロンドンが正確に中国人の道德観を理解して、正しく描くことが出来たと考えられる。そして、Ah Kim がとった親孝行に関する二つ目の行動は以下のとおりである。

“Ah! Stubborn one! Why do you not cry? ... Answer me! Why do you not cry?”

Weak and breathless from her exertions, she dropped the stick and panted and shook as if with a nervous palsy.

“I do not know, except that it is my way,” Ah Kim replied, gazing solicitously at his mother. “I shall bring you a chair now, and you will sit down and rest and feel better.”  
(Jack London 1919:164-165)

Ah Kim の婚姻に関わる問題の中で、彼と母親の意見がくい違いを生じた。母親の意見を受

け入れないことで母親に強打されたが、これまで Ah Kim は母親の強打により泣いたことはなかった。まず、Ah Kim が泣かない原因は親孝行だと考えられる。Ah Kim が泣くともなると、その涙は母親から不当な扱いを受けたことによる悔しい涙、或いは、母親の愛に対する不信の涙とみなされる。Ah Kim が泣かないことは母親に対する親孝行である。そして、Ah Kim が強打された後、母親のために椅子を運んできて、体を休ませて元気な状態に戻そうとした。また、母親が生きているうちに決して好きな女性と結婚しなかったのは、Ah Kim が親孝行を重視した結果と考えられる。Ah Kim がとった行動は、孔子の“父母に事するには幾くに諫め、志の従わざるを見ては、又た敬して違わず、勞して怨みず”を裏づけたのだろう。三つ目には、ロンドンが Ah Kim の親孝行を描いたと同時に、タイトルの“The Tears of Ah Kim”の意味を説明した。

“I cried,” he explained, “because I suddenly knew that my mother was mother was nearing her end. There was no weight, no hurt, in her blows. I cried because I knew she no longer had strength enough to hurt me. That is why I cried, my Flower of Serenity, my Perfect Rest. That is the only reason why I cried.” (Jack London 1919:183-184)

ここでロンドンがいつもは泣かない Ah Kim が最後に泣いた原因について明確に述べた。つまり、Ah Kim は自分の母親がこの世の中に残れる時間が少ないと感じ、思わず涙が出てしまったのだ。この涙は、Ah Kim の母親に対する深い愛でありながら、彼の親孝行の感情の無意識的な流露でもある。この小説のタイトルを“The Tears of Ah Kim”とした理由は、ロンドンが中国の伝統思想の親孝行を描こうとしたと考えられる。ここの描写は、孔子の言葉“父母の年は知らざるべからず。一は則ち以て喜び、一は則ち以て惧る”に即したのだと考えられるだろう。孔子の言葉を通じて Ah Kim が仕打ちを受けた時になぜ喜んだか、そして、なぜ涙を流したかの原因を明らかにしたのだ。つまり、Ah Kim が仕打ちを受けて痛いと感じた時、母親が年を取っても力があり元気であることを感じ取り、喜んでいたので。逆に、Ah Kim が仕打ちを受けて痛いと感じなかった時、母親がこの世の中にいられる時間があまり残されてないと感じて、怖くて涙が出たのだ。全て、親孝行の表現だと考えられる。

作者が小説の中の人物の行動を描く時にはいつでも、その行動の背後には全て何らかの意味があるのだ。しかし、時に、作者が日常生活の経験からある行動を描いたものの、そ

の背後にある文化などが作者にさえわからない場合もある。特に、異人種を描く時、この問題はより深刻だと考えられるが、ロンドンの最後の中国人もの作品は、中国人の行動を描いた時、その背後にある親孝行という事実を説明していたのだろう。そこに偏見は全く見えないのと同時にロンドンのストーリーは心にしみる話となっている。よく中国人の行動を理解していたからこそ、このような心に染みる作品を書けるのだろう。

## 9.2. 中国人の価値観についてのロンドンの理解

ロンドンが“The Tears of Ah Kim”を創作した時、参考にした元のストーリーには、母親が息子に暴力を振るった具体的な原因は何も書かれていなかった。ロンドンは、母親が息子の婚姻に反対していることを原因とした。そこにはロンドンが理解した中国人の考え方が含まれていると見える。まず、一つ目の原因を分析したい。息子の結婚に反対する理由については、ロンドンがこのように描いている。

“I speak of Li Faa,” his mother corrected with stick emphasis. “She is only half Chinese, as you know. Her mother was a shameless kanaka. She wore skirts like the degraded haole women—also corsets, as I have seen for myself. Where are her children? Yet has she buried two husbands.”

“The one was drowned, the other kicked by a horse,” Ah Kim qualified.

“A year of her, unworthy son of a noble father, and you would gladly be going out to get drowned or be kicked by a horse.”

Subdued chucklings and laughter from the window audience applauded her point.  
(Jack London 1919:163)

つまり、Ah Kim の母親は自分の息子を、二人の夫の両方の不慮の死に関わった女性と結婚させたくないのだ。母親は、もし息子 Ah Kim が二人の夫の両方が不慮の死をとげた女性と結婚するなら、彼もまた不慮の死の運命に関わる可能性があると考えていたので、必死に息子の婚姻を阻止したのだ。一見母親の考え方は不合理かつ不思議だが、その騒動を見ている周りの人が母親の考え方に賛成している。ロンドンが Ah Kim の母親の考え方をこのように描いたのは妥当であるのかについては疑問が浮かんでくるだろう。しかしそれは

封建社会においては中国人の考え方に近いものだと考えられる。中国の封建社会に「旺夫」、「克夫」の言葉があり、つまり、この女と結婚すれば、夫の運命がよくなる、あの女性と結婚すれば、夫の運命が悪くなるということを意味する言葉である。このような封建社会の人々は妻の顔や性格には夫の将来を左右する能力があると信じていた。そこで、母親が Li Faa のような二人の夫の不慮の死に関わった女性と息子を絶対に結婚させたくないのだろう。封建社会の考え方以外では、そこにあるのは母親の息子に対する強い愛であり、つまり、中国の強い家族意識と考えられ、個人の自由より家族の意見を大切することは中国人のやり方だ。ロンドンのこの描写は中国の封建社会の考え方以外にも、中国の家族中心の生活を正しく描いたとみられる。そこには偏見は全く見えなくて、ロンドン自身がより深く中国人のことを理解したと認識できる。そして、二つ目は、上の引用文でも少し触れていたが、母親も中国人も純粋な血統にこだわることだ。

“I will have no half pake daughter-in-law,” his mother often reiterated to Ah Kim, pake being the Hawaiian word for Chinese. “All pake must my daughter-in-law be, even as you, my son, and as I, your mother. And she must wear trousers, my son, as all the women of our family before her. No woman, in the she-devil skirts and corsets, can pay due reverence to our ancestors. Corsets and reverence do not go together. Such a one is this shameless Li Faa. She is impudent and independent, and will be neither obedient to her husband nor her husband’s mother. This brazen-faced Li Faa would believe herself the source of life and the first ancestor, recognizing no ancestors before her. She laughs at our joss sticks and paper prayers and family gods, as I have been well told—  
(Jack London 1919:172-173)

もう一つ母親が息子を Li Faa と結婚させたくない原因は、Li Faa が純粋な中国人ではないからだ。ロンドンが血統のことをとても重視した。特に彼の誇りであるアングロ・サクソンの血統を彼の現実生活や文学創作の中でも大切にしている。“Li-Wan, The Fair”<sup>4)</sup>の中では、明らかに白人とインディアンが混血をすることを白人として許すことできないのだし、ロンドンは彼自身の結婚についても、結婚相手の血統を重視していた。従来、ロンドンの中で血統にこだわるのは白人のみだったが、今や中国人も自分たちの血統を大切にしていると描いた。ロンドンは白人と中国人を同一視したとまでは言えないが、それにな

り近づいたとは言えるのだろう。

封建社会の中国では三従と四徳<sup>5)</sup>という道德基準が女性に求められた。母親がこの三従と四徳の思想に縛られていたので、西洋教育を受けた Li Faa は彼女の理想とする息子の嫁ではないのだ。西洋の習慣と中国の封建道德の基準とが矛盾するところである。三従と四徳は儒家思想というより、封建統治の需要と後世の人による儒家思想に対する誤解と考えられるが、そのような考え方が封建社会に確かにあった。ロンドンはここで正しくそれを描くことできたと考えられる。

“The Tears of Ah Kim” 中の会話は、リアルかつ上手に“Ah Kim”と彼の母親との間のやり取りを描いているが、それは当時の中国人のやり方と一致しているほか、下記の一節はとても興味深いものである。

“Paint,” said she, “the ideograph of to marry.” He obeyed, scarcely wondering, with the deft artistry of his race and training painting the symbolic hieroglyphic.

“Resolve it,” commanded his mother.

Ah Kim looked at her, curious, willing to please, unaware of the drift of her intent.

“Of what is it composed?” she persisted.

“What are the three originals, the sum of which is it: to marry, marriage, the coming together and wedding of a man and a woman? Paint them, paint them apart, the three originals, unrelated, so that we may know how the wise men of old wisely built up the ideograph of to marry.”

And Ah Kim, obeying and painting, saw that what he had painted was three picture signs – the picture signs of a hand, an ear, and a woman.

“Name them,” said his mother; and he named them.

“It is true,” said she. “It is a great tale. It is the stuff of the painted pictures of marriage. Such marriage was in the beginning; such shall it always be in my house. The hand of man takes the woman’s ear and by it leads her away to his house, where she is to be obedient to him and to his mother. I was taken by the ear, so, by your long honorably dead father...”

(Jack London 1919:175–176)



主に Ah Kim の母親が “to marry” の意味の漢字の構成についての、そして、その漢字の三つの部分に含まれた意味についての説明をしている。この短篇の日本での唯一の翻訳「阿金の涙のわけ」は『ジャック・ロンドン多人種もの傑作短篇選』に収まっている。この翻訳短編集ではこの一節、特に“to marry”の翻訳は“結婚する”<sup>6)</sup>と直訳されている。ロンドンの原文には“to marry”の構成について“the picture signs of a hand, an ear, and a woman.”と書かれている。つまり“to marry”を意味する漢字は三つの部分から構成されている。即ち、“手”と“耳”と“女”である。“結婚”は意味が通じるが、“手”と“耳”と“女”というこの三つの部分だけでは“結婚”を表していないし、また、後に出てくる、“to marry”の漢字の説明とは関係がないので、翻訳はロンドンの原意に沿っていないと考える。それでは、この三つの部分で構成できる漢字、そして、結婚を意味する漢字はなかなか見つからないと思うが、『清人篆隸字彙』<sup>7)</sup>による、“手”と関係がある漢字はいくつか出て来る。古漢語の中、特に篆書には“又”は“右手”と同じことを意味すると記録されている。ところで、“又”と“耳”と“女”、この三つの部分を組み合わせて見ると、一つの漢字が浮かんでくる。それは“娶る”である。“娶る”の意味は「妻(め)取る」であって、中国語の同じ“娶”と同じことを意味する。ロンドンが言いたいのは“娶る”であり、ただの“結婚する”ではないと考える。今世界中で漢字を使っているのは中国と日本だけである、ロンドンが、常に漢字を使っている中国人や日本人より漢字に詳しいとは思えないが、ただここでは、彼は“娶る”という漢字の構成とその構成から思い出される意味を上手に利用できている。つまり、ロンドンはより中国の文化を理解してきたと言えるので、“The Tears of Ah Kim”は以前に書いた中国人もの作品よりリアルに描くことができたと思われる。

ロンドンが生きていた時代は、中国の封建社会の清王朝が崩壊しつつある時代であり、封建思想の一部が中国人特に年を取った人の中に残存していて、ロンドンが描いた Ah Kim の母親がその代表である。中国人のことを知ることなしに、こんな中国人の考え方に近いものは描けないだろう。この小説を書いたときロンドンは、かなり中国人のことを理解できた、その原因で、中国人に対する偏見も全くなくなったのだろう。

### 9.3. ロンドンが描いた Ah Kim の変化

ロンドンは主人公 Ah Kim が変化しつつあることを描いた。最初の長江の支流で紐を使って船を引き上げる人夫から、最後はハワイで成功した商人となって、西洋教育を受けた

女性と結婚するまで、Ah Kim はどこまで変化できただろう。ロンドンがその変化を描いた原因をここで分析したい。

Ah Kim の出身は長江の支流で紐を使って船を引き上げる人夫だった。中国の長江の流域にこの職業は現実に存在したのだ。ロンドンが中国のこの職場に詳しい原因については、「纤夫」<sup>8)</sup>について調査したのだろう。そして、調査したことをこの小説の中で活用されたと考える。中国を調査することは、ロンドンが中国人の生活に強い関心を持ったことを示している。それはロンドンがより深く中国人のことを理解したことに関わっているのだろう。ロndonは、この仕事は人の尊敬を得られるが、大変な体力がかかるわりには給料がかなり低い仕事だと描いた。Ah Kim は、人の尊敬を集めることのできる仕事を辞め、ハワイにある奴隷のような扱いだが、給料が何百倍も高いサトウキビ畑の仕事を選んだ。この何百倍の給料の誘惑をきっかけにして、Ah Kim は母国の文化と全く違うハワイに行ったのだ。

三年の契約が終わった時、彼は帰国の道を選ばなかった。その後の経歴について、ロンドンは次のように描いた。

But Ah Kim did not return to China. He had observed the business life of Hawaii and developed a vaulting ambition. For six months in order to learn business and English at the bottom ... his attitude toward mere contract coolies had become distinctively aristocratic. The manager offered to raise him to sixty gold ... Instead of accepting, Ah Kim departed to Honolulu and in the big general merchandise store of Fong & Chow Fong began at the bottom for fifteen gold per month. He worked a year and a half, and resigned when he was thirty-three, despite the seventy-five gold per month his Chinese employers were paying him. Then it was that he put up his own sign: Ah Kim Company, General Merchandise. (Jack London 1919:169)

Ah Kim は、自分の将来はハワイでビジネスをやることだと決めるとハワイで英語やビジネスのやり方を勉強した。自分のやりたいことを勉強するため、自分の店を出すまで高給料を出してくれた会社を二回も辞めた。この時の Ah Kim は種々な西洋の知識を勉強したが、彼の内面は依然中国人のままである。ロンドンは、彼の家を中国式の庭園にしたこと、彼がやはり足が小さい中国人の女が好きであること、という二つのことを描いた。Ah Kim は

ハワイで成功したが、彼の中では、中国の考え方の影響が依然として強かった。もちろん、文化の壁を超えることは簡単なことではない。ロンドンの一つ前の中国人もの小説“Chun Ah Chun”の主人公 Ah Chun の結末は、この文化の壁を超えられなかったことと、結局中国に戻ってしまったことを描いた。

しかし、“The Tears of Ah Kim”の主人公 Ah Kim は変化しつつある。まず、彼の好きな女性のタイプが変わった。徐々に西洋生活に慣れて来た Ah Kim の好きなタイプは西洋文化を受けた女性となった。

No small-footed wife did he want now, but a free, natural, out-stepping, normal-footed woman who, somehow, appeared to him in his daydreams and haunted his night visions in the form of Li Faa, the Silvery Moon Blossom. ... the wearer of white-devil skirts and corsets and high-heeled slippers? (Jack London 1919:172)

Ah Kim の好みは、足の小さい中国人の女性から、白人がよく着ているスカートを着て高いヒールが付いている靴を履く西洋文化を薫陶された Li Faa になったのだ。Ah Kim は西洋文化に接近し始めたと思われる。直接に言葉を使って相手に自分の愛を表すことは中国人のやり方ではない。それは、Ah Kim の母親が自分の愛を直接的に言葉で表現せず代わりによく彼を殴った一つの原因だと考えられる。しかし、Ah Kim は“Silvery Moon Blossom”のような言葉を使って自分の愛をうまく表現できた。他にも“... O Moon Lily, will I tell you.” “... my Flower of Serenity, my Perfect Rest.” という表現があったので、ロンドン Ah Kim を西洋文化に馴染んでいる人物として描いた。

最後に、Ah Kim は母親が亡くなった直後に Li Faa と結婚した。特に、Ah Kim は母親の葬式の前に結婚式を行ったので、母親の死には彼にとって特別な意味が含まれている。つまり、中国の思想の縛りが彼の母親と共に消えてしまったことだ。ロンドンが最後に Ah Kim と Li Faa が結婚できたことを描いたことは、中国人 Ah Kim は徹底的に西洋社会に受け入れられたとみなされる。つまり、人種間の壁を超えたことを描いたのだろう。そして、ロンドンは Li Faa の結婚の相手は中国人しかないことを描いたが、その理由は、彼女には二人の夫がいたが、中国人の夫の方がやさしかったし、白人の夫にはよく暴力をふるわれたからだ。ロンドンは彼の『アダム以前』と『赤死病』<sup>9)</sup>の中で白人の夫が自分の妻に対して暴力を振るうことを描いたので、一部の白人の欠点を白人に偏見をもたれた中国人がよ

く克服していることを描いたことは、ロンドンには中国人に対する偏見が全くなくなったことを意味すると理解できる。中国人をアメリカ社会に受け入れるようになったと言える。この時のロンドンは人種偏見だけでなく、人種間の壁さえ超えられると認識したとみなされる。

注

- 1) 中国語の翻訳は“子曰：事父母几諫。见志不从，又敬不违，劳而不怨。”となっている。
- 2) 中国語の翻訳は“子曰：父母之年，不可不知也。一则以喜，一则以惧。”となっている。
- 3) 中国語の翻訳は“羊有跪乳之恩，鸦有反哺之义”となっている。
- 4) ロンドンの早期の作品であって、主な内容は、インディアン男性に奪い取られた白人女性とそのインディアン男性の話である。
- 5) 女性に求められた封建的な道徳基準。三従とは、「家にあつては父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従う」ことで、四徳とは、「品德、ことば、姿態、家事」を指す。
- 6) “結婚する”という訳は、『ジャック・ロンドン多人種もの傑作短篇選』中の「阿金の涙のわけ」の P.176-177 に三回も出てくる。
- 7) 『清人篆隸字彙』の P.164-165 にある。
- 8) Ah Kim が中国で従事した職業の人間、つまり、河辺で紐を使って船を引き上げる人夫は、中国語で「纤夫」という。
- 9) ロンドンはこの二つの小説の中では妻を殴る白人の夫を描いた。ロンドンはこの行為についての解釈を帰先遺伝としている。

## あとがき

本研究では、ロンドンの中国人に対する人種偏見の変化及び変化を起こした原因について述べてきた。ロンドンが中国人に対してもった人種偏見の具体的な変化をまとめると、以下のようなになる。

まず、最初の作品“White and Yellow”、“Yellow Handkerchief”では、ロンドンはアメリカのカリフォルニアにいた中国人を描いた。その時のロンドンにはアメリカにいる中国人しか見たことがない、つまり、中国人のことをあまり理解していなかったため、中国人に対して当時一般的なアメリカ人が持っていた人種偏見しかもっていなかったのだ。普通のアメリカ人と同じように中国人のことを軽蔑して、中国人に対する興味はそんなに高くなかったと言える。ここで著者は、「蔑視的な偏見」という言葉をもたらした。つまり、最初のロンドンには中国人のことを研究する必要のない、能力がない人種と考えていたのだ。

そして、日露戦争取材しに行く前に、東洋について調査した。ロンドンが調査した結果は、当時流行していた「黄禍論」と結びつき、中国人は白人に対して脅威の存在と改めて認識した。日露戦争の取材で中国まで来て、中国と中国にいる中国人のことを自分の目で見て、日本人と朝鮮人と中国人を比較できて、中国と中国人の優れたところに気づいた。ロンドンはアメリカ人として、自分が気づいた中国と中国人の優れたところにより、より中国からの脅威を感じ、ついに、“The Yellow Peril”を書いた。ここで著者は、「評価的な偏見」という言葉をもたらした。つまり、ロンドンの中には中国人に対する偏見が依然として存在していたものの、中国人を有能な人種として改めて認識した。ロンドンには有能な中国人は白人の統治にとって脅威の存在であるため、より評価して、研究すべき対象だと考えていたのだ。ロンドンの中にはこのような考えがあったため、より中国人のことを悪く書く傾向があった。そのため、一番ひどい中国人もの作品“The Unparalleled Invasion”が誕生したのだ。

次に、ロンドンは自分が所有した船スナーク号で世界の旅を計画したが、途中で病気になってその旅をあきらめた。計画の中ではロンドンは中国まで行くつもりだったが、途中で終わったため、結局中国まで行けなかった。しかし、この旅で大きな収穫があった。つまり、アメリカ本土以外のハワイで生活している中国人を目にしたのだ。ハワイにいる先住民と白人と中国人がうまく共存していることを見て中国人に対する理解がより深くなったため、中国人からの脅威は自然に弱まった。その時書いた中国人もの小説“The Chinago”

と“Chun Ah Chun”からこの傾向を読み取ることができる。その旅が終わってアメリカに帰って間もなく、ロンドンではエッセー“*If Japanese Wakens China*”を書いた。このエッセーと5年前に書いた“*The Yellow Peril*”と比較してみると、口調がだいぶ変わって、ロンドンの黄色人種脅威論はかなり弱まったと感じられる。

最後に、ロンドンは療養のために2回もハワイに行った。そこで、ロンドンが中国人のことをさらに深く理解できて、ハワイを舞台にして中国の道德の基本的な存在「親孝行」についての小説“*The Tears of Ah Kim*”を書いたのだ。この小説を読んでも、最後のロンドンには中国人に対する偏見が全く見えないし、彼が中国の文化についてもある程度理解できたことがわかる。

以上のことから、一方的にロンドンを人種差別主義者や社会ダーウィニズムの信奉者と位置づけると、かなり偏っていると言える。ロンドンの中国人観は中国人に対する理解にしたがって次第に変化している。“*The Yellow Peril*”や“*The Unparalleled Invasion*”に留まってロンドンを評価することは不公平だと考えている。

まとめると、明確になったことは二つある、一つ目は、ロンドンは単なる人種差別主義者ではないということだ。かつて彼は中国人に強い偏見を持っていたが、中国人と中国の文化に対する理解が深まると、次第に、中国人に対する偏見が弱まって行く傾向がある。そして、最後に中国人に対する偏見が全く見えなくなったのだ。ロンドンの研究を通じて明確にしたことの二つ目は、自国を中心として偏見を持つ人はどうしても他人種を公正に評価できない。そして、不十分な知識と偏見を持つ人は、他人種に対する評価を誤りやすい。より公正な立場に立って、客観的な視点で他人種や異文化を見ると、たとえ理解が不十分だとしても、より正確な評価に近づくことができる。ある程度の正確な知識を持って、公正かつ客観的な立場を加えれば、たとえ他人種のことをすべて理解しなくとも、他人種に正確な評価ができると考えている。それは、いとも簡単な行為に見えるが、現実には実現することはかなり困難である。まず、全く違う文化と道德習得という背景の中でお互いに理解し合うことはかなり難しいものである。そして、優位の立場から平等な立場に転換することにはかなり勇気と知識が必要だ。

今の世の中、人種偏見や黄色人種脅威論などが依然として存在している。百年前のロンドンの中国人に対する考え方の進歩が、今の時代においても手本として、重要な意味を有していると考えられる。

ロンドンの人種偏見の変化は中国人についてだけではないと考えている。今後の課題で

は、ロンドンの日本人観を取り入れて、また、他の人種に広げ、ロンドンの人種偏見の全体像を明確したいと考えている。そして、南海での旅はロンドンの人種偏見が弱まり始める転換点なので、ロンドンの南海での見聞をより詳しく調べて、ロンドンに対する影響をより明らかにしたいと考えている。



## 主要参考文献

英語文献：

- Cheng, Lucie.Bonacich, Edna.1984 *Labor Immigration under Capitalism* University of California Press (Berkeley, Los Angeles, London).
- Chaney, George Leonard.1880 *“ALO’HA!” a Hawaiian Salutation* Roberts Brother, Boston.
- Dye, Robert Paul “Merchant Prince Chun Afong in Hawai’i, 1849-90” (Chinese America: History and Perspectives 2010 23-36) The Chinese Historical Society of America.
- Foster, John Watson.1903 *American Diplomacy in the Orient* Mifflin and Company, Boston.
- Giles, Herbert Allen.1909 *A History of Chinese Literature* D. Appleton and Company, New York
- Gowen, Herbert Henry.1892 *The Paradise of the Pacific: Sketches of Hawaiian Scenery and Life* Skeffington & Son, London.
- Hamilton, David Mike.1986 *The Tools of My Trade Annotated Books in Jack London’s Library* University of Washington Press.
- Hearn, Lafcadio. 1905 *Japan, an Attempt at Interpretation* The Macmilian Company, New York
- Hearn, Lafcadio.1953 *Kwaidan* 研究者出版, 東京.
- Kershaw, Alex.1997 *Jack London a Life* London: Harper Collins Publisbers
- Kingman, Russ. *A Collector’ s Guide to Jack London First Appearances Jack London* Research Center California. (私家版)
- Kingman, Russ.1979 *A Pictorial Life of Jack London* Crown Publishers, New York
- Kingman, Russ.1979 *No Mentor But Myself*(A Collection of Articles, Essays, Reviews, and letters on Writing and Writers) New York National University Publications. (私家版)
- Kingman, Russ.1992 *Jack London a Definitive Chronology* David Rejl, California
- Krausse, Alexis Sidney.1903 *The Far East: Its History and Its Question* Grant Richards, London
- Lye, Colleen.2005 *America’s Asia: racial form and American literature, 1893-1945*

- Princeton University Press, Princeton and Oxford.
- London, Jack.1905 “White and Yellow”, “Yellow Handkerchief” *Tales of the Fish Patrol*  
Plainview New York
- London, Jack.1911 “The Chinago” *The Works of Jack London* The Review Company,  
New York.
- London, Jack.1919 *On the Makaloa Mat* Grosset & Dunlap, New York.
- London, Jack.1919 *Table of Contents* Internationa Magazine, New York.
- London, Jack.1950 *The Mutiny of the Elsinore* Arcadia House, New York.
- London, Jack. [Ed] King Hendricks and Irving Shepard 1970 *Jack London Reports*  
Doubleday & Company, New York.
- London, Jack.1976 *Tales of the Fish Patrol* Books for Libraries Press Plainview, New  
York.
- London Jack.Edited by Earle Labor, Robert C. Leitz, Milo Shepard 1988 *The Letters of  
Jack London* Stanford University Press, Stanford, California.
- London, Jack.1982 *Jack London* The Library of America, New York.
- London, Jack.1984 *Jack London’s Tales of Hawaii* Kailua: Press Pacifica.
- London, Jack.1988 *The letters of Jack London–Volume One: 1896-1905* Stanford  
University Press, Stanford, California.
- London, Jack.1988 *The letters of Jack London–Volume Two: 1906-1912* Stanford  
University Press, Stanford, California.
- London, Jack.1988 *The letters of Jack London–Volume Three: 1912-1916* Stanford  
University Press, Stanford, California.
- London, Jack. (ラス・キングマン、辻井栄滋) (編) (1989) *The Works of Jack London*  
Hon-No-Tomosha, Tokyo.
- London, Jack.1989 “How I Became a Socialist” *War of the Classes* Hon-No-Tomosha,  
Tokyo.
- London, Jack. Introductory Analysis by Daniel A. Metraux 2009 *The Asian Writings of  
Jack London* The Edwin Mellen Press, New York.
- Nitobe, Inazo 2003 *Bushido the Soul of Japan* New York: IBC Publishing.

Paul, Carus. Suzuki, Daisetz Teitaro (鈴木大拙) .2015 *Yin chih wen : the tract of quiet way* Global Grey ([www.globalgrey.co.uk](http://www.globalgrey.co.uk)).

Rohmer, Sax.1913 *The Mystery of Dr. Fu Manchu Methuen.*

University of Hawaii Center for Chinese Studies 1988 *Sailing for the Sun—The Chinese in Hawaii 1789-1989 Three Heroes*, Publishers. Honolulu, Hawaii.

日本語文献と中国語文献：

池上彰 2016 『池上彰の世界の見方アメリカ』 小学館, 東京.

稲盛和夫 2001 『稲盛和夫の哲学——人は何のために生きるのか』 PDP 研究者, 東京.

大浦暁生 (編) 2014 『いま読む直すアメリカ自然主義文学』 中央大学出版部, 東京.

大浦暁生 (編) 1989 『ジャック・ロンドン』 三友社, 東京.

大野晋 1994 『日本語の起源』 岩波書店, 東京.

北川博邦 1985 『清人篆隸字彙』 東京 雄山閣出版株式会社.

金谷治 1986 『死と運命—中国古代の思想』 法蔵館.

金谷治 1999 『論語』 岩波書店 東京.

クラリス・スタツズ(Clarice Stasz) 大矢健、岡崎清、衣川清子など (訳) 『アメリカン・ドリーマーズ』 (*American Dreamers Charmian and Jack London*) 文明書房, 東京.

ケネル無方 2015 『日本人に「宗教」は要らない』 KK ベストセラーズ, 東京.

小尾郊一 1988 『中国の隠遁思想』 中央公論社, 東京.

田中幸子 1981 『ジャック・ロンドンとその周辺』 北星堂書店, 東京.

陳舜臣 2016 『日本人と中国人』 祥伝社, 東京.

辻井栄滋 2001 『地球的作家ジャック・ロンドンを読み解く大自然と人間—太古・現在・未来』 丹精社, 東京.

森鷗外 1902 『黄禍論梗概』 春陽堂, 東京.

森孝晴 2014 『ジャック・ロンドンと鹿児島』 高城書房, 鹿児島.

ジャック・ロンドン 辻井栄滋、芳川敏博 (訳) 2011 『ジャック・ロンドン多人種もの傑作短篇選』 明文書房, 東京.

ジャック・ロンドン 大浦暁生、辻井栄滋、ラス・キングマン (編) 1989 *The Works of Jack London* 本の友社, 東京.

ジャック・ロンドン 辻井栄滋 (訳) 1986 『ジョン・バーリコーン』 社会思想社, 東京.

- ジャック・ロンドン 辻井栄滋、森孝晴（訳）1999 『アメリカ残酷物語』 新樹社。
- ジャック・ロンドン 辻井栄滋、森孝晴、芳川敏博（訳）2014 『ジャック・ロンドン名論卓説集』 明文書房，東京。
- スタインベック 谷口陸男（訳）1975 『怒りのぶどう』 講談社，東京。
- スペンサー・ハアバート 澤田謙譯（訳）『第一原理』 春秋社版，東京。
- 夏目漱石 1909年12月6日 満洲日日新聞 第735号第1面 韓満所感（下）。
- 新渡戸稲造 樋口健一郎、国分舞（訳）2017 『武士道 Bushido: The Soul of Japan』 IBCパブリッシング株式会社，東京。
- パール・バック 小林政子（訳）2013 『私の見た日本人』 国書刊行会，東京。
- 藤崎康夫 1997 『日本人移民-1 ハワイ・北米大陸』 日本図書センター，東京。
- ラス・キングマン（Russ Kingman）辻井栄滋（訳）1989 『地球を駆け抜けたカリフォルニア作家——写真版ジャック・ロンドンの生涯』 本の友社，東京。
- 『日本国語大辞典』 第二版 第十二巻 2006 小学館，東京。
- ルース・ベネディクト 越智敏之、越智道雄（訳）2013 『菊と刀』 平凡社，東京。
- 魯迅 駒田信二（訳）1998 『阿Q正伝・藤野先生』 講談社，東京。
- Ronald Takaki 富田虎男（訳）1995 『多文化社会アメリカの歴史-別の鏡に映して』 明石書店，東京。
- 山本常朝 1969 『葉隠』 岩波書店 東京。
- 山本博文 2013 『武士道の名著』 中央公論新社 東京。
- 山本七平 2016 『「空気」の研究』 文藝春秋 東京。
- 湯浅邦和 2012 『論語』 中央公論新社。
- 若槻泰雄 1972 『排日の歴史』 中央公論社 東京。
- D.L.Kirkpatrick（編）青山みゆきほか（訳）1991 『アメリカ文化作家作品事典』 東京：本の友社，東京。
- Rune Grousset 何滄翻译 2013 《草原帝国》 重庆出版社，重庆。
- 汗青 2015 《欧亚飓风-匈奴王阿提拉》 时事出版社，北京。
- 王丽耕 朱璐 2010 〈并非全是丑化——从《陈阿春》看杰克·伦敦的中国观〉 江西科技师范学院。
- 张泽川 2014 *LEI OF MEMORIES* 《檀香花环》 中国电影出版社。
- 沈大力 〈「黄禍」作者杰克·伦敦作品曾被收入教科书〉 《光明日报》 2013年8月。

吳冰 〈矛盾的杰克·伦敦〉 《文艺报文学周刊》 2001年8月。

韩红梅 〈试论《中国佬》中的中国劳工形象〉《西南交通大学学报》(社会科学报) 2012年06期。

李濱 〈论杰克·伦敦中国佬中华人形象的嬗变—以阐释学接受美学批评为观照〉《广东技术师范学院学报》 2015。

[www.tahitiheritage.ph/chim-soo-kung-martyr-chinois/](http://www.tahitiheritage.ph/chim-soo-kung-martyr-chinois/)

Welcome-tahiti.com. (Chinese-Tahitians: The First Naturalized immigrants 1865-1973)